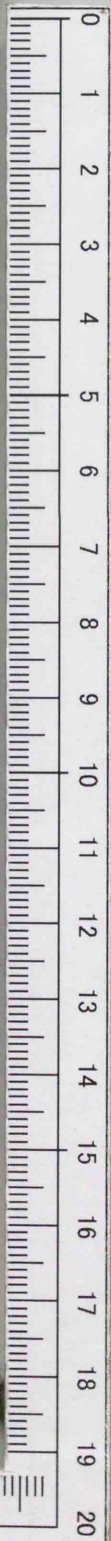




新制  
中國等  
四卷

教科書文庫  
4  
810  
41-1930  
2000044026

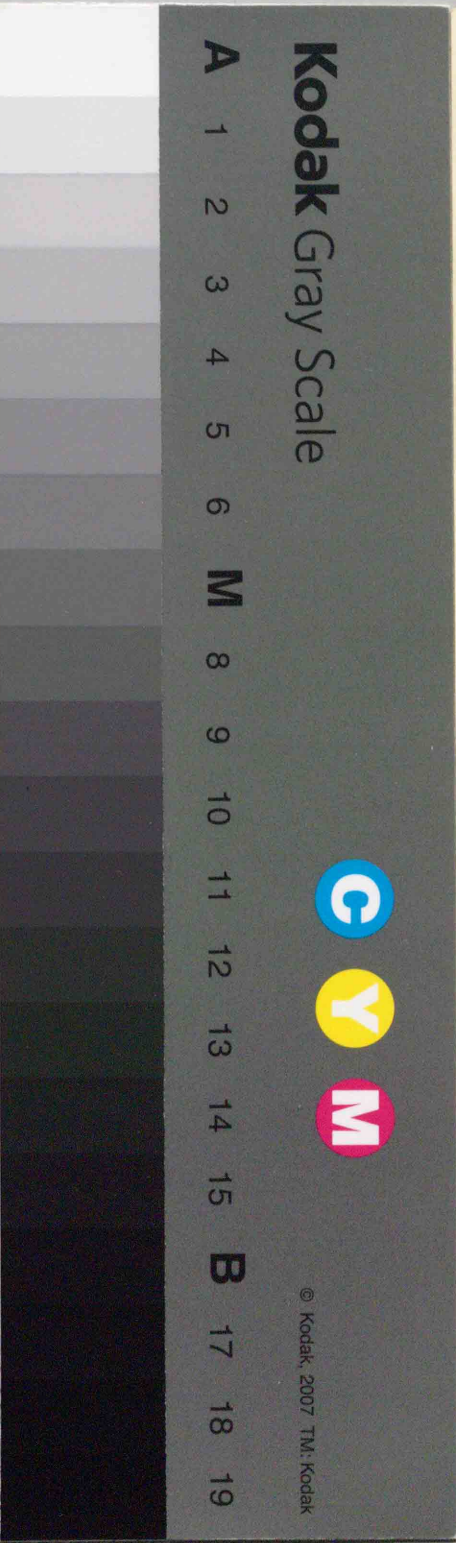
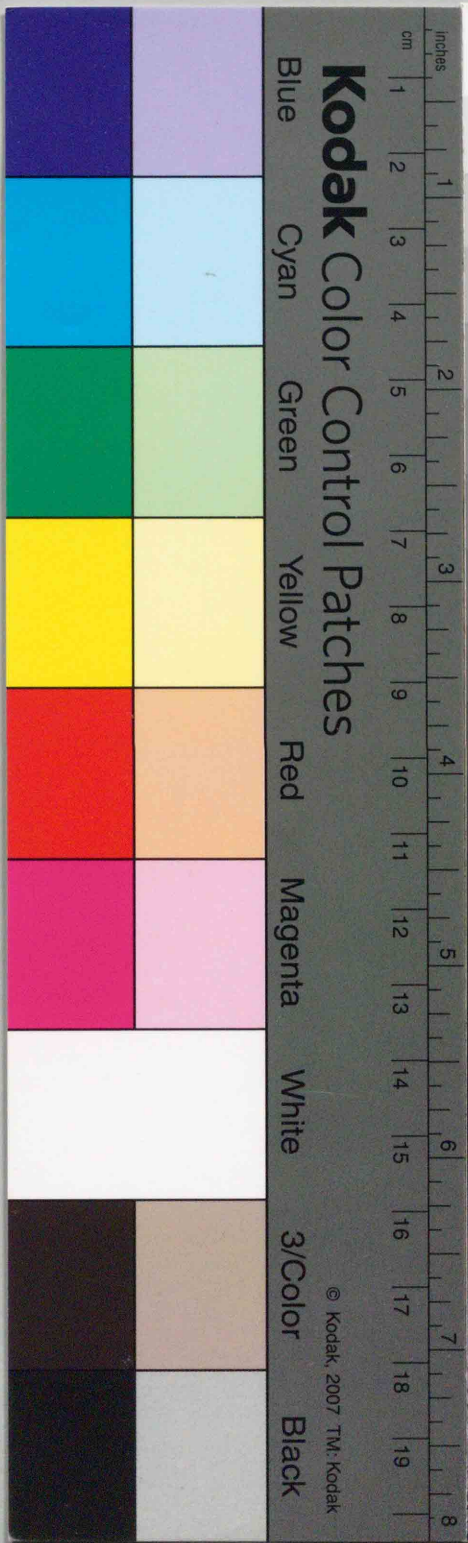


42028

教科書文庫

4
810.
41-1930
20000 44026

85  
1930



© Kodak, 2007 TM: Kodak

© Kodak, 2007 TM: Kodak





日三十月三年五和昭  
濟定檢省部文  
用科語國校學中

教科書文庫  
4  
810  
41-1930  
2000044026

制 新  
文 國 等 中

四 卷

士博學文  
編 雄 武 村 松

広島大学図書

2000044026

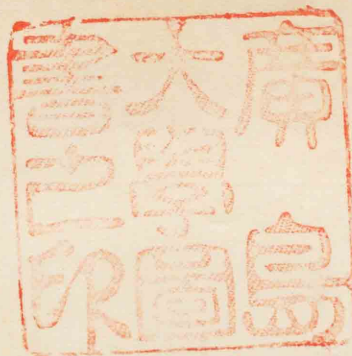


阪大・館文寶・京東

資 料 室

375.9  
Ma20





本書は國語及び國文學の本質と時代の趨勢に鑒み其の編纂法に於て舊套以上に一段の進出を試み更に各卷並に通卷の綜合的體系と意趣とを重視し國語教授上最新の用書たるに堪へしめんことを期したるもの編者はこれが適當なる運用に依りて本科の目的の完全に達成せられんことを切望す。其の編纂趣旨の詳細は別に出せる小冊子に就いて高覽あらんことを冀ふ。



新制中等國文 卷四 目次

一	古事記を通じて見た我が祖先の生活……相馬御風	一
二	詩境……夏目漱石	二〇
三	晩春の別離(詩)……島崎藤村	二七
四	高瀬舟……森林太郎	三五
五	玉かつま抄……本居宣長	三七
六	五月……永井荷風	四三
七	江戸時代の俳句(上)……	四九
八	泉(詩)……山宮允	五〇
九	嚴島神社……五十嵐力	五三
一〇	平家雑感……高山林次郎	五五



一一	方丈記抄	鴨	長明	二
一二	古今と新古今			六
一三	旅	鶴見祐輔		七
一四	落花の雪	「太平記」		八
一五	芳流閣	瀧澤馬琴		五
一六	鹽原	尾崎紅葉		二
一七	床の秋風	「東關紀行」		六
一八	博雅の三位	「今昔物語」		一〇
一九	ベイトーウエン	中澤臨川		一〇
二〇	長柄堤訣別	坪内雄藏		二五
二一	萬里長城(詩)	土井晚翠		二六
二二	景雲頌(歌)	與謝野晶子		三三
二三	菅公の配流	「大鏡」		三五

二四	井伊大老	中村吉藏		一四
二五	進軍	矢代幸雄		一五
二六	倫敦塔	夏目漱石		一五
二七	秋の氣魄	豊島與志雄		一六
二八	雨の都	笹川種郎		一七
二九	新院御所軍評定	「保元物語」		一七
三〇	光頼卿参内	「平治物語」		一八
三一	歳晩の名家	横山健堂		一八
三二	江戸時代の俳句(下)			二〇
三三	討入の光景を報ず(書柬)	榎本其角		二四
三四	狂歌と川柳			二八
三五	笑	戸川秋骨		三三
三六	狐塚	「續狂言記」		三九



三七	從弟に與ふる書(書柬)	吉田絃二郎	二四
三八	氷上遊戯(詩)	高村光太郎	二四
三九	實朝の歌		二六
四〇	鉢木	「寶生流謠本」	二六
四一	五重塔	幸田成行	二五
四二	常磐樹(詩)	島崎藤村	二六
四三	國の柱	北畠親房	二四
四四	徒然草抄	吉田兼好	二六
四五	日本趣味	芳賀矢一	二七

新制中等國文 卷四 目次終



新制中等國文 卷四

古事記

元明天皇の和銅五年太安萬侶撰。神代から推古天皇の朝までの事を記したるもの。  
 相馬御風文學者。名は昌治。明治十六年新潟縣生。  
 日本書紀 元正天皇の養老四年舍人親王等の勅を奉じて編したる國史。神代から持統天皇の朝までの事を記したるもの。

一 古事記を通じて見た我が祖先の生活

相馬御風

我々の祖先の最も力ある生活を後世の我々に示すものは、ひとり古事記並びに日本書紀あるのみである。殊に古事記にあつては、徹頭徹尾、潤飾なき日本民族そのものの生活の記録である。その史實上の價值はどうであつても、とにかく我等の祖先の生活全體が、かの古事記一卷に表象化せられてゐることだけは、疑ふわけには行かぬ。そして我々日本民族の生活史の殆ど全部を包んでゐるといつてもいゝ程な、かの儒佛二教の空氣の全然混じつてゐない我が民族の記



録は、唯これあるのみである。この點に於て、我が日本民族にとつて最も尊い、そして最も廣く、最も深く讀まれ味は、るべき書物は古事記である。古事記は實に、我等日本民族の生活の源であると思ふ。

古事記を讀んで我々の感ずるところのものは、たゞ偏へに生きんとする人間の力である。あらゆるものを自己の生活に統一しようとする努力である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀なかつた。彼等は人間を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生活の一部で、彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等の身にまとふべき衣服の材料を彼等に供する蠶も、彼等の生命を繋ぐべき稻も、粟も、小豆も、麥も、大豆も、皆悉く彼等と同じ人間の肉體から分化して出たものと觀た。それほどまでに彼等は人間の生活を擴大してゐた。彼等の眼中には、人間の運命の最後は死でなくして、發展極りなき生であつた。死の國にある伊邪那美命が、汝が國の人

熱烈  
精神の  
奮闘  
の  
象徴

草、一日に千頭絞り殺さむ。」と言はれたのに對して、生の國にある伊邪那岐命は、汝さし給はば、我はや一日に千五百産屋立ててむ。」と答へられた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐる。殊に古事記一卷を通じて、熱烈な生の力が飽くまでも死の力と戰つて、それにうち勝たう、それを脱れ出ようと悶えてゐる事實が、到る所に書かれてゐることは、最も注目すべきことである。後世の日本人に見るが如き、死に對してひたすら悲しむやうな態度は少しも見えない。死に對して悲しみ嘆きは、てはあきらめるやうなことは、我等の祖先にはなかつた。彼等の死に對して悲しみ嘆く感情は、常に一轉して、死に對する憎惡の念となり、挑戰の力となつた。彼等は死といふ事實に對して、あきらめる代りに戰つた。彼等は如何なる境遇にあつても、常に生きんことを欲した。生きようと努力した。彼等の生の欲求は、死をも生と變へなければ止まなかつた。



次に我等祖先の神は、人間の生活力の象徴である。實際我々の祖先くらゐ、何にでも神といふ尊稱をつけた民族は他にない。さうかといつて、他の未開の民族に見るやうな多神的でもなく、また野蠻な自然物崇拜でもない。神はすべて人間であつた。威力を有する人間が即ち神であつた。随つて謂はゆる敬神の念には、救済を祈るやうな分子はなかつた。敬神はたゞ肉身の源、生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絶對的の主權者とは思はなかつた。敬神は強大なる人格に對する讚美と、自己の生命の源に對する讚美とに外ならなかつた。祈念はまた常に幸福本位であつた。我を捨てて神にすがるといふよりは、我の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならなかつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大せられた象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふところに強固な基礎を有する我等の

祖先の敬神觀念は、他面に於てその念力に逆らふところのもの、の衰滅を信じた。

偏へに生活の發展と擴大とを意志とした我等の祖先の生活は、随つてまた非常に努力的なものであつた。境遇に屈することを知らぬその生活は、常に意志そのものの悲劇であつた。我が國の文藝的産物で、悲痛な生活意志の發現を見得るものは、古事記を措いて他にないと言つてもよいからである。この點に於て最高な意味の悲劇的人格は、我が國の歴史中、古事記以外には求め得られないと思ふ。古事記中に書かれた數多ある悲劇的人物の中で、最も我々の心を引くのは日本武尊である。尊はいかなる難事をもし遂げて、自分の力を發展させようとした。自分の事業のためには、最愛の後、弟、橘比賣命をも眼前で犠牲とするに躊躇しなかつた。それでゐながら、なほ尊はその妻を慕うては、阿豆麻波夜あづまはなの嘆聲を禁じ得なかつた。



苦しい境遇  
父帝に疎外せ  
られ給うたこ  
とを云ふ。

かくて尊はあらゆる困難と戦ひ、あらゆる危険を冒して、東北地方  
平定の大任を一步々々に果した。自己の苦しい境遇を知りながら



日本武尊 (松本楓湖筆)

も、なほ自己の努力を惜  
しまなかつた。併し、そ  
の運命は遂に不幸なも  
のであつた。如何なる  
強敵に對しても挫けな  
かつた尊も、病氣にけ敵  
しなかつた。東北討伐  
の大業を果して都へ歸  
る途上、尊は終に伊勢でこの世を去られてしまつた。「我が心、恆は虚  
をも翔り行かむと念ひつるを、今我が足え歩まず、當藝斯の形に成れ  
り。」といふ尊の歎聲は、實に悲壯な響が籠つてゐる。歩一步に疲れ

當藝斯  
船の古言。

て衰へ行く病軀をよろめき運びながら、尊は絶えず故郷なる大和の  
國をこふる歌を歌はれた。歌ひながら終に斃れられた。就中

いのちの またけむひとは  
たみごも 平群の山の

くまがしが葉を 髻華に挿せその子

といふ歌の如きは、最もよく尊の生を愛せられる心の熱烈であつた  
ことを示してゐる。身は逆境にあつて、旅に斃れようとしたながらも、  
なほかつ「命の全からん故郷人よ、汝等の命の全からん限りは、隠白檜  
の葉を頭に飾つて楽しくおもしろく遊べ。」と歌ふ。これを後世の  
死を悲しみ、運命を恨む數多の人々の歌と比べて見ると、當時の人々  
の生活に對する心持の、いかに積極的であつたかに驚かれるではな  
いか。更に驚かれることは、日本武尊が薨去の後、大きな白鳥と化し  
て、所定めず、行方知れず、天翔り行き給うたことである。御子たちが



哭き叫びながら慕ひ追ふのを顧みずして、かの大きな白鳥は野より海へ、海より山へ、山より海へと、天翔り天翔りして、最後はその行方をも知られなかつた。白鳥の止る毎に造られた幾つかの御陵は、遂に日本武尊が最後の住家ではなかつた。御陵はすべて空虚な外形のみで、日本武尊その人の生命は、遂に止る所を知らなかつた。發展極りなき日本武尊の生命は、結局、墓を脱れて、生きる白鳥となつて天翔り行く生命であつた。

この日本武尊の生涯のやうに男々しい努力に充ちた生活は、我が國の歴史に於ては、殆ど他に求められない。日本武尊の生涯は、一刻も休みなき努力の生涯であつた。いかなる境遇にあつても、尊の熱烈な生活力は、常に外に向つて發展した。この偉大な生活の發展力の向ふ所、尊はいかなる敵とも戦ひ、いかなる敵をも倒さねば止まなかつた。尊は自ら知れる逆境裡にあつて、死に瀕しながらも、なほ聲

をあげて生を讚美する歌を歌つた。尊は死してもなほ墓の暗闇を脱れて、天翔り天翔つた。かくの如く最後までも熱烈な生の力の充ち満ちた生涯は、我が國の文藝的産物中、古事記を措いて他のどこに見出し得られようか。尊を通じて感じられる我等の祖先の生活そのものに對する心持が、いかにも我々には慕はしいのである。人間の生活意志そのものの悲痛な發現は、我が國の藝術的産物中、ひとり古事記に於てのみ見られると思ふ。

外に向つて最近著しい國家的發展をなし來つた我が日本民族は、内的方面にもまた最近著しく革命的徑路を歩みつゝある。無論それには外國思想の影響が多分にあるのだが、しかし、大體から見て、從來の消極的思想に對する新た積極的思想の勃興と見て、差支なからう。永い年月の間續いて來た我々民族の消極的生活に對する新しい生活慾の勃興、その生活全體の革新の過渡期、それが現今の我が文



藝界を中心とした思潮の状態ではなからうか。かう考へて見て、更にかの古事記時代に於ける我々の祖先の積極的生活の空氣を味はつて見ると、我々には一種堪へ難い憧憬の念が湧くのを覺える。

「文章世界」

## 二 詩境

### 夏目漱石

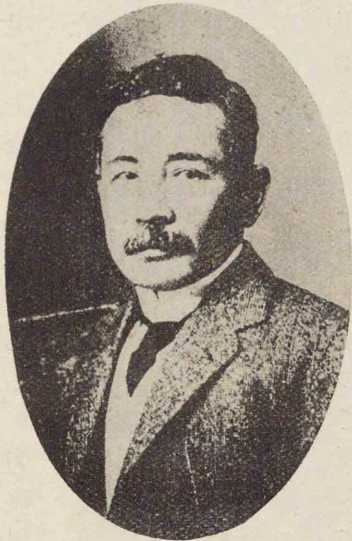
山路を登りながら考へた。

智に動けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると心安い處へ引つ越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出来る。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程か寛げて、東の間の命を東の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩

夏目漱石  
小説家。名は  
金之助、東京  
市の人。大正  
五年歿、年五  
十。

人といふ天職が出来、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に貴い。



夏目漱石

住みにくい世から住みにくい煩を引き抜いて、有難い世界を目のあたりに寫すのが詩である。畫である、或は音樂彫刻である。細かにいへば、寫さないでも唯まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら目に映る。唯己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足りる。此の故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺、縑、無くとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱

カメラ  
camera 寫眞  
の暗箱、即ち  
寫眞機。

無聲の詩  
尺、縑、



し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが朗らかに聞える。せつせとせはしなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されてゐたまらないうらな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕も無い。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。其の上何處までも登つて行く。いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた舉句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體が無くなる。た

シエリー  
Percy Bysshe  
Shelley. 英國  
の詩人。  
一七九二—  
八二二年。



シエリー

鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものの中で、あれ程元氣のあるものは無い。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ちシエリーの詩を思ひ出

して、口の内で覺えた所だけ誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しか無かつた。

前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝかな、われ。  
腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。  
美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る。



なる程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にもよく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く積になれば微塵の苦も無い。菜の花を見てもたゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。かく山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。苦しみの無いのは何故であらう。たゞ此の景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞ此の腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴はぬのであらう。自然の力はこゝに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

は自然である。

苦しんだり、怒つたり、泣いたりするのは、人の世のつき者だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居は無い。理非を絶した小説は少からう。何處までも世間を出ることの出来ぬのが其の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、此の境を解脱することを知らぬ。嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊  
晉陶淵明の詩の句。

採菊東籬下  
悠然見南山

唯これぎりのうちに暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て来る。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

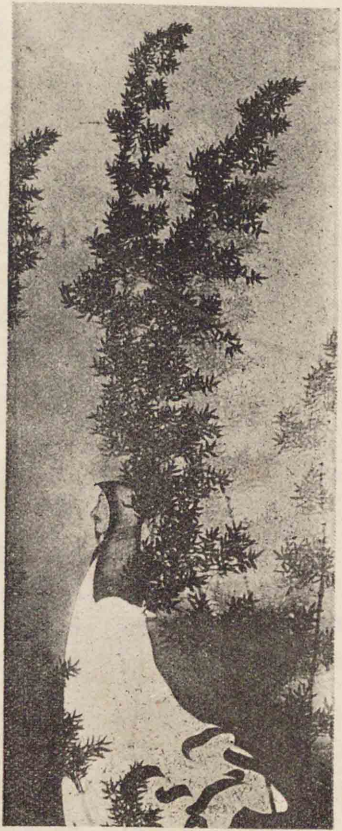
獨坐  
唐王維の詩。

獨坐幽篁裏  
彈琴復長嘯



深林人不知 明月來相照

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立してゐるのである。この乾坤の功德は、近世の小説などの功德ではない。汽船・汽車・權利・義務道徳・禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却して、ぐつすりと寢込むやうな功徳である。二



(筆觀大山横) 明 淵 陶

ある。惜しい事に、今の詩を作る人も詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ／＼呑氣な扁舟を浮かべてこの桃源に溯る者はないやうだ。「草枕」

十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切に

島崎藤村  
詩人、小説家

名は春樹。明治五年長野縣生。

三 晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ  
また短きはなかるらん。  
恨は友のわかれより  
さらに長きはなかるらん。

島崎藤村

佐保姫  
春の女神。

君を送りて花近き  
この高樓に來て見れば、  
みどりにまよふ鶯は  
霞空しく鳴きかへり、  
しろき光は佐保姫の  
春の車を照らすかな。



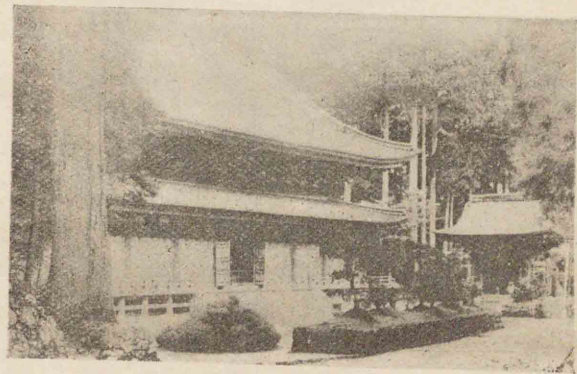
湖 琵琶 琵琶



膽吹・比叡・比良  
近江國にある。

法皇  
白河法皇。

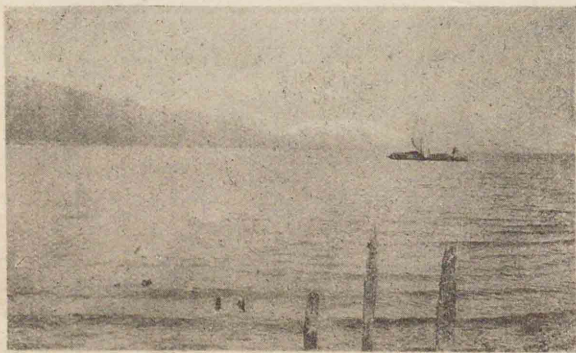
これより君は行く雲と  
ともに都をたち出でて、  
おもへば琵琶の湖の  
岸の光にまよふとき、  
ひがし膽吹の山高く、  
西には比叡比良の峰、  
日は行きかよふ山々の  
深きながめをふし仰ぎ、  
いかにすぐれし想をか、  
沈める波に湛ふらん。  
ながれはむなし、法皇の



比叡山

鈴鹿  
伊賀・伊勢と  
畿内との境に  
ある連山。

夢はるかなる賀茂の水  
水にうつろふ山城の  
みやびの都ゆく春の  
かすめる姿見つくして、  
畿内にせまる伊賀伊勢の  
鈴鹿の山の波とほく  
海に落つるを望む時、  
いかによろづの恨をば、  
空行く鷺に窮むらん。  
春さり行かば青丹よし  
奈良の都に尋ね入り、  
としつき君がこひしたふ



比良山



御堂のうちに遊ぶ時、  
ふるき藝術の花の香の  
伽藍の壁にのこりなば、  
いかに韻を身にしめて、  
深き思にしづむらん。

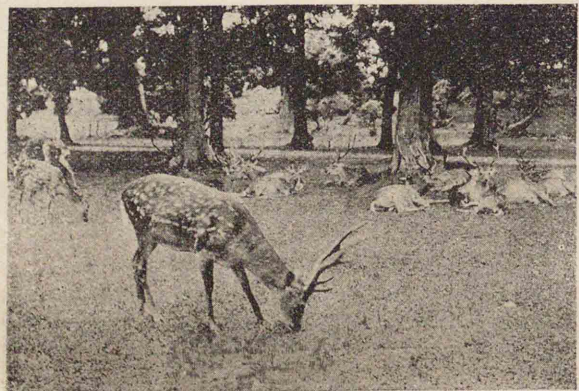
さては秋津の島が根の  
南のつばさ紀の國を  
めぐりて進む黒潮の、  
鳴門に落ちて行く處、  
あまぎは遠く白き日の  
光をもらす雲裂けて、  
目にはるかなる大海の



賀茂川

明石・舞子  
播磨國。

波のをどるを望む時、  
いかに胸打つ音たかく、  
君が血汐のさわぐらん  
または名に負ふ歌枕、  
波に千とせの色映る  
明石の浦の朝ぼらけ、  
松よろづ代の音にひびく  
舞子の濱のゆふまぐれ、  
もしそれ海の雲落ちて、  
淡路の島の影くらく、  
狭霧のうちに鳴きかよふ  
千鳥の聲を聞く時は、



奈良



いかに浦邊にさすらひて、  
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は  
雲を停めん、浦々は  
磯にながる、白波を  
あげんとすらん。よしさらば、

旅路遙かに野邊行けば  
野邊のひめぐと、森行かば  
森のひめぐと探りもて、  
高きに登りあめつちの  
もなかに遊び、大川の  
ながれをきはめ、山々の



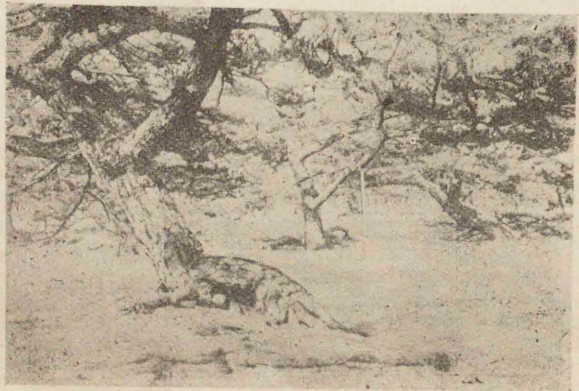
浦歌和

あまのこり 秋

神をもよばひ、谷々の  
鬼をもおこし、歌人の  
魂をも遠く返しつゝ、  
清しき聲をうち揚げて、  
朽ちせぬ琴をかきならせ。

さらば名残は盡きずとも、  
袂をわかつゆふまぐれ、  
見よ影ふかき欄干に、  
けむりをふくむ藤の花  
北行く雁はおほ空の  
霞に沈み鳴きかへり、

彩なす雲も愁へつゝ、



右 明



君を送るに似たりけり。

見送るようであらう。

あゝ、いつか又相逢うて

もとの契をあたゝめん。

梅も櫻も散りはてて

すでに柳は深みどり、

人はあかねど、行く春を

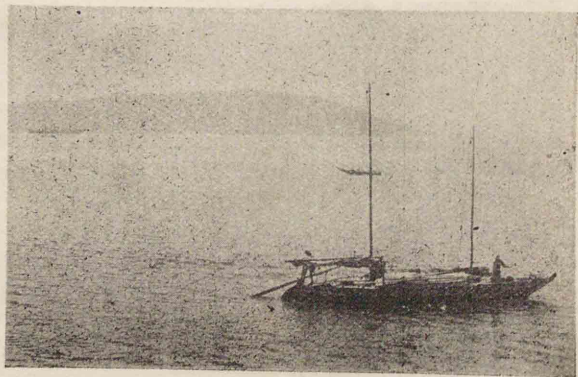
いつまでこゝに留むべき。

われに惜しむな家苞の

一枝の筆の花の色香を。

君が一枝の筆で書しおこしたる、めでたい歌を

「藤村詩集」



鳥路溪

森林太郎

文學者。醫學博士、文學博士。號鷗外。鳥根縣の人。大正十一年歿、年六十三。

### 四 高瀬舟

高瀬舟

いつの頃であつたか、多分江戸白河城を松平定信で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない珍しい罪人が、高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類はないので、舟にも唯一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、唯喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、此の瘦肉の色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪



人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に細かい注意をしてゐた。

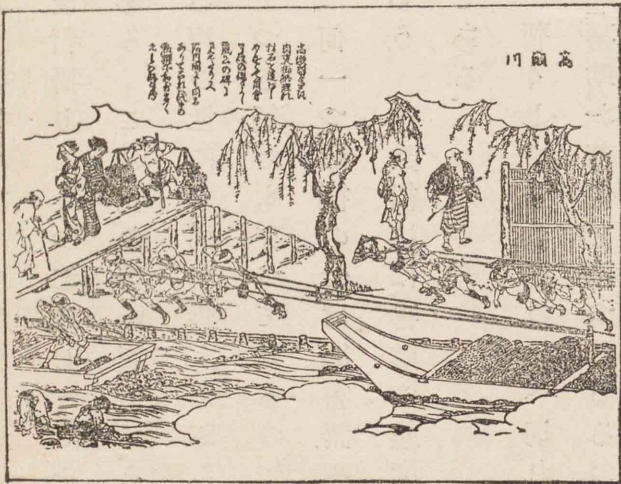
其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭を霞ませ、やう／＼近寄つて来る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、唯舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人でも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで黙つてゐる。其の額は晴れやかで、目には微かな輝がある。

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにある。そして不思議だ不思議だと心の内で繰返してゐる。それは

喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたら、口笛を吹きはじめるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。併し載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それにこの男



高 瀬 舟

じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それにこの男



はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしやその弟が悪い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや、それにしては何一つ辻褃の合はぬ言語や舉動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衛には、喜助の態度が、考へれば考へる程分らなくなるのである。

暫くして、庄兵衛は怵へ切れなくなつて呼び掛けた。

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と云つてあたりを見廻はした喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して、庄兵衛

の氣色を覗つた。

庄兵衛は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求め、いひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。

「いや、別にわけがあつて聽いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聽いて見たかつたのだ。己はこれまでこの舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろ／＼な身の上の人だつたが、どれも、島へ往くのを悲しがつて、見送に來て、一緒に舟に乗る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それに、お前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前は どう思つてゐるのかい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御深切に仰しやつて下すつて、あり難うございます。なる程島へ



往くといふことは、外の人には悲しいことでございませう。その心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出来ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございませう。京都は結構な土地でございませうが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参つたやうな苦しみは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいませう。島はよしつらい所でも、鬼の栖む所ではございませう。わたくしはこれまで、どこも云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませうでした。今度お上で島にゐると仰しやつて下さいませう。そのゐると仰しやる所に落着いてゐることが出来ますのが、先づ何よりもあり難い事でございませう。それに、わたくしはこんなにか弱い體ではございませうが、ついで病氣をいたしたことはございませうから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じ

ます。それから今度島へお遣り下さるに附きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。

かう云ひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣はすと云ふのは、當時の掟であつた。喜助は語を續いだ。

「お恥づかしい事を申し上げなくてはなりませんねが、わたくしは今日まで二百文と云ふお足を、かうして懐に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きました、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それでも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございませう。それがお牢に這入つてからは、仕事をせうに食べさせて戴きます。



わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりません。それにお牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、この二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出来ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出来るか分りませんが、わたくしはこの二百文を、島でする仕事のもと手にしようと思つてをります。

かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい。」とは云つたが、聴く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出来ずに考へ込んで黙つてゐた。庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生

人には吝嗇と云はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足する程手元を引締めて暮して行くことが出来ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が内證で里から金を持つて來て、帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節供だと云つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうなことの無い羽田の家に、折々波風の起るのは是が原因



である。

庄兵衛は今喜助の話を聴いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して無くしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助のありがたがる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をても、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持は、こつちから察して遣ることが出来る。併し、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう／＼口を糊することの出来るだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮らしは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに満足を覺えたことは殆どない。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしよう、と云ふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴填めをしたことなどが分ると、この疑懼が意識の閾



の上に頭を擡げて來るのである。  
一體この懸隔はどうして生じて來るだらう。唯うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深いところにあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は唯漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらと思ふ。その日／＼の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止ることが出来るものやら分らない。それを今目の前

で踏み止つて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて、喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

〔鷗外全集〕

### 五 玉かつま抄

本居宣長

本居宣長  
國學者。伊勢松坂の人。享和元年歿、年七十。

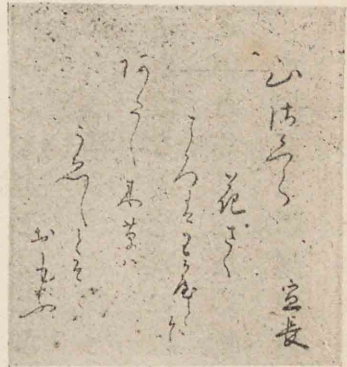
古き書どものこと

珍しき書を得たらんには、親しきも疎きも、おなじ志ならん人には、かたみにやすく貸して見せもし、寫させもして、世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず、おのれひとり見てほこらんとするは、いと心ぎたなく、物まなぶ人のあるまじきことなり。  
すべて人の書を借りたらんには、すみやかに見て返すべきわざなるを、久しく止めおくは心なし。



宣長  
山ざくら花さ  
くころはわが  
やどにあだし  
木草はうゑじ  
とぞおもふ

須賀直見  
宣長の門人。  
伊勢松坂の人。



蹟筆長宣居本

たる物は、何もく、同じことなる内に、いかなればにか、書は殊に用なくなりて後も、なほざりにうちすておきて、久しく返さぬ人のよに多きものぞかし。

書讀むことの譬

須賀直見がいひしは、廣く大きなる書を讀むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ所も多かるを經行きては、又面白く目醒むる心地する浦山にも至るなり。又足強き人は早く、弱きは行くこと遅きも、よく似たり。」とぞいひける。をかしたとへなりかし。

書うつし物書くこと

ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、同じ詞のあるときは、見まがへて、そのあひだなる詞どもを寫し洩らす

こと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを、みながらおとすこともあり。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへ易きもじなどは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、おほかた物書くに心得べき事ぞ。

新なる説を出すこと

近き世學問の道開けて、大方萬づのとりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とりくに新なる説を出す人多く、其の説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、すべての學者いまだよくもとのほぬほどより、われ劣らじと、よに異なる珍しき説を出して人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。其の中には、随分によろしきことも稀には出てくめれど、大方未だしき學者の心はやりて、いひ出づることは、たゞ人に優らん勝たんの心にて、輕々しくまへしりへをもよ



くも考へ合はさず、思ひ寄れるまゝに、打出づる故に、多くはなかななるいみじきひがごとのみなり。すべて新なる説を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひおもひて、よく確なる據りどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なく動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけはりてよしと思ふも、程經て後にいまたびよく思へば、なほわろかりけりと我ながらだに、思ひならるゝ事の多きぞかし。

新に言ひ出でたる説はとみに人のうけひかぬ事

大方世の常に異なる新しき説をおこすときには、よきあしきを言はず、まづ一わたりは世の中の學者に憎まれ誦らるゝものなり。あるはおのがもとより據り來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味はひ考ふるまでもなく、初よりひたぶるに捨てて取りあげざる者もあり。あるは心のうちにはげにと思ふ節も多くあるも

のから、さすがに近き人のことにしたがはんことのねたくて、よしともあしともいはて、たゞうけぬかほして過すたぐひもあり。あるは嫉む心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、其の中の疵をあなたがちに求め出でて、すべてをいひけたんと、かまふる者もあり。大方古き説をば、十が中に七つ八つはあしきを、あしき所をばおほひかかして、わづかに二つ三つの取るべき所のあるを取りたてて、力のかぎりたすけ用ひんとし、新しきは、十に八つ九つよくても、一つ二つのわろきことをいひたてて、八つ九つのよきことをもおしけちて、力のかぎりは我も用ひず人にも用ひさせじとする、こは大方の學者の習なり。然れども又稀々には、新なる説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、速かに改め従ふたぐひも無きにはあらず。古きをいかにぞやおもひて、かくはあらじかと、までは思ひよれどもみづから定むる力なくて、疑はしながらさであるなどは、新なるよき説を聞



きては、かくてこそはといみじく喜びつゝ、たちまちに従ふたぐひも  
 ありかし。大方新なる説は、いかによくてもすみやかに用ふる人  
 稀なるものなれど、よきは年を経てもおのづからつひには世の人の  
 したがふものにて、あまねく用ひらるれば、其の時に至りては、初に嫉  
 み誹りし輩も、心には悔しく思へど、後ればせに従はんも猶嫉く、人わ  
 ろくおぼえて、快からずながら古きを守りてやむ輩も多かり。しか  
 世の中の論定まりて、皆人の従ふ世になりては、初よりすみやかに改  
 め従ひつる人は、賢く心さしく思はれ、古きにかゝづらひてとかくと  
 どこほれる人は、心おぞく、いふかひなく思はるゝわざぞかし。

わが教へ子に誠めおくやう

われに従ひて物まなばん輩も、わが後に又よき考の出できたらん  
 には、かならずわが説にななづみそ。わがあしき故をいひて、よき考  
 をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなれ

ば、ともかくにも道をあきらかにせんぞ、われを用ふるには有りけ  
 る。道を思はでいたづらにわれをたふとまんは、わが心にあらざる  
 ぞかし。

六 五月

永井荷風

五月は忘れられぬ月である。  
 強ひて明るい初夏の光の底に、昨日と過ぎた行く春の悲しい思ひ  
 出は、猶去りやらす彷徨つてゐる。

山の手の場末の町には殊更多い、枳殻の垣根の見事な若葉の間や、  
 間もなく貸家が建つらしい空地の雑草の萋々として生ひ繁る片隅  
 などに、折々思ひもかけず八重櫻や桃の花の色も褪めて一つ二つ残  
 つて咲いてゐるのを見出すほど、哀深いものはあるまい。

樹木の少い下町には、三筋だの亂立だの西川など鮮かに引き立つ

永井荷風  
 小説家。佛文  
 學者。名は壯  
 吉。明治十二  
 年東京市生。

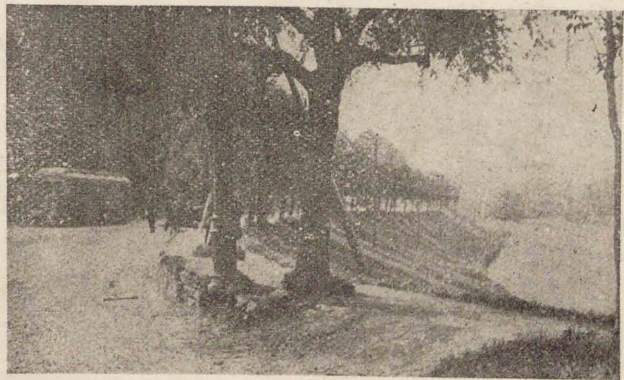
三筋・亂立・西  
 川  
 いづれも衣服  
 の縞柄の名。



拾の縞柄が、往來の女姿に新しい風情を添へ、また山の手の屋敷町や濠端は、柳の繁りと楓の若葉と青草の光澤ある敷物に、初夏の都市は到る處初めて見る土地のやうな新しい思をさせる。

朝早く、街を罩める水蒸氣のまだ吹き晴れぬ頃、自分は割引と満員との赤札を下げて走せ過ぎる電車を待つため、外濠の見附にたゞずむと、松の影を映す沈んだ水の面に、大きな鯉が幾匹となく頭を持ち上げ、或は何物にか戯れるやうに身をうねらせるたびに、高くその尾を空中にひらめかしてゐる。

やがて激しい日光が輝き初めると、草刈の鎌を待つものの如く小



五月の濠端

氣味よく伸びきつた青草に蔽はれて、長く連なる土手の斜面がいかにも心持よく見え、其の上に横たはる松の繁りの影は、これ亦何とも譬へやうのないほど濃く鮮かに愉快に見える。自分は青草の上に描かれるこの濃い樹木の影の色に、あらゆる「夏」の心持を感じ得るやうに思ふ。

自然はなる程五月になつて全く新しくなるのであつた。然し今年の新しい五月は、去年も一昨年も同じであつたやうに、又來年も來來年も同じなのではなからうか。唯行く春の甘い倦怠に沈んだ吾の心が、それを今更らしく新しいと感ずるに過ぎないのであらう。自分は自然を妬む。自然は實に幸福な藝術家であつた。

自分は既に「歡樂」と云ふ小説の末段に「自然はいつも老いずに詩人を慰めるが、詩人の命は春に逢ふ度に衰へて行く。自然はいつも同じ春しか繰返さないが、然し詩は時代と共に動いて、昨日の古い調の



モーパッサン  
Guy de Maupassant. フランス自然派の小説家。一八五〇—一八九三年。



モーパッサン

繰返される事を決して喜ばない……。」と云ふ事を書いた。昔からモーパッサンは其の紀行の中にこんな事を書いてゐる。「昔から藝術の野に咲く花は摘み盡くされて了つたので、藝術家は力極まつて人間の官能と靈魂との膨脹を望むに至つた。けれども人間の知識には五官と呼ばれて半分しか開かない五個の門くわんごのかどがある。新しい藝術に身を委ねるものは、全力を擧げてこの五個の門を抜き取らうと焦つてゐるのだ。人間が五官以外に猶多くの感覺を持つてゐたなら、吾々の知識と感激の天地は、いかに多様な變化を生ずるであらう……。」

あゝ、五月よ。新しい五月よ。自分には此の頃この「新しい」と云ふ

言葉ほど、底氣味の悪い不安と諷刺とを感じさせるものはない。

〔紅茶之後〕

### 七 江戸時代の俳句(上)

蕪村  
興謝氏。攝津の人。天明三年歿。

菜の花や月は東に日は西に  
春の海ひねもすのたり／＼かな  
若葉して水白く麥黄ばみたり  
金屏のかくやくとして牡丹哉

蕪 村



興謝蕪村

時鳥平安城をすぢかひに

七 江戸時代の俳句(上)



四五人に月落ちかゝる踊かな

古傘の婆婆と  
月夜のしぐれ  
かな  
しぐるゝや我  
も古人の夜に  
似たる 蕪村



蕪村筆蹟

柳散り清水かれ石處々

川下に網うつ音やおぼろ月

橋落ちて人岸にあり夏の月

蔓草や蔓の先なる秋の風

七月の夜の月影の川也  
秋の風は蔓草の先なる野の風也

太  
祇

春くや瀧に紅  
葉の濃きうす  
き

白壁に蜻蛉過ぐる日影かな

太祇筆蹟

涼しさや旅に出る日の朝ぼらけ

召  
波  
良

太祇  
炭氏。江戸の  
人。明和八年  
歿。

春くや瀧に紅  
葉の濃きうす  
き

召波

黒柳氏。蕪村  
の門人。寛政  
元年歿。

三浦氏。鳥羽  
の人。安永九  
年歿。

蓼太

大島氏。信濃  
の人。天明七  
年歿。

高井氏。京都  
の人。寛政元  
年歿。

瀬見の小川  
に遊びて  
ゆく水にさそは  
れがけの花藻か  
な 几董

五月雨やある夜ひそかに松の月  
世の中は三日見ぬ間に櫻かな  
春の泊鯛よぶ聲や濱のかた

几董筆蹟

蓼  
太  
几  
董

號は春秋庵。  
信濃の人。寛  
政三年歿。

加藤氏。名古  
屋の人。寛政  
四年歿。

高桑氏。金澤  
の人。寛政十  
一年歿。

大江丸  
大伴氏。大阪  
の人。文化二  
年歿。

夏目氏。江戸  
の人。文化十  
三年歿。

成美  
夏目氏。江戸  
の人。文化十  
三年歿。

夏來れば人し  
づまりて閑古  
鳥

人戀し灯ともし頃を散る櫻  
暁や鯨のほゆる霜の海  
枯葦の日にく折れて流れけり  
秋來ぬと目にさや豆の太りかな  
東海道残らず梅となりけり

成美筆蹟

白  
雄  
暁  
臺  
關  
更  
大  
丸  
成  
美



一茶  
小林氏。信濃  
の人。文政十  
年歿。

獨坐  
おれとしてに  
らみくらする  
蛙哉

一茶

千代尼

加賀松任の人。  
安永四年歿。

多代女

市原氏。岩代  
須賀川の人。  
慶應元年歿。

山宮允

詩人。東京府  
立高等學校教  
授。明治二十  
三年山形市生。

霞む日やしんかんとして大座敷  
花の陰あかの他人はなかりけり  
明月をとつてくれろと泣く子哉  
まけ菊をひとり見直す夕かな  
心から信濃の雪に降られけり

信濃の雪に降られけり

独坐  
おれとしてに  
らみくらする  
蛙哉

蹟筆茶一

時鳥々々として明けにけり  
有明の野ずゑに白し春の水

千代尼  
多代女

八泉

山宮允

かぐはしい森のなかから

滾々とわき出る泉。

若さに輝き、力に充ち、

今華やかな曙を、

たぎり溢れさせてゐるその美しさ、

その泉、さわやかな響を

淡紅色の朝の空にふるはせつゝ、

歡喜に不安の岩を征服へ、

愛に流通の路を拓き、

躍り、流れる、光に、勝利に。

躍り進め若さの泉、力の泉。

たゞ、恃め汝が生命を、歡喜を、愛を。――



愛と歡喜は勝利と光に導く。  
おゝかぐはしい森のなかから、  
今滾々とわき出る泉。「現代詩人選集」

### 九 嚴島神社

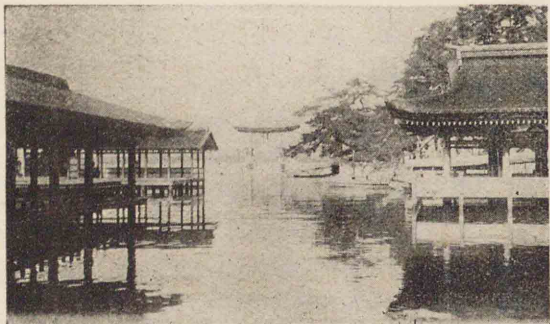
五十嵐力

五十嵐力  
國文學者。早  
稻田大學教授。  
文學博士。明  
治七年米澤市  
生。

彌山  
島中の最高峰。

趣味の眼から見た嚴島の中心の味は何處にあるかといへば、吾等は第一に彌山を背景として立つた低い廣い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところにあると思ふ。

先づ藝州本土の對岸から船を僦うて、ぎい／＼と櫓の音面白く漕ぎ出でる。青一色で塗りつぶしたやうな恰好のよい島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔やが、次第に著しく浮き出て来る。初には木片を立てたやうに見えた鳥居が、段々と大きさを加へて来る。また漕ぐ程に、鳥居も社殿堂塔も、



嚴島神社

益、大きさを加へて来る。その中に次第に進んで大鳥居の下に來ると、吾等は俄に驚きの目を見張らせられるであらう。見よ、目の前には、高さ九間、棟の長さ十三間の地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつて居るではないか。向うを見ると、青雲の中に聳え立つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に伸びて、赤い柱がゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映して居るではないか。その色彩を見よ、形状を見よ、一つ／＼の建物の整つた姿を見よ、多くの建物が廻廊や橋に繋がれて、美しい釣合を現して居るのを見よ。何といふ美しさ氣高さ神々しさであらう。

社殿の中心たる本社<sup>明神座の殿</sup>の寶殿の左右には、百二十七間といふ長い廊



下が廻らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮葺瓦棟の多くの建物が、朱塗の圓柱に支へられて低く美しく並んで居る趣、切妻入母屋、縦向き、横向き、いろいろの社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げたやうに横長に建つて居る趣、更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすこやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮かんだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣、是等のすべてが、何とも言はれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣、高さ大きな物々しさ、荒々しさは、前後の護衛者たる山や海や鳥居やに譲つて、社殿からは、千木も堅魚木も鴟尾も鯨銚もない尋常な檜皮葺を、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。この重疊累積した美しさゆかしさを

何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出来上つた龍宮城を嚴島のある入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上がるのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、こゝだ！といふ處で、びたりとせり上を中止させたのであらう。そしてこれを眺める恰好の立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。「甲鳥園隨筆」

### 一〇 平家雜感

#### (一) 都落

凡そ人國の傳へ遺しし史は多かれど、平家の都落ばかり哀にもまた目ざましきはあらじ。

平城の餘燼未ださめず、墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂

高山林次郎

高山林次郎  
文明批評家。  
文學博士。號  
は樗牛。山形  
縣の人。明治  
三十五年歿、  
年三十二。

墨股  
美濃國長良川  
に沿ふ町。



木曾  
源義仲。壽永  
三年歿、年三  
十一。

三吉野の  
三吉野の山の  
あなたに宿も  
がな世のうき  
時のかくれが  
にせん。(古今  
集、讀人不知)

故郷を  
故郷を燒野が  
原とかへりみ  
て末も煙の波  
路をば行く。  
(平家物語、平  
經盛)

れて、木曾の五萬騎はや比叡の前後に充ち満ちぬ。宇治淀の備脆くも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ一門の天下、身を置くに處なく、この世のうきに三吉野の山のあなたに隠れがもなきか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の御幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死もわかぬ別路に人のあはれの限もなし。また歸り來べき都としもおもはねばにや、六波羅池殿西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬることあわたしかりしか。

こゝに鳳闕の礎むなしく残り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元このかた天下の榮華を盡くしたる花の都の故郷を燒野の原とかへりみて、末も煙の波路をば行くへも知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも今は黒金の衣をのべたれども、誰かは詠歌の餘哀になれて弓矢の響を勵むべき。さても捨てがたき命や。今こそは世にも人にも

平家物語  
源義仲  
三吉野の山  
あなたに宿も  
がな世のうき  
時のかくれが  
にせん。(古今  
集、讀人不知)



平家落都

かりけれ、流石は忍ばるゝ昔の様の夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到るところ野に満てり。あゝ昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行く手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず、渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づるさの山の端をあなたの空とおぼしけん、日暮舷に笛ふく人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼この時、この人、思果して如何。

(二) 没落



兵衛佐  
右兵衛佐源賴朝

平家はさすがに名門のこととて、没落のきはまで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゑしくもまた哀の極みなりき。木曾は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣請ひ受けけれども、孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐討つべきよしをいひ送りぬ。平家の答はかくなりき。「よしや世は季になりぬとも、木曾などに語らはれて如何でか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく胃を脱ぎ、弦をはづし、來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきか。」と。あゝ何ぞ其の言辭の堂々として、没落のやからに類はざるや。平家にして、若し一時の權變を弄びて勢を廻らさんとだに思はば、かゝる時こそ乗ずべき機會なれ。ざるを名分の正しきを執りて成敗の數を顧みず。若し偏へに利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは、詬を含みて存へんよりも

十善の帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく胃を脱ぎ、弦をはづし、來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきか。と。あゝ何ぞ其の言辭の堂々として、没落のやからに類はざるや。平家にして、若し一時の權變を弄びて勢を廻らさんとだに思はば、かゝる時こそ乗ずべき機會なれ。ざるを名分の正しきを執りて成敗の數を顧みず。若し偏へに利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは、詬を含みて存へんよりも

如何ばかり美はしかるべき。

その太宰府に落ち行くや、緒方の三郎使して申しけるは、まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院の仰、黙し難ければ、九國におき奉るべき地も候はず。」と。平大納言乃ち烏帽子直垂して出て向ひて宣ひけるは、それ我が君は天孫四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗歴代の神靈我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來度々の逆亂を鎮めて、九州の者共をば皆内さまへこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をも打忘れて、あづま夷の下知に従ふこそ奇怪至極なれ。」と。嗚呼何ぞその態度の堂々たるや。

本三位の中將、一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん。」とぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く、院宣謹みて承り畢んぬ。通

一院  
後白河天皇。

平大納言  
平時忠、清盛の妻の兄。

我が君  
安徳天皇。文治元年崩。壽八歳。

本三位の中將  
平重衡。



通盛  
平教盛の子。

盛卿以下、一の谷にて誅せられけるもの其の數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。そもく我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷北狄の禍に遭ひて暫く西國に御幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし。還幸なからんに於ては神器などか都に還るべき。そもく頼朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められし所なり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて妄りに干戈を弄ぶ、やがて神罰其の身に返るべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思し召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界高麗天竺震旦の果までもまかりなん。悲しい哉、人皇八十一代が間傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す。」と。

鬼界  
大隅國。大島の東にある島。

宗盛  
清盛の第二子。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲に其の名節を枉ぐることなさをなさざりき。あはれ、平家の世盛は誠に大いなりしが、其の没落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな、平家、かくして亡びたりとて何の恨むるところぞ。「樗牛全集」

一 方丈記抄

鴨 長 明

(一) 逝く川の流

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく止まることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に棟をならべ、蔓を争へる、高き卑しき人のすまひは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同

鴨長明  
歌人。文章家。  
遠江の人。建保四年歿、年六十三。



じ。所もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に  
僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡に



鳴長明

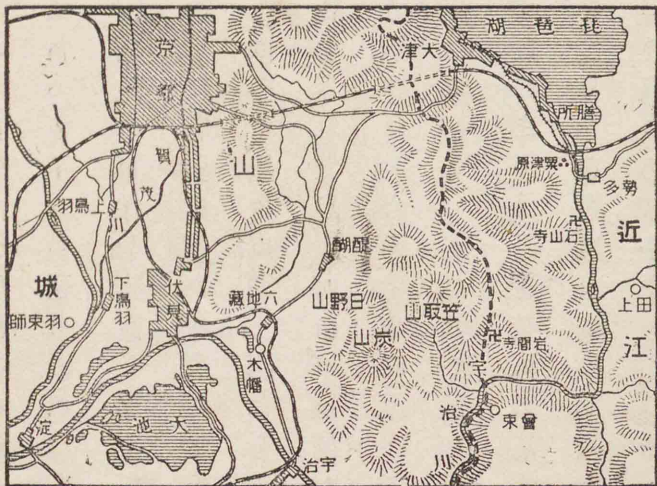
ぞ似たりける。知らず生まれ死ぬる人、  
いづ方より來りていづ方へか去る。又  
知らず、かりのやどり、誰が爲に心を悩ま  
し、何によりてか目を悦ばしむる。其の  
主人と住家と無常を争ひ去るさま、いは  
ば朝顔の露に異ならず。あるは露落ち  
て花残れり。残るといへども、朝日に枯

れぬ。あるは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待  
つことなし。

(二) 日野山の閑居

こゝに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べる

ことあり。いはば、狩人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが



の煩がある。積む所僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他



日野山  
山城國宇治郡  
木幡山の北。

往生要集  
源信僧都の著。

善因を聞く  
自記をみる  
往生要集  
念佛の業  
舟に乗りて  
ルまのうら  
浄土を信じて  
依るべき  
勸メタモト

の用途いらす。

いま日野山の奥に迹をかくして後、南に假の日がくしをさし出し、竹の簀子を敷き、其の西に闕伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏琵琶おのゝ一張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほども敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を開けて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろゝの藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

其の處のさまをいはば、南に笕あり、表を疊みて水を溜めたり。林

迹の白浪

世の中を何に  
たとへん朝は  
らけこぎゆく  
船のあととし  
らなみ。(拾遺  
集)

岡の屋

山城國紀伊郡  
宇治川の東岸。

滿沙彌

沙彌滿賢。元  
正天皇の時の  
人。

溇陽の江

溇陽江頭夜  
送客。楓葉  
荻花秋瑟々。  
(白樂天、琵琶  
行)

源都督

桂大納言源經  
信、琵琶の名  
手。都督は大  
宰帥の唐名。

秋風・流泉

共に琵琶の名  
曲。

軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の  
かづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念のたより無き  
にしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くして西の方にほふ。  
夏は時鳥を聞く、かたらふ毎に死出の山路を契る。秋は日ざらしの  
聲、耳に滿てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、つもり消  
ゆるさま、罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる  
時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友  
もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめ  
つべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけ  
てか破らん。もし迹の白浪に身を寄するあしたには、岡の屋に行き  
かふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕に  
は、溇陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興  
あれば、しばし松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあ



やつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはちこの山守が居る所なり。

彼處に小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歳、われは六十、その齡ことこの

外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或はつばなを抜き、岩梨をとる。またぬかごをもり、芹を摘む。あるはすそわの田居にいたりて

落穂を拾ひて穂組をつくる。もし日うらゝかなれば、峰に攀ぢ上りて、遙かに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地

は主なれば、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩なく、志遠くいたる時は、これより峰つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、あ

るは石山を拜む。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡を弔ひ、田上川をわたりて、猿丸大夫が墓をたづぬ。歸るさには、をりにつ

つゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家づとにす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人を忍び、猿

の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠く槇の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろゝと鳴くを聞

きて、父か母かと疑ひ、峰のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。あるは埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。

おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色、折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらん人のために

は、これにしも限るべからず。おほかたこの所に住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、今す

でに五年を経たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都を聞けば、この山にこ

もり居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして

勝地は

勝地本来無

定主、大郡山

屬、愛、山之

人。(白氏文

集)

蟬丸

平安朝の歌人。

琵琶の名手。

猿丸大夫

平安朝の歌人。

山鳥の

山鳥のほろほ

ろとなく聲聞

けば父かとぞ

思ふ母かとぞ

思ふ。(玉葉集、

行基)







藤原敏行  
歌人。

はちす葉のにごりにしまぬ心もて  
なにかは露を玉とあざむく

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども  
風のおとにぞおどろかれぬる

讀人不知

昨日こそ早苗とりしかいつの間に

稲葉そよぎて秋風の吹く

壬生忠岑

壬生忠岑  
古今集撰者の一。

山里は秋こそことに侘しけれ

鹿の鳴く音に目をさましつゝ

坂上是則

坂上是則  
父祖不詳。從五位下加賀介。

あさぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里にふれる白雪

讀人不知

雪ふりて年の暮れぬる時にこそ

つひにもみぢぬ松も見えけれ

(二) 新古今和歌集

太上天皇

太上天皇  
後鳥羽天皇。

ほのゝくと春こそ空に來にけらし

天の香具山かすみたなびく

見渡せば山もとかすむ水無瀬川

ゆふべは秋と何おもひけむ

式子内親王

式子内親王  
後白河天皇の皇女。

山ふかみ春とも知らぬ松の戸に

たえくかゝる雪のたまみづ







藤原家隆  
新古今集撰者  
の一。

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より

こほりて出づるありあけの月

藤原家隆

鶴見祐輔  
政治家、文章  
家、衆議院議  
員。明治十八  
年群馬縣生。

一三 旅

鶴見祐輔

自分の好きな夏が来た。

夏になるといつも旅を思ひ出す。旅と夏とは共通な心持が通つてゐる。着物が軽くなるだけでも、夏は愉快である。そして世間が一時に明るくなる。目に見える自然のすべてが、渾身の力をもつて立ちあがつてゆく。太陽が、幾百日このかた、ためて来た凡ての精力を、地上に叩きつける。その天と地との凄じい戦のうちに、人間だけが恐れ入つて縮かんでゐられるわけがない。大抵の人が、飽き飽きした自分の家から飛び出して、大自然の懷の中に躍り込んでゆく。

これが旅である。

旅は解放である。自由を求める人間性の奔騰である。旅は冒険である。見知らぬ境涯を追求する古代獵人時代の本能の復活である。旅は進歩である。古き環境の抱藏する廢頽氣分から脱出しよ境涯うといふ人類の無意識なる自己保存的努力である。そして旅は詩である。凡ての人が氣のつまる世間づきあひのうちに、大切に胸の底に秘めてゐるロマンチックな性情を、氣儘に發露するのである。そんな色々な心持が、我々を山と海と湖との邊に追ひやる。新しい見知らぬ都に追ひやる。そして日々に變る眼前の風物を送り迎へて、旅愁とか客愁とか孤獨とか、色々な文字を並べながら、實は皆一樣に幸福である。

一生を漂泊の旅路に暮らすジプシーの群が、強く我々の空想を刺激する。小さい車のうちに、一切の財産を積んで、馬に牽かせて歐洲

本能  
をからん生野の  
見有るべき性能

ジプシー  
Gypsy, エーロ  
ツバに居住す



一種の流浪民もと印度から出て歐洲に移住し、現時トルコ・ホンガリヤ・イスパニヤ・イギリス・フランス等に散在してその日暮らしの生活を營んでゐる。

漂泊詩人

第十一世紀から第十三世紀の終まで、フランスの南部イタリヤの北部などに勢力を占めた遍歴の抒情詩人。佛語にトルバドール (troubadour) と稱した。



群のーシブジ

の村から村を渡つてゆく。夜は森陰に天幕を張り、篝火を焚いて樂器に合はせて、唄聲をそろへる。雨の夜は雨のまゝに、月の夜は月のまゝに、をかしい生活であるに違ない。それと共に、中世紀に、南歐羅巴を旅して歩いてゐた漂泊詩人の生活が、自分たちの詩興を唆る。それはどんなに自由な氣安い生涯であつたであらうか。今日旅することの最も好きな國民は、英國人であらう。手鞆一つ提げて、世界中を我が物顔に歩いてゐる。寒ければノルウェーのスキー、暑ければアルプスの山登り、そして閑々と南アフリカの叔父さんを訪問する。

共

カント  
Immanuel  
Kant、ドイツの大哲學者、一七二四—一八〇四年。



旅の眞の味は、新しいものを見て知識を増すのではない。眼前に變りゆく風物を娛しむのではない。それは自分自身を味はふのである。カントはいつも書齋の窓から、隣家の林檎の樹を眺めて、彼の哲學を考へて居た。或日隣家の主人が、さうとは知らず、その林檎の樹を切つてしまつてから、見當が着かなかつて、彼は大そう考へにくくなつた。併しカントのやうに、同じ環境の裡に坐して、刻々變化する新思想が湧いて來るといふことは、我々凡人にはなかく、到達し難い境地である。そこで我々は旅に出る。旅ほど我々が考へさせられる折はない。それは我々が考へるのではなくして、變化する四周の物象が、自分たちの胸臆から、未だ知らない我々の姿を引き出してくれるのである。それは或時は音であ



り、或時は色であり、或時は人であり、或時は物である。それが或時は背後から、出しぬけに飛び付いて来る、或時は真正面に額にぶつかる。その度に、我々が涙ぐんだり笑つたりする。

一たいに團體の旅行は、旅のうちに這入らない。眞の旅は一人であるべきである。丁度白雲が天空を渡るほどの、自由な無計畫な心持であつてほしい。ウォシントン・アーヴィングが、沙翁の生れ故郷のストラトフォード・オン・アヴォンに辿りついて、客舎に獨り居の夜、「我が世の王國の數々よ、興らば興れ、倒れば倒れよ。われ苟くも今宵の宿料を拂ひ得ん限り、われこそはこの一室の王者なれ、この一室は、王領、この煖爐の鐵火箸は王笏、かくて沙翁は今宵の我が夢に通ふべし。」といつたやうな心境が、獨旅する者のみに惠まるゝ人生の味である。

全く反對のことが、旅について言はれる。旅ほど人間の心を狭め

ウォシントン・アーヴィング Washington Irving、アメリカの文士。一八二九年ロンドン大使館の書記官となつた。一七八三—一八五九年。ストラトフォード・オン・アヴォン Stratford-on-Avon、ロンドン市の北方約百哩の小邑。アヴォン川に沿ふ。

チエスタトン 英國現代の作家、批評家。一八七四年ロンドン生。

季刊  
わたくし  
わたくし

るものはないといふのである。それは英國の批評家チエスタトンの犀利な言葉である。我々が郷里に穩かに暮らしてさへゐれば、遠い國々の姿は、美しい夢物語として憧憬される。(西班牙伊太利波斯)そして西藏、みな吾々の詩情を唆るに十分な名である。そして我々が未知の地と人とを、淡き愛情を以て胸に描く。然るに一度足を是等の地に入れると、思ひがけない幻滅が我々を待つてゐる。嘗ては抽象的な詩の國であつた伊太利が、掏摸のやうな案内者と、乞食のやうなホテル給仕との國と化してしまふ。その瞬間に、永い間の心中の偶像が、破壊されてしまふ。

併し、これは未だ旅する心の眞境地に悟入しない誤である。實はかゝる幻滅の廢墟の上にこそ、眞實の人生はうち建てられなければならぬのである。



俊基  
右少辨藤原俊基。

七月十一日  
元弘元年。

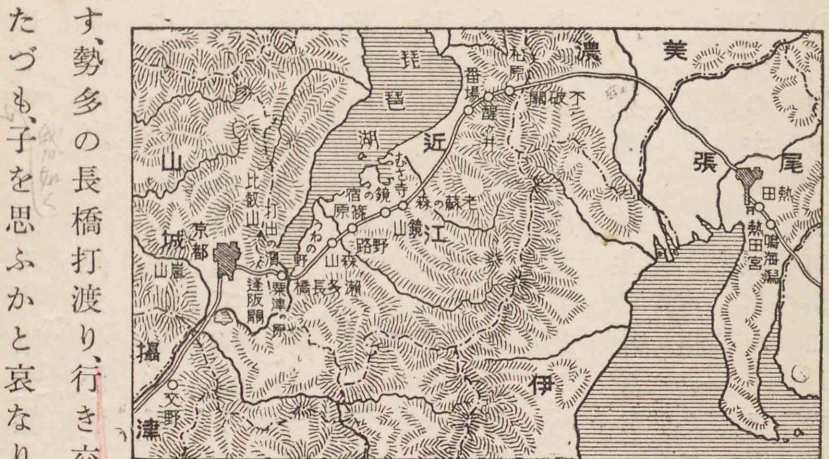


俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら陰謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯不赦は法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

一四 落花の雪

交野  
河内北河内郡またや見ん交野の花の雪散る春の曙。藤原俊成。

嵐の山  
朝まだき嵐の紅葉の錦着ぬば人そなき。藤原公任。



落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契浅からぬ、我が古里の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀なる。憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこれが行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行き交ふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く、たづも、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖濡



時雨も時雨も  
白露も時雨も  
いたくもる山  
は下葉残らず  
色づきにけり  
(紀貫之)

不破の關屋  
人住まぬ不破  
の關屋板庇  
荒れにし後  
は秋の風  
(藤原良經)

なるみ瀉  
小夜千鳥聲こ  
そ近く鳴海瀉  
傾く月に潮や  
滿つらん(藤  
原季能)  
元暦元年  
後鳥羽天皇の  
年號

れて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとて  
も、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間に、老蘇の森の下草  
に、駒を駐めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。番場醒が井柏原、不破の  
關屋は荒れ果てて、尙漏るものは秋の雨、何時か我が身のをはりなる、  
熱田の八劍伏し拜み、潮干に今やなるみ瀉、傾く月に道見えて、明けぬ  
暮れぬと行く道の末は何處と遠江、濱名の橋の夕汐に、引く人も無き  
捨小舟沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば  
今はとて、池田の宿に着き給ふ。元暦元年の頃か、とよ、重衡中將の東  
夷の爲に囚はれて、此の宿に着き給ひしに、

東路の埴生の小屋のいぶせきに

古里いかに戀しかるらん

と、宿の主人が詠みたりし、其のいにしへの哀までも、思ひ残さぬ涙な  
り。旅館の燈幽かにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を

命なりけり  
年たけてまた  
越ゆべしと思  
ひきや命なり  
けり小夜の中  
山。

承久の合戦  
承久三年。

宗行卿  
中御門中納言  
藤原宗行。  
南陽縣

支那南陽縣の  
故事。上流に  
ある菊の滴が  
流に落ちるの  
を、酌んで飲  
むと長壽を得  
るといふ。

打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道を埋み來て、其處とも知らぬ夕  
暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、再  
び越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日既  
に亭午に上れば、乾飯進らす程とて、輿を庭前に昇き止む。轅を敲  
きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。」と  
答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、宗行卿關東  
へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣、菊水 汲下流而延齡

今東海道、菊川 宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀やいとどま  
さりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の

おなじ流に身をやしづめん



龜山殿  
山城葛野郡  
嵯峨の龜山離宮。  
今の天龍寺。

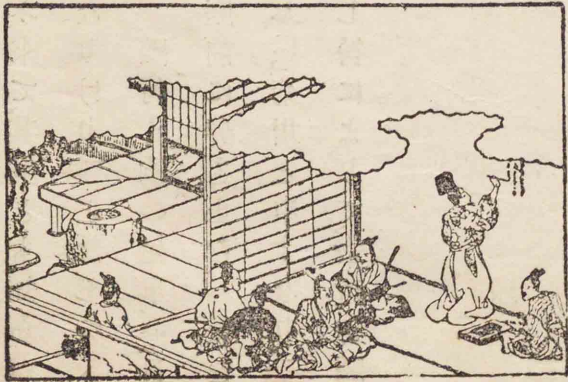


(繪圖所名道海東) 山 都 宇

夢にも人に  
駿河なるうつ  
の山へのうつ  
つにも夢にも  
人にあはぬな  
りけり。(伊勢  
物語)

に、宇都の山邊を越えゆけば、葛かづらいと  
茂りて道もなし。昔業平の中將の、住所を  
求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を  
聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、  
龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍  
りしことも、今は二たび見ぬ夜の夢とな  
りぬと思ひつ  
づけ給ふ。島  
田藤枝にかゝ  
りて、岡邊の眞  
葛うら枯れて、  
物悲しき夕暮



(上同) 宿川菊

上なき思ひ  
富士のれの煙  
はなほぞ立ち  
のぼる上なき  
ものほおもひ  
なりけり。(新  
古今集)

太平記  
後醍醐天皇以  
後吉野朝戦亂  
の次第を敘し  
た軍記物語。  
室町時代に小  
島法師の作と  
傳へられてゐ  
る。

瀧澤馬琴  
江戸の小説家  
雜學者。曲亭  
と號す。嘉永  
元年歿。年八  
十二。  
禍福  
禍之與福、  
何異糾纏乎。  
(漢書)

はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉  
を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催  
され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たま  
へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見え  
て、浮島が原を過ぎゆけば、汐干や浅き船浮きて、おりたつ田子のみづ  
からも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大  
磯小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれど  
も、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。「太平記」

一五 芳流閣

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、禍福は糾ふ繩の如し。」と。人間萬事往くとして塞  
翁が馬ならぬは無し。そは福の倚る所、はた禍の伏す所、彼に在れば  
此に在りとは思へども、豫てより誰か其の極を知らん。憐むべし、犬



福の倚る所  
禍分福之所  
倚福分禍之  
所伏。命不  
可說。誰知  
其極。(老子)

古河  
下總猿島郡。



琴馬澤瀨

塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ身に着けつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、其の福は禍と、ふり換りたる村雨の、刀は故の物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし、憾をこゝに釋く由もなく、猝急にして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に登れども、左に右に、脱れ去るべき道のないれば、其處に必死を窮めたる、心中は如何なりけん。想ひやるだにいと痛まし。

琴馬澤瀨の事  
澤瀨は古河の  
名刀を齎して  
古河へ來りて  
家を興すに  
年を経て得難  
き時を得て  
古河へ來りて  
家を興すに  
年を経て得難  
き時を得て  
古河へ來りて  
家を興すに

坂東太郎  
利根川の稱。  
坂東平野の主  
たる河川の意。

用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く彌高きかの樓閣は三層なり。其の二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶え、進退既に谷まりし、敵にしあれば争て我、繋ぎ留めんとむさゝびの、樹傳ふ如くさらりと、登り果てたる三層の、屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへ合うて立つたる有様、浮圖の上なる鸛の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には、成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし、床几に尻を打掛けて、勝負如何にと見上げたり。又閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀を見かし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組んで落ちな



墨氏 墨翟。周代の思想家。嘗て宋城を固守して楚軍を卻けた。

魯般 公輸般。墨子と同時の人。楚の謀臣となつて宋を攻めた。

膳臣巴提便 欽明天皇七年百濟に使した時、虎穴に入つて人を刺し殺した。

富田三郎 和田義盛の土源實朝の面前で長さ二尺七寸の大鹿角二つを一度に折

ば繋ぎ留めんと、項をそらして之を觀る。加之外の方は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け膂力衰へず、能く見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なれば、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば、絳皆休まん。脱れ果てじと見えたりける。

其の時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひ登らんとせし兵共を、斫り落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今只一人登り來ぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつは是膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一人の敵なり、引組んで刺し違へ、死するに難きことやはある。好き敵ござんなれ、目に物見せん。」と、血刀を袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方椀に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝、

勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦め兼ねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出されし甲斐も無し。



芳流閣の上格闘

しと受け留めて、拂へば透さず切り込む刀尖、支へて流す一上一下、迂る蔓を踏み留めて、頼りに進む捕手の祕術、あなたも劣らぬ手練のは







尾崎紅葉

小説家。名は徳太郎。東京市の人。明治三十六年歿、年三十七。

西那須野 下野國那須郡。

一六 鹽原

尾崎紅葉



尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は安からざる悒鬱を抱きて、遣る方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、始めて西那須野の驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐かに、唯平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて行く程に、路は窮まらず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に、涼々の響ありて、これに架れるを入勝橋とす。

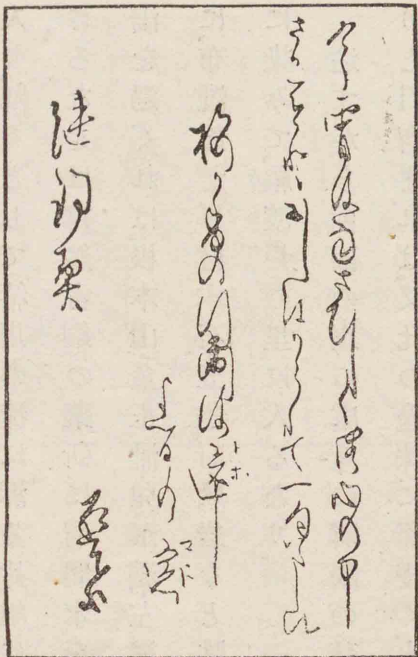
橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く陥りて、幾廻りせる九折の、後には密樹聲々の鳥呼び、前には幽草歩々

松の調も

松の音に峰の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ。(拾遺集、齋宮女御)

今宵は雨さびしく御心の中はかられて一梅が香の行衛は遠しよるの窓 紅葉 連詞契

の花を開き、愈、登れば遙かに木隠れの音のみ聞えし流の水上は淺く現れて、すはや、此處に空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかと凄じかり。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に、蘚碧うして、幾條とも



尾崎紅葉筆蹟

無く白絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めて此の緒よりやと、見捨て難し。

を踏みて、山中の景は始めて奇なり。是より行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あ



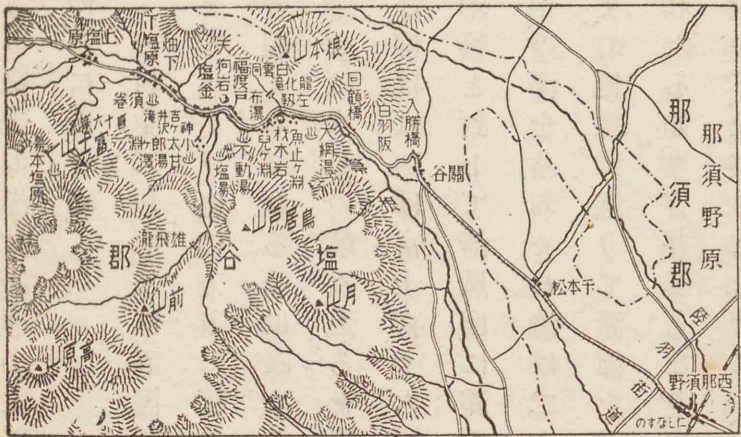
り、全村にして四十五湯。尙數ふれば十二勝十六名所七不思議、一々探り得べくもあらず。

抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より羣峰の間を分けて深く西北に入り、縣々として(箒川)の流に浜る片岨にして、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧・兒が淵・左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀧龍が鼻材木・石五色石船岩など眺め行けば、鳥居戸・前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留まれば、又此の邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。處の名を問へば不動澤といふ。

遙かに望めば行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚か

さる、天狗巖地を抜く何百丈と見上ぐる絶頂には、ばらくと松も



危く立ちすくみ、幹竹割に割り放ちたる断面は、半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。足に任せて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。優に百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、状恐ろしげに蹲りて、老木の陰を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜なく、天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。それ



より鹽釜の湯甘湯澤小太郎が淵など早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の鄰々たるを弄び、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾深く、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めらるゝなど、又あるまじき別境なり。



原 鹽

川水は石に流るる  
まねたふ  
うま

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉銷して理むる方なくかき亂されし胸の中は、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れたり。誠によくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遅かりし。山の麗しといふも壤の堆きのみ、川の暢けしといふも水の逝くに過ぎざるのみ、牢として抜くべからざるわが半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも懸けず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚のものなれや。

見よ、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹き來る風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と軽く、心は此の水と淡し。希はくは、今より此の如くにして、我が生を終へんかな。「金色夜叉」



東山  
京都東山。  
駒引きわたる

逢坂の關の清  
水に影見えて  
今や引くらむ  
望月の駒。(拾  
遺集、紀貫之)

遊子  
支那戰國時代  
の孟嘗君の故  
事。

蟬丸  
平安朝の頃逢  
坂の關に住ん  
でゐた琵琶に  
巧みな盲人。

嵐の風  
逢坂の關の嵐  
のはげしきに  
しひてぞゐた  
る世をすこす  
とて。(今昔物  
語、蟬丸)

### 一七 床の秋風

東山の邊なる住家を出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒引きわたる望月の比もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。むかし、蟬丸といひける世捨人、この關の邊に藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心をすまし、大和歌を詠じて思を述べけり。嵐の風の烈しきをわびつゝ、ぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで  
心をとむる逢坂の關

關山を過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原など聞けども、未だ夜のうちなれば、さだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の都に都遷りありて、大津の宮を造られけり

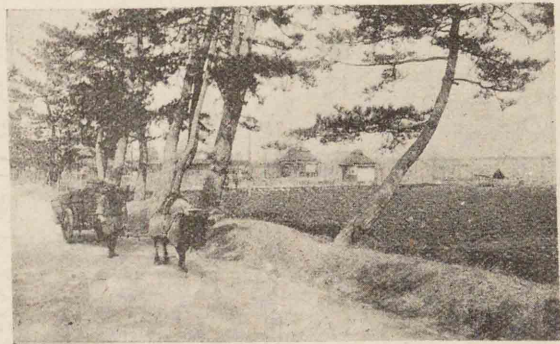
と聞くにも、この程は舊き皇居の跡ぞかしと覺えて哀なり。

さゝ波や大津の宮の荒れしより  
名のみ残り志賀のふるさと  
曙の空になりて、勢多の長橋打渡す程に、  
湖はるかにあらはれて、かの滿誓沙彌が、比  
叡山にてこの海をのぞみつゝ、よめりけん  
歌思ひ出でられて、漕ぎ行く舟の跡の白波、  
まことにはかなく心ほそし。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつゝ、  
ながめし跡をまたぞながむる

この程をも行き過ぎて、野路といふ所に到りぬ。草の原露しげく  
して、旅衣いつしか袖の雫とこころせし。

篠原といふ所を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住



粟津の原

漕ぎ行く舟  
世の中を何に  
たとへむあさ  
ほらけ漕ぎゆ  
く舟のあとの  
白浪。

湖  
琵琶湖。  
滿誓沙彌  
萬葉集の歌人。



南山の影

昆明春、昆明春、春池岸古、春流新、影浸、南山、青澗、波沈、西山、紅淵、(新撰朗詠集、白樂天)

飛鳥の川

世の中は何かつれなる飛鳥川昨日の淵そ今日は瀬になる。(古今集、讀人不知)

かゞみ山

古今集に出てゐる。

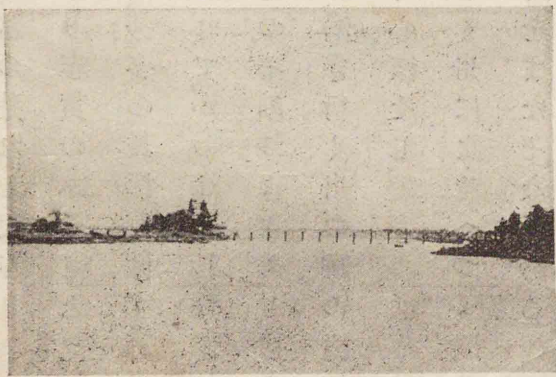
家を占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、緑深き松のむら立、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして澗瀧たり。洲崎所々に入りちがひて、葦かつみなど生ひ渡れる中に、をし鴨のうちむれて飛びちがふさま、あしてを書けるやうなり。都を立つ旅人この宿にこそとまりけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになり行くなど聞くにこそ、かはり行く世のならひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりとおぼゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより

荒れのみまさる野路の篠原

鏡の宿にいたりぬれば、昔な、の翁のよ

りあひつゝ、老をいとひてよみける歌の中に、かゞみ山、いざ立ちより



橋の多勢

て見て行かん年へぬる身は老いやしぬるといへるは、この山のこ  
とにやと覺えて、宿もからまほしく覺えけれども、なほおくさまに訪  
ふべき所ありて打過ぎぬ。

立ちよらて今日は過ぎなん鏡山

知らぬ翁の影は見ずとも

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらな  
る床の秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへた  
る心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺のあたり  
の草の庵の寢覺も、かくやありけんとははれなり。行末遠き旅の空  
思ひつゞけられて、いといたう物がなし。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬ床の秋風

音に聞きし醒が井を見れば、陰暗き木の下の岩根より流れ出づる

遺愛寺の鐘

遺愛寺、鐘、歌、枕、聽、香、爐、茶、雪、撥、簾、看、(和漢朗詠集、白樂天)



西行  
歌僧。俗名佐藤義清。建久元年寂、年七十三。

東關紀行  
仁治三年秋京都を立つて鎌倉に下つた紀行。作者については諸説ある。

博雅  
源姓。平安朝の人。天元元年歿、年六十二。

延喜  
醍醐天皇。

逢坂の關  
近江國滋賀郡逢坂山にあつた關。

清水あたり涼しきまで澄み渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざるほどなれば、往還の旅人多く立ちよりに涼みあへり。かの西行が「道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそたちどまりつれ」と詠めるも、かやうの所にや。

道のべの木陰の清水むすぶとて

しばしすまぬ旅人ぞなき 「東關紀行」

### 一八 博雅の三位

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の克明親王と申しし人の子なり。よろづの事にすぐれてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。

その頃逢坂の關に、一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸と

ぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年ごろ琵琶を弾き給ひけるを常に聞きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

しかる間、此の博雅、彼の逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、彼の琵琶をいみじく聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸に云はせけるやう、何とて思ひがけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

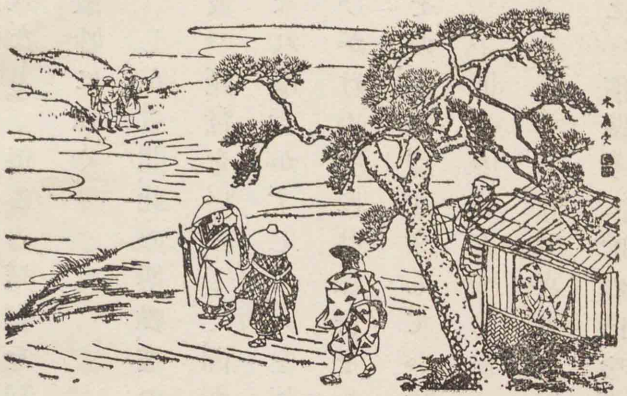
世の中はとててもかくても過してん

宮もわらやもはてしなれば

と。使歸りて此の由を語りければ、博雅いみじく心にしく覺えて、心に思ふやう、我あながちに此の道を好むによりて、必ず此の盲にあは



流泉・啄木  
共に琵琶の曲  
名。



蟬丸

が命のほども知りがたし。琵琶に流泉  
啄木といふ曲あり、これは世に絶えぬべ  
き事なり。たゞ此の盲のみこそこれを  
知りたるなれ。かまへて、これが弾くを  
聞かん。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行  
きにけり。

然れども、蟬丸その曲を弾く事なかり  
ければ、其の後三年の間、夜なく、逢坂の  
盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や弾く、  
今や弾くと、ひそかに立ち聞きけれども、  
更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少し上曇りて、  
風少し打吹きたりけるに、博雅、あはれ今宵は興あり、逢坂の盲、今宵こ

そ流泉・啄木は弾くらめと思ひて、逢坂に行きて立ち聞きけるに、盲、琵琶をかき鳴らして、物あはれに思へる氣色なり。博雅これを極めてうれしく思ひて聞くほどに、盲ひとり心をやりて詠めていはく、

逢坂の關のあらしのはげしきに  
しひてぞゐたる世をすごすとて

とて琵琶を鳴らすに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限なし。

盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。心あらん人の來よかし、物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふ者こそ此處に來たれ。」といひければ、盲のいはく、かく云ふは誰にかおはする。」と。博雅のいはく、我はしかく、の一人なり。あながちに此の道を好むによりて、此の三年、此の庵の邊に來つるに、幸に今宵汝に會ふ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。其の時博雅も喜びつゝ、庵の内に入り



故宮  
敦實親王。

て、互に物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聴かん。」といふ。盲、故宮はかくなん弾き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、たゞ口傳を以てこれを習ひて、かへすく喜びて曉に歸りにけり。

今昔物語  
平安朝の末期に成つた傳説物語。一に宇治大納言物語と云ふ。宇治大納言隆國の作と稱せられるに因る。

これを思ふに諸の道は、たゞかくの如く好むべきなり。それに近代は然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸、いやしき者なりといへども、年ごろ宮の弾き給ひけるを聞き、かく極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始まれるなりとなん語り傳へたるとや。「今昔物語」に據る。

一九 ベートーヴェン

わはははは

「悲しみを経ての喜」——これがルドヴィヒ・ファン・ベートーヴェンの

ベートーヴェン  
Ludwig van Beethoven、ドイツの大音楽家。

中澤臨川  
評論家、工學者。  
名は重雄、長野縣の人。大正九年歿、年四十三。

生の格言であつた。彼の一生は決して野心家を満足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは、苦しんでゐるもののために、そして、眞に苦しむことの出来る力のあるもののために、聖なる悲しみの甘露を恵むのである。

記憶せよ、——特に若い人々のためにいふ。——この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは、偉大を希ふものにとつて、常に孤獨と寂寥とに追はれなければならない山徑である。最も強いものでさへも、或時は悲哀と失望とのために、おのづとその頭を垂れないではゐられない場合がある。記憶せよ、こんな場合に、眞の偉大が汝を助けに来る。ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害得失の世俗戦に倦み疲れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志との世界に暫くでも身を置くことは、どれくらゐ我等にとつて強味であるかよ。偉人の身邊には、言葉に言ひ



ヒーロー  
英語 hero 偉人。

パン  
ポルトガル語、  
pão。

ボン  
Bonn, ライン  
河畔に在る、  
ロシヤの都會。

あらはすことの出来ない勇氣の感染力がある。

我等は運と偶然とによつて物質界に成功した著名な人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけがヒーローの名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を説くまい。要は偉大であることであつて、偉大に見えることではない。

偉人の生涯は長い犠牲に外ならない。悲惨な運命が、彼等の肉と靈の苦しみの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝に夕に苦痛と試練とのパンを食べた。

彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の世のより強い仲間を助けるためであり、また力と恵とを與へるためであつた。

ベートーヴェンは、一七七〇年ボンに生れた。彼の祖父も父も、その土地の王室附の賤しい音樂師であつた。彼の母はやはり貧しい

コック  
英語 cook 料理人。

オーケストラ  
英語 orchestra、  
管絃樂。又それ  
を演奏する  
劇場舞臺前の  
一區の席。

ウィーン  
Wien, オース  
トリアの首府。

コックの娘であつたが、その夫の酒癖のために、一生を一つの楽しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歳の時から、もう音樂を習はせられた。そして、残酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳の時から或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けなければならなかつた。

彼は十八歳の時、眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てなければならなかつた。彼の父は酒のために全く仕方のないものになりおぼせてゐたので、その受ける養老金さへ、直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦い經驗は、一生消しがたい深い印象を若い音樂家の胸に與へた。

一七九二年、彼はウィーンへ去つた。傷ましい生活の中にも、さす



がに若く美しい夢をはぐくんだ静かなライン川の岸邊を見棄てる  
ことが、どんなに惜しまれたことであらう。「我が故郷！そこは私  
が始めて日の光を見たところ、今も昔のやうに美しいところ。」とい  
つて、彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から、彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は自  
分の手帳にかう書きつけた。「勇氣！私の身體の虚弱にもかゝは  
らず、私の天才は前途に輝くであらう。……二十五歳！この年齢に  
今私は達した。……この年齢は人間がその全部を發揮しなければな  
らない時だ。」彼はまたかういつた。「私の藝術は貧しいものを救ふ  
より外の目的に捧げられてはならない。」

ちやうどその頃から、また最大の不幸が彼の身體に一生の宿を取  
つた。彼は聾になり初めた。世に音楽家はその耳を失ふことほど  
悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出来ないほどの苦

痛を忍んで、幾年かの間それを人に祕してゐた。しかしいよく、回  
復の見込の立たなくなつた時、劇しい絶望を以て、これを友達に打明  
けなければならなかつた。「親愛なる友よ。お前のベートーヴェン  
ほど不幸なものはない。私の一番貴い部分である聽感が、今私を見  
捨てつゝある。……私の愛するすべてのもの、私に親愛なあらゆるも  
のを捨ててまで、このみじめな邪慳な世の中に生き永らへなければ  
ならない私の一生は、どんなに悲惨であらう。……私はしばしばこの  
身を呪つた。……私はプルトークから忍従の徳を教はつた。出来る  
ことなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ぼうと思ふ。しか  
し、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つく  
づく考へ悩むことがある。……忍従よ。悲しい隠れ場所よ、たつた一  
つの私の隠れ場所よ。」

プルトーク  
Plutarch, 古代  
ギリシヤの人。  
有名な英雄傳  
の編者。

テレゼ  
Therese.



からは、ずつと孤獨の生活が続いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇との生活であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ。」と、彼はいつてゐた。或有名な曲を出した時などは、僅か七冊しか賣れなかつた。

愛も野心も去つた後、彼に残されたものはたゞ力だけであつた。その力の喜と、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一二年、彼を見た一人は、「どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識しはしなかつた。」といつた。

當時、或者は、彼の曲をさして、「醉漢の音楽だ。」といつた。確に醉漢の音楽だ。しかし、彼は自らかういつた。「俺は人類のために喜の神酒の口を開けてやるバッカスだ。俺は精神の聖狂を人間に與へる醉漢だ。」

彼はナポレオンを見てかういつた。「俺が音楽の術を知つてゐる

バッカス  
Bacchus. ギ  
リシヤ神話の  
酒の神。本来  
デオニッスと  
云ふ。

やうに戦術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを。」と。彼の容貌は



ンエヴェートーベ

ナポレオンによく似てゐた、殊にその意志を現す引締まつた口元が。この「未來の人道」を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として静かな往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた。「喜劇の終。」その日は殊に嵐が劇しかった、二月の寒い空には吹雪がして。



ンオレボナ

「悲しみを経ての喜！彼位聖い喜に憧れたものはなかつた。彼は悲惨な生活のどん底から、未來の人類のために、歡喜の福音を歌はうと思つ



第九交響曲

ベートーヴェンの交響曲、(獨語Symphonie)九番の中最終のとして最も有名なもの。これを歡喜と題したのはシルレルの頌歌「歡喜」を獨唱及び合唱に附加したの由る。一八二四年完成。

リヤ王

King Lear. シェイクスピア作の戯曲。

アウステルリッツ

Austerlitz. 一八〇五年にナポレオンが露埃聯合軍を破つたオーストリアの地名。

た。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗した後で、とうとう晩年にその希望を實現した。「第九交響曲」がそれである。

その曲の中途に、オーケストラが急に停まつたかと思ふと、深い神祕な沈黙がやゝ暫く續く。そして、歡喜の神が優しい靜かな歩を以て人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして、嵐の中のリヤ王のやうな狂暴に移つた後で、それがまた靜かな宗教的法悦の境に入り、最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶことが出来るか。アウステルリッツの戦勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。偉大な生の熱愛者！彼の口からは常に歡喜の聲が洩れた。不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ、おゝかくも美しい人生よ。」と。また、「私は千たび繰返して私の生を住みたいと思ふ。」と。

苦しむものよ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺激とはない。彼は自分が悲惨の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が後世の苦しむもののために助となることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は、己と同じやうな一人の人間、――あらゆる自然の障害にもかゝらず、男らしい男になるために、その全力を盡くした一人の人間を、こゝに見出して慰安を感じるであらう。」と。「嵐の前」

二〇 長柄堤訣別

長柄堤

本舞臺一面の道具幕、長柄堤の一部の心にて、深霧を透しておぼろに大阪城の天守見ゆる體。夜明方。幕あくと、大野の家來白倉權六、鐵砲を携へたる雜兵大勢を連れ立ちかゝり居る。

トばた／＼にて同じく大野の家來神崎治右衛門、向う揚幕より駈け出で来る。白倉すかして見る。

長柄堤訣別  
脚本「桐一葉」  
の大詰の場。  
時、慶長十九  
年九月の末。  
桐一葉に於て  
み本體と實演  
用との二種が  
ある。本筋は  
その實演用を  
據る。  
長柄堤  
大阪城の北、  
淀川の堤。  
坪内雄藏  
劇作家、文學  
者。文學博士。  
號は逍遙。安  
政六年岐阜縣  
生。



大野  
修理亮治長。

片桐  
市、正且元。豐  
臣家の重臣。  
「桐一葉」は此  
の人を主人公  
としたもの。

白「神崎氏でござるか。」

神「白倉氏か。片桐主従は程なくこれへ参りまするぞ。御油断めさ  
るな。」

白「心得申した。昨日彼が屋敷を圍み、お討取あるべきお手筈なりし  
が、修理亮様の御智略にて、わざと彼等の英氣を抜き、落ち行く途中  
で討ち取る魂膽。」

神「ねらひの的は且元一人。三十餘挺いつ時に、彼を目あてに切つて  
放たば、討ち洩らすことはよもあるまい。」

白「者共必ずぬかるまいぞ。  
皆々「心得ました。」

ト此の時鐵砲の音して、神崎に中り、よろしく落ち入る。これにて一同  
驚きあわてる。途端に下手より片桐が家來本村等を先に、家來大勢、何  
れも陣立にて、抜きつれて出で、

本「斯くあらんと豫ての手配り、主君を守護する我々が……  
皆々「遺恨の太刀先受けて見よ。」

ト切つてかゝる。大野方はあわて騒ぎ、すぐ逃げて入る。片桐方追う  
て入る。

トこれより床の淨瑠璃になる。

淨「晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや別  
れ行く横雲や、残んの星を一つづ、鐘が消しゆくいなめの、長柄堤  
に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き淀川みづ。」

トよき頃に道具幕を切つて落すと長柄堤の體。こゝに平舞臺上手よ  
き處に市、正床几に腰を掛け、その後に乗馬に馬丁二人附添ひ控へ居り、  
下手よき處に主膳、正つくばひ、その下手後に家來大勢控へて居る。

市「討手來らざれば自裁も叶はず、人々の諫に従ひ、茨木へ落去とは決  
せしもの、お家の後事を長門守に託し置きたく、先刻竊かに三右

主膳、正  
片桐且元の弟  
貞隆。  
茨木  
攝津國三島郡。  
片桐氏の封地。  
長門守  
木村重成。  
三右衛門  
今村三右衛門。  
且元の家臣。



清藏  
本村氏。且元  
の家臣。

衛門を木村が邸へ走らせたり。我はこれにて返事を待たん。御  
身は我に代り手勢を差配し、一足先へ参らるべし。  
主「仰ではござりますれど、油断ならざる折柄、只御一人此の處に御座  
あらんは心もとなし。

市「いや、それはいらぬ遠慮。我等が警護は、豫て清藏等に申し含め置  
いたれば氣遣なし……

ト向うを見て、

おゝ、あの人影は。

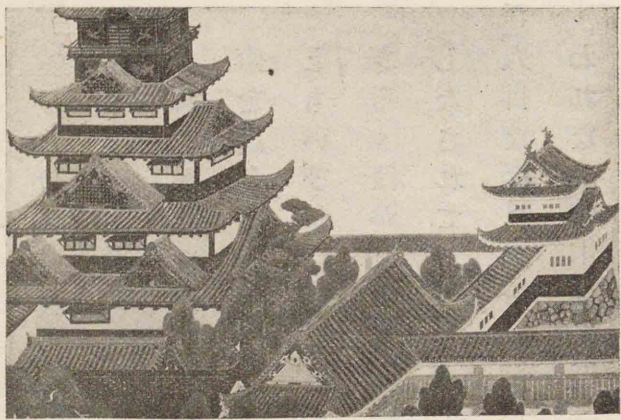
淨「詞のうちに遙かに足音。

ト此の時今村三右衛門、揚幕より急ぎ足にて出で來り、すぐに本舞臺へ  
來て、

今「はつ、申し上げます。長門様にはおつけこれへ。

市「大儀々々。然らば弟、御身は先へ参られよ。そちも共に。

ト今村へこなし、これにて主膳正は一同へこなしあつて、市、正に會釋  
し、皆々を引連れ、二重に上りて上手へ入る。



城 阪 大 の 時 當

淨「顔見合せて是非なくも、主膳を先に一  
同は、心残して行き過ぐる。

淨「後には何か一思案、寂然として駒立つ  
る、長柄堤のありあけがた、見る目も暗  
しをち方におぼろくと現るゝ、名に  
大阪の四衢八街。悄然として一棟高  
く聳えしは、

ト此の文句の間に市、正は馬に跨りて二  
重に上り、向うを見ることあり。

市「おゝ、あれこそは御天守ぢやなあ。

ト向うを見て宜しく思入。

南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、

故殿下  
太豊閣。



故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程も無きに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、  
淨言ひかけて聲曇らせ、こらへず馬より飛びくだり、

ト文句の通り。

これしかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、關東の毘に罹つて、御遺命に戻り奉る今日の仕合。不忠ともいひがひなしとも思し召されん。それを思へばこの腸はちぎるゝばかり。償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫仕らん。お赦しなされて下さりませ。

淨人目なければやゝ暫し、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心づき、われながら不覺の至。大罪の御詫よりも、さしかゝるお家の安危……長門守にはいかにせしか。はて心もとなき……

ト言ひつゝ、馬を二重上手物かけへ引き行きて繋ぐこと。

淨すかし眺むる折こそあれ、残霧劈き一さんに、走せ來る木村長門守。

ト向う揚幕より、長門守馬に乗りて馳せ來り、本舞臺の方をすかし見て、

木市、正殿に候な。

市、長門殿待ち兼ねしぞ。

ト二重をおりる。

淨言ふ間に駈け寄る轡づら、右手におり立ち顔見合せ、詞はなくてそぞろにも、まづ袖濡るゝ朝露や。

ト木村馬より下り立ち、且元と顔見合せ、暫くは無言にて落涙のこなし。頓て下手の柳の木へ馬を繋ぎて、舞臺の中央に進み、市、正と向ひ合ふ。

木、最早豊臣の御社稷も愈、末となつたるか。棟梁と頼む貴殿まで、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。

ト愁の思入ありて、市、正は傍の木の根に、重成は宜しくその下手に踞み、それがし圖らぬことよりして、はしなくも御母公の御嫌疑蒙り、出

御母公  
秀頼の生母淀君。



織田入道  
常眞。俗名信  
雄。

渡邊  
内藏介。

仕を遠慮のその間に、思ひ掛けぬ珍變あり。つゞいて貴殿に御討  
手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論涌く  
が如く、織田入道殿日頃に似げなく、激論の末、席を蹴立て、唯今退座  
ありしとばかり。跡は亂脈、無法の評定。御母公の威を笠に着る  
大野渡邊等が我意暴慢。この上は彼等を一刀に切つて捨て、腹搔  
つ切らんと再びまで、刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を、  
思ひいだして無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひ  
甲斐なさ。

淨「悔むを且元押しなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねてもしばく申せし如く、お家  
の大仇は彼等にあらざ。鼠輩のために命を捨つるは、大忠臣の所  
爲にあらじ。大切なるはお家の後事。某退去のこと關東に聞え  
なば、大亂破裂せんは目前なり。此の上は只偏へに、籠城の計畫こ

そ肝要なれ。

木「して籠城の計畫とは、何をもつて先とすべきか。

市「されば、今御城に兵糧金銀は乏しからず。まつた猛將、勇卒にも事  
缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし  
置いたり。

木「してその智謀の將と申すは、

市「今九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男左衛門、  
佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、先年お身方と爲  
し置いたり。合戦の駈引は一切かの仁に任せられよ。

木「して又籠城となつたる曉、敵を防がん手配は、

市「その儀も豫て地理を考へ、出丸なくては叶ふまじと、先年紀州の山  
山より、材木あまた伐り出させ、お船入に積みおいたり。まつた湊  
口の御藏には、年頃力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城

九度山  
紀伊國伊都郡  
の町。高野山  
の北谷に當る。



數年に互るといふとも、尙支ふるに餘あるべし。

木「之に加へて故殿下が、貯へ置かれし數萬の金銀、近年御費用嵩むといへども、尙そこばくの餘財あり。」

市「甲冑・兵具も乏しからず。」

木「城は名に負ふ南山不落。」

市「忠臣悉く心を一にし、あの堅城に立籠り、偏へに君家を守護すると  
きんば……」

木「たとへ關東の老奸雄、利を啗はせ諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡くし、四方八方より攻め寄すとも……」

市「中々三年四年が程には、攻め落さんこと難かるべし。」

速見  
通稱出來丸。  
夏の陣に戦死、  
年十五。  
御宿  
正倫。又武田  
政友に作る。  
和久  
名は宗豊、通  
稱又兵衛。夏  
年の陣に戦死、  
年八十一。

木「まつた若年には候へども、愈軍始まりなば、我又一方を承り、速見御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹きひるがへさん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一に

し、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利慾に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ市、正どの。

市「ほ、頼もしし。只大切は上下の一致、必ず忠勤はげまれよ……とはいひながら往時に照らし、成り行く末をかんがみれば……」

木「御母公の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

市「上、御發明に渡らせらるれど……」

木「讒佞これを覆ふが故……」

市「地の利はあれども人の和なく……」

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も……」

市「天の時にや大御所の、自らなる徳風に、いつしか靡く世の有様。」

木「いかなれば斯くまでに、御運傾く西天の……」

トこの内あちこちにて鶏の聲。市、正落ちかゝつてゐる月を見やりて、

大御所  
徳川家康。



市「有明の影うすれつゝ……」

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは……」

市「新日東天に昇るといふ……」

木「世の成行の……」

兩「影なるか。」

淨「是非もなき世の有様と、暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのゝと明けにけり。」

此の時鐘の音聞ゆる。夜明の心。尙處々に鶏の聲。

市「後事をそこもとに託せし上は、最早思ひ残すことも無し。」

木「して貴殿には是よりして……」

市「居城茨木へ一まづ立越え……」

木「と仰あるは受取り難し。もしもやこれが今生の……」

市「あゝいや、潔き最期をだに遂ぐべき機会を失ひし市、正が命の拙さ。」

御説の名こそ立たため、償ひ難き身の大罪。この身一つをとやかくと、千筋に迷ふ心の中。（言ひかけて氣を換へいやなに、心ばかりはこの後とても、君の御影に付き添ひ參らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなんその時には……）

木「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思ひ出、奉公納め、關東勢が眞中に、縦横無盡の血戦なし、華々しく討死なさん。」

市「おゝ勇ましし潔し。某長らへ世にあらば、その目覺しき働をば、餘所ながら見物なさん。尙再會は黄泉にて。」

木「さやうござらば市、正どの。」

市「随分堅固で……」

木「貴殿にも……」

淨「惜しきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば、黄蘗は蜜にも似たるらん、駒引寄せて式退や、見返りがちに乗りうつる、秋さび月毛



乗る人の、心やいかに片手綱。

トこの内木村は柳の木に立寄りて、馬の紐を解く。市正は鐵扇を開きて、二重の上手へ合圖をする。

ト木村清藏二重の上手より以前の馬を引きて出で、平舞臺へ下りる。これにて市正も木村も馬に乗る。

市「さらば。

木「さらば。

淨」と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろく、嘶く駒の聲はして、此の世に残す面影は、また見ぬ影とぞなりにける。

トこのうち市正は二重の上へ、木村は平舞臺の下手へと馬を進め、互に見返ることよろしく。幕 「桐一葉」

お井 吃翠

### 二二 萬里長城

生ける歴史か數ふれば

齡は高し二千年

つらら  
土井晚翠  
詩人。第二高等學校教授。名は林吉。明治四年仙臺市生。

影は萬里の空遠き

名も長城の壁の上

落日低く雲淡く

關山看すく暮れんとす

征驂懐みとままりて

俯仰の遊子身はひとり

絶域花は稀ながら

平蕪の綠今深し

春乾坤に回りはて

霞まぬ空も無かりけり

天地の色は老いずして

人間の世は移らふを

歌ふか高く大空に

姿は見えぬ夕雲雀

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ

歳は流れぬ千歳の

昔に返り何の地か

かれ秦皇の覇圖を見ん

殘壘破壁聲も無し

恨も暗し夕まぐれ

春朦朧のたゞ中に

俯仰の遊子身はひとり

邦は亡びて邦に次ぎ

人は代りて人を追ふ

秦皇  
秦始皇帝。



鼎は移る朝二十

歳は流る、曆二千



萬里長城

中華幾たび烽舉り  
又こえ去りし國民の

長城の壁越えきたり  
數さへいかに世々の跡

山川影はかはらねど

春夢空しく跡も無し

群雄の覇圖いたづらに

残すは獨り史上の名

獨り邊土に影絶えず

齡重ねて二千歳

残壘苔に今青む

長城の影たふとしや

民の膏血世の笑

虐政の形見それながら

歴史の色に染められし

萬里の影ぞなつかしき

其の面影に忍びてて

泣くは懐古の露のみか

暮春の恨誰がために

霞も咽ぶ夕まぐれ

霞も咽ぶ夕まぐれ

遊子俯仰の物思

北夷禦ぎし長城の

昔の跡はかはらねど

時世空しく流れては

中華の姿あすいかに

秦漢魏晉移り行く

昔の跡に引換へて

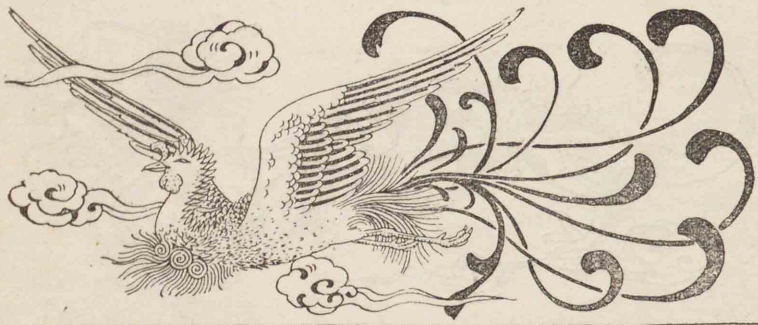


西の嵐の吹き寄する  
 西曆一千九百年  
 中華の光先王の  
 愛を四海に傳ふべき  
 看ずや豺狼の慾飽かて  
 群羊守る力無く  
 俯仰古今の物思  
 征驂恨み嘶ける  
 思も遠く眺むれば  
 自然の樂も絶え果てつ  
 恨を含む長城の

黄海の波今あらし  
 東亞の嵐あすいかに  
 道此の民を救ひ得じ  
 神人の教いま空語  
 基督教徒血を啜り  
 異郷の民の聲吞むを  
 遊子の恨いつ盡きん  
 響をかへす壁のもと  
 霞たゞよふ大空の  
 關山暮れて星出でて  
 姿は闇に吞まれ行く。「曉鐘」

景雲

慶雲の義「龍  
 舉景雲往。」楚  
 辭「景雲太  
 平應。」晋書「  
 與謝野品子  
 歌人、詩人。  
 詩人與謝野寬  
 の妻。明治十  
 一年堺市生。

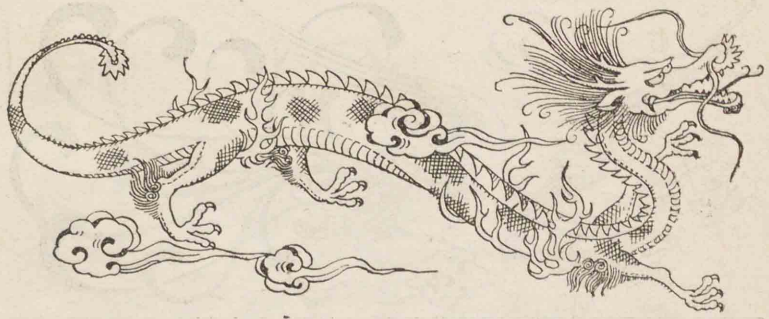


二二 景雲頌

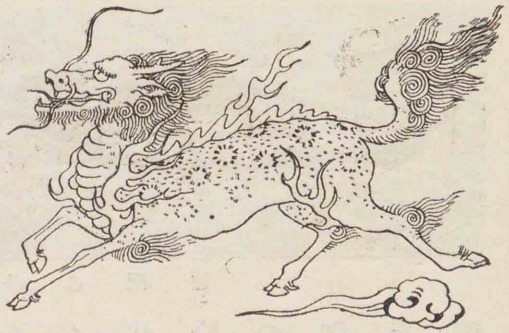
景雲頌

みやつこは萬歲<sup>ばんざい</sup>麻<sup>あ</sup>の濃き赤に民のこゝろ  
 を現して立つ  
 菊咲きぬいく千よろづの長き秋しろしめ  
 すなる大君<sup>おほきみ</sup>のため  
 すめらぎの土御門<sup>つちのみかど</sup>殿むらさきの雲立つ秋  
 を思ふかしこさ  
 とことはに變る世あらじ菊の花さくら橘  
 くれ竹の庭





この秋は西の都の木ともなり草ともなり  
 て御輿に逢はん  
 かぐはしく帝后のおん上を朝々かたる菊  
 の花かな  
 天つ日と畏けれども國民の護りつかふる  
 すめらぎと知る  
 東方に神代と近き悠紀主基のまつりを一  
 つもてる國これ



儀移りて廻立殿を踏みたまふ若きみかど  
 に御笠侍ふ  
 御代を祝ぐ五節も國栖の舞人もまはぬ我  
 等も歌はぬ人も  
 ひんがしの日の本の民この君に五百秋か  
 けて仕へまつらん

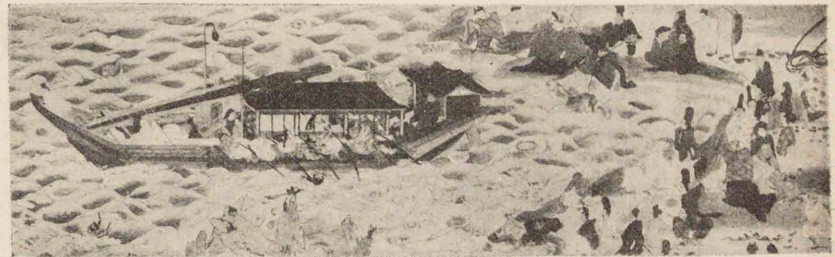
二三 菅公の配流

右大臣才も世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外  
 にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣り給へ  
 るにより、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安から

右大臣  
菅原道真  
左大臣  
藤原時平



昌泰四年  
昌泰は醍醐天皇の年號。此の年延喜と改元。



ず思したる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月二十九日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。この大臣の子どもあまたおはせしに、女君達は婿どりし、男君達は皆ほどくにつけて、位どもおはせし公を、それも皆かたぐに流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなんと、おほやけも許さしめ流給ひしかば、共にゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣はさざりけり。かたぐにいと悲しくおぼして、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かばにほひおこせようめの花

あるじなしとて春を忘るな

亭子のみかど  
醍醐天皇の父  
帝宇多天皇。

また亭子のみかどにきこえさせ給ふ、  
流れゆく吾はみくづとなりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事により、かく罪せられ給ふを思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。その程きはめて悲しきこと多かり。日ごろ經て都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿のこずゑをゆくくと  
隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へるけしきを御覽じて、作らしめたまへる詩、いとかなし。



驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしましつきて、あはれに心細くおぼさるゝ夕、を  
ちかたに處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ煙

なげきよりこそもえまさりけれ

また雲の浮きてたゞよふを御覽じて、

山わかれ飛びゆく雲の歸りくる

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりともと世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水のそこまでも

きよきこゝろは月ぞてらさん

これいとかしこく遊ばしたりかし。げに月日こそはてらし給はめ  
とこそはあめれ。

月日こそは  
禮記の「天無私覆、地無私載、日月無私照。」に據る。

今月日は  
今月日は  
今月日は  
今月日は  
今月日は

まことと

こゝまでは大宅世嗣と云ふ此の物語する老人の詞であつて、まことに云々からはそれを聽いてゐる人の感嘆の詞で、即ち記者の筆である。

繁樹

夏山繁樹といふ老人で、前の世嗣の相手

筑紫に

又世嗣の詞になる。

大貳

太宰大貳。當時は藤原興範

觀音寺

天智天皇の御草創。

文集

白氏文集。

まことにおどろしき事はさるものにて、かくやうの歌や詩な

どをさへいとなだらかにゆゑしういひつゞけ給ふと、見聞く人

目もあやにあさましくあはれにまもり居たり。物のゆゑ知りたる

人などもむげに近く居よりて、外目せず見聞けしきどもを見て、い

よ／＼はへて物をくり出すやうに言ひつゞくる程ぞ、誠にけうなる

や。繁樹、涙をのごひつゞけうじみたり。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居ど

ころは遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられ

けるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめ

して作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色

觀音寺只聽鐘聲

これは文集の白居易の「遺愛寺鐘欵枕聽香爐峰雪撥簾看」といふ詩にもまさりさまに作らしめたまへりところ、昔の博士どもは申し



九月のこよひ  
昌泰三年九月  
九日。

京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このお

とゞ作らしめ給へりける詩を、帝かしこ  
く感じ給ひて、御衣たまはり給へりしを、  
筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽  
ずるに、いとどそのをりおぼしめし出で  
て作らせ給ひける。

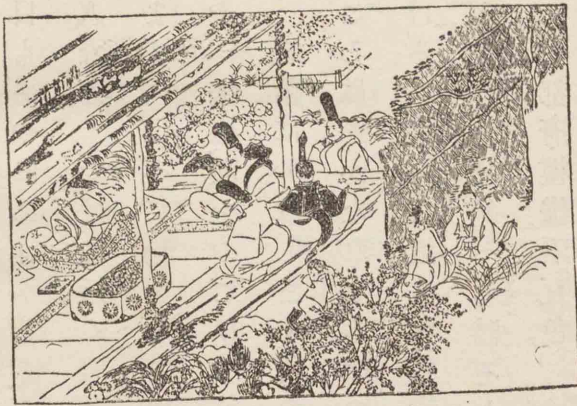
去年今夜侍、清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々感じ申され  
き。此の事どもたゞちりぢりなるにも



(詞繪起縁神天野北) 御衣を拜す

あらず。かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きあつめ、一卷  
とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。又をりくくの歌書きおか

後集  
菅家後集

せ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。世繼が若う侍  
りしとき、この事のせめてあはれに悲しく侍りしかば、大學の衆ども  
の生不學にはいますかりしを問ひたづね、語らひとりて、さるべき餌  
袋わりごやうの物調じて、うち具してまかりつゝ、ならひとりて侍り  
しかど、老のけのはなはだしき事は、皆こそ忘れ侍りにけれ。これは  
たゞ頗る覺え侍るなりといへば、聞く人々、げに〜いみじきすきも  
のにも物し給ひけるかな。今の人にはさる心ありなんや。」と感じあ  
へり。

又雨のふる日うち詠め給ひて、

あめのしたかわけるほどのなければや

着てし濡衣ひるよしもなき

やがてかしこにて失せ給へり。「大鏡」

又雨のふる日  
又世嗣の詞。  
大鏡  
文徳天皇から  
一條天皇まで  
十四代の事を  
記した歴史。  
藤原爲業の著  
といふ。



井伊大老

近江彦根の藩主、後掃部頭と云ひ、安政五年幕府の大老職となる。その擅斷世の批議を招き、萬延元年三月三日遂に水戸浪士に櫻田門外に刺された。年四十六。  
中村吉藏  
劇作家。明治十年鳥根縣津和野町生。

主膳

長野氏。佐幕家、又歌人。井伊家の用人。京都に上つて幕府のために周旋してゐた。文久二年刑死。年四十八。

二四 井伊大老

中村吉藏

井伊家御用人宇津木六之丞入り來る。五十四五歳の年輩健かな體つき、目を鋭く働かせて大老の居室を檢める。小姓小河原秀之丞刀を捧げて入り、刀架にかけ、褥を直す。井伊大老衣服を更めて入り、座につく。井伊(くつろいだやうに)六之丞、今日も生きて歸つた…… あゝまたあの菊が見られる、見事に咲いてゐるな。

宇津はつ、無事に御歸り遊ばしまして、ほつと致しました。毎日々々お顔を拜するまでは胸が板のやうに硬ばつて居ります。

井伊うん。屋敷には何も變つた事はなかつたか。

宇津はつ、何の異變もござりませぬ。

井伊京都の主膳からは、その後飛脚は來ぬか。

宇津昨夜の書狀が着きましてから後は、まだ何の沙汰もござりませぬ。

ぬ。

井伊さうか。(と言つて秀之丞の捧ぐる茶を飲む)いや旨い。殿中ではお茶一つうつかり飲めぬからの。

宇津お大抵ではございませぬ。殿には御空腹かと存じ上げますが、例のとほりお膳部を差上げませうか。

井伊いや、今日は屋敷から持つて參つた例の餅が多かつた。おかちん腹……いや餅腹だから、持がいゝよ。はゝゝ、膳部はもつと後でよろしい。

宇津お疲れの所へ早速申し上げるもいかがかと存じますが、江州清涼寺の仙英禪師殿が祖師の御年忌とやらで、急に思ひ立つて江戸へ上られましたので、一寸御目通が願ひたいといふことで、あちらに控へて居られますが、いかがが取計らひませうか。

井伊(嬉しげに)なに仙英和尚が……それはく、珍客ぢや。何日まで



でも屋敷にお泊め申しておもてなしをせい。早速御目にか、らう。

宇津は、……實は明日中仙道から御歸山のやうなお話でございまして。……では書院へ御出でなされますか。

井伊明日お歸り……それはあんまりお名残惜しいな。……禪師と予とは師弟の交ぢや。書院への出開帳には及ぶまい。此處が却つて心安くてよからう。御通し申せ。

宇津は、畏まりました。(退場)

井伊師の御坊に、居ながらお目に懸れようとは思ひもよらなかつた。これも不思議な佛縁であらう。……暗くなつた。秀之丞、燈明をつけい。

仙英和尚は清鶴の如き老禪師、六之丞に案内されて入り来る。

井伊(恭しく一禮)これはくようこそ。……思ひがけない事で、地獄で

佛といふのはこの事でございます。相變らず御健かて結構でございます。

仙英(一揖)私もひよつこり江戸へ出て來ましたのぢやが、つい貴方の顔が見たうなつてな。

言ひく、ぢつと大老の顔を見すゑて言葉を切る。

井伊どうか、暫く當屋敷へ御逗留なされては、仙英(黙つて暫く見すゑてゐたが)井伊公、貴方は、日本の爲に、今大難に出逢つてゐられるな。井伊は、いかにも大難に出逢つてゐます。

仙英さうぢやらう。右へ向いても、左へ向いても、上を見ても、下を見ても、白刃の劍で八方塞がりぢや。劍の山の眞中につつ立つてゐられるのぢやな。



井伊直弼



井伊は、如何にもおつしやる通でございます。

仙英 貴方の顔には、劍難の相がありくと出てゐます。

井伊 黙す。

宇津 えつ、あの劍難の御相が？

仙英 黙つて頷く。

井伊 は、實は、かげ腹を切つて、生き存へてゐる氣で居りましたが、今の

御一言で私の往くべき途がはつきり見えました。有難う存じ

ます。

仙英 いや、さすがは井伊公……須らく千仞の懸崖に手を撒して絶後

に再び蘇られい。

井伊 これ生に非ず、死に非ず、たゞ一箇の無の字あるのみ……覺悟は

定めて居ります。

仙英 それでまづ安心しました。……時に、私に一人お供がある。身分

違ぢやから大老様の御前へは出られぬ。御多忙の折柄、正式でない、ほんの御茶一服立てて戴いて、このお室をそのまま、昔の埋木の舎の澍露軒にしたら子細なからうと思ふが、どうでございませうな。



蹟筆彌直伊井

井伊 委細心得ました。お供は誰でございませう、一寸見當が付きか

ねますが、逢へば分りますな。秀之丞、薄茶を立てい。お供は何

卒此方へ。六之丞、御案内せい。

宇津 は……(六之丞と秀之丞とは立つて行く。)

仙英 はあ、昔ながらに、楊柳の樹が御寵愛と見えて、この樹はいつも井

伊公の影身に添うて植ゑられてゐますな。

春あさみ野中の清水氷居てそのころをなくむ人ぞなき 澍露軒



井伊それも秋に逢うては葉が散りくゞで、あゝして骨ばかりになつて、ほつはん犛然と立つて居ります。だが、たとひ骨が舍利になつても、楊柳はやつぱり楊柳に相違ありませんでな。

仙英 御尤もでござる。

六之丞 粗末な服装の老人左官利八を連れて入り来る。

宇津 お連れ申しましてございます。

利八 殿様……左官屋利八めでございます。

伊井(膝を拍つて) あ、誰かと思つたら昔の茶友達、左官屋利八か。よく来てくれた。仙英和尚殿と同道で江戸へ出たのか。

仙英 一生に一度、江戸が見て死にたいといふことと、一緒に來ましたぢや。

利八 お蔭で江戸を見物しますし、大老様にもお目にかゝれまして、もう心置なく成佛が出來ます、はい……大した御出世でございま

すな。

井伊 いや、お前と逢へば、昔ながらの部屋住の鐵之介に戻つたやうな氣持がするよ。どうぢや、近頃世間の景氣は。

利八 あきまへんな。黒船が來よつて、愈貿易が開けると、何でも異人が金銀を皆さらつて行くのや言ひましてな、米の値がどんく上りますのや。皆難儀しとりますさかひ。

六之丞 これ、御前でそのやうな事を……

井伊 いや構はぬ。ありのまゝを聞かせてくれるからよいのぢや。

……成程な。あの近江の湖水の井堰を急に切つて落したら、川下の小魚は、一時みな脾腹をかへさうも知れぬ。開港がすべての國民に智慧と富とを貢いでくれるまでには、永の月日がかゝらう。それまでは井堰の口を切つたものは、皆に呪はれよう……







モネ  
Claude Monet.  
佛國印象派の  
畫家。一八四  
〇—一九二六  
年。

して、高く東に向ふが故にそこだけくつきりと朝光を浴びる。「進軍」  
——モネが喜び描いた朝光の紅は、希望の色に深く彫刻を塗つた。  
睡るものの早曉の夢を破つて、軍神の號令が警鐘の如く響くやうだ。  
踴躍して進み立たないものは誰だ。誰が卑怯者だ。老兵も立つ、若  
い者も立つ。誰も行かねばならぬ人生の進軍だもの。初陣の若い  
兵卒の早くも刀に手をかける初々しさを見てやるがい。彼は未  
だ人生の經驗を持たない。勇み勇む武者ぶるひ。けれども此の興  
奮を如何していゝか解らない。望みのあるやうな人生、しかし何だ  
か底が知れない。猛獸の兒が感ずるやうな若い臆病に、途方に暮れ  
て側の老兵の顔を仰ぎ見る。人生を知りぬいた老兵の、如何にあは  
れ深くも見下すことか。

言ふはやさしく、深く感ずることの難き人世の實相よ。無暗に勇  
む美しき若武者、何故勇むのか、何に向ふ理想なのか、刀を執つて敵を

自由の女神の鼓舞に依り國民が各、劍と槍を國難に赴くと  
する有様を表し、あるものゝリユードか其の祖國に  
對する感情を表したものと、この最も著名な作品。



(作ドーユリ) 軍 進



目指して——さてその敵が何處に在るのだ。敵と言ひ味方と言ひ、理想と言ひ現實と言ふ。それ等が同一なる灰色に融け流れて、寂しい人生の薄明のみがどんよりと疲れた身を取巻く。何も彼も解らなくなつて遣る瀬なさのみ残る時がお前にもやがて來るのだ。慙れなものよ。けれども行け、行くところまで行け。卑怯者の名だけは取るな。

嗚咽  
悲しい人生の進軍である。突喊か、嗚咽か。老兵の耳には行進曲よりも愀々として葬弔曲が聞えるやうだ。生の歡呼の背後に死の舞踏が見えるやうだ。けれども、否應なしに行く。實相を見ることの惨ましきことよ。けれども、實相を踏んで飽くまでも歩いて行くのだ。前途を知つて、悲しい顔をして、そして覺悟して、後に來る若い者を勵ます老兵の心を、誰がひし／＼と感じないか。若者に言ふ老兵か。私に言ふ老兵か。老兵が私なのか。重い足どり、しかし勇



ヴェニス  
Venice. 伊國  
首ヴェネチヤ  
イタリヤ北東  
部の都會、水  
の都として知  
られてゐる。

ましく進んで行く老兵は、私に於てかくあるべき人を象徴するやうであつた。

悲しき人生よ、眼ある者は見よ、感じ易き心を抱いて旅する者は世界の隅から隅に互つて、傷心の縁を見出さぬ限はないであらう。食はねばならぬ。愛さねばならぬ。一つの食物を二人が食はうとしたら如何する。ヴェニスは楽しき都と聞いた。子供が俱に遊び、遊覽客が競つて餌をやるサンマルコ寺の鳩。鳩こそ生を享樂するものとしか見えない。けれどもさうではない。餌を眼の前にながら弱い鳩、跛の鳩は倒され踏みつけられる。——生の進軍の犠牲者を如何しよう。進軍を意識する者も、人生の悲哀に觸れる時、正しい足どりが鈍りさうだ。けれども行け。泣いて、そして行け。感傷と正しさと何れを選ぶか。

北歐の冬のさても淋しいことよ。太陽の國から來て、朝から霧の

多い、そしてその霧が濃くなつたかと思ふと、いつの間にか暗い長い夜になる北方の冬に、私は流竄者の寂寥を持ちあつかつて居る。燈火の美しい巴里、けれども、その燈火は徒に美しいに過ぎない。それでも夏の虫の火に焦れるやうに、淋しい人の誰もがする通り、毎夜のやるせなさを燈火の街に消さうと散歩に出る。魂の郷愁を覆はうとしたつて出来るものか。悲しむだけ悲しむがいゝ。外に出れば、夜がまた一ぺんに暗くなつた。暗い道をホテルを指して歩く。

若し此の時、私の眼がリュードの大彫刻に落ちなかつたならば、悲しがる私の毎夜の夢が結び得たらうか。ホテルへの道が大凱旋門に突當る。濃霧を透して、軍神は魔の駛るかのやうに、一ぱいに夜に擴がつてまざくと見える。濃霧が風に白く搖れると、軍神も動くやうだ。右手に劍を執つて永遠の前途を指し、左手は伸びる限り天に伸ばして、人生の行軍をさしまねく。暗い羽搏きが夜を罩めて全



巴里を覆うて居る。巴里が爛々たる燈火に遊んでゐても、或は巴里の闇が罪に泣いて居ても、或は又疲れた巴里がやうやく熟睡に陥つても、獨り軍神は人生を象徴して、不斷の號令を叫んで居る。倒れるまでも進め！

高きより、巴里の夜を、そして人生の夜を、二つの響が守つて居る。一つは

セーヌの河に蕭々と鳴るノートルダム本寺の鐘聲である。それは私の想像に於て、パンテオンにシャヴァンヌの描いた聖ジュヌヴィエーヴの壁畫と混じてしまふ。青白き月光が眠れる巴里を浸して居る。月光の精のやうに年老いた聖尼は高樓に佇んで、人々安かれと、眠れる都を見守



ゲーエイグヌエツ・トンサ  
(作×アバヤシ)

ノートルダム本寺  
Notre-Dame de Paris、聖母寺の義、巴里の中央大會堂  
パンテオン・聖ジュヌヴィエーヴ  
Pantheon、至聖殿の義、元巴里市の守護者サン・トジュヌヴィエーヴ (St. Genevieve) のために建立した殿堂、後フランス諸名士の合祀所となる  
シャヴァンヌ Pavis de Chateaux、フランスの畫家、一八二四—一八九八年

つて居る。物靜かな無限の愛である、心配する母の愛である。霧の中に響く本寺の鐘が、河岸に古本をあさる私を幾度青白き愛に泣かしたらう。けれども、今一つの軍神の雄たけびを聴かないで居られようか。儼乎たる人生の進軍を回避して、一向月光に夢みて濟むと思ふ者は、人生の遊戯者である。愛ではない、感傷である。「愛」の名に於けるが故に、尙更蔑まるべき遊戯である。人生の嚴肅を強調する者は、「月の光を殺せ。」とまで言ふ。私は思ふ、人生の進軍は愛の進軍である、實相の上に愛の王國を建設しようとするものである。聖徒も共に行く行軍、私も潔く行かねばならぬ。

フランソアリュードの彫刻、それはかういふことを考へて作られたものでないかも知れない。單に一七九二年の佛軍の出發を記念した愛國心の表白であるかも知れない。けれども、作者の動機が觀



者の上にどれ丈の拘束があらう。惱む魂に惱む魂からの自らなる啓示と交響とがある。それに向つて憧憬の耳を傾けない位ならば、何のために藝術を見る。藝術に於て私は「友達の私語をする。」

「太陽を慕ふ者」

### 二六 倫敦塔

### 夏目漱石

倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史である。ボーシヤン塔の歴史は悲惨の歴史である。十四世紀の後半に、エドワード三世の建立にかゝる。この三層塔の一階室に入るものは、その入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶したる無数の記念を、周囲の壁上に認むるであらう。凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲しみとは、この怨、この憤、この憂と悲しみの極端より生ずる慰藉と共に、九十一種の題辭となつて、今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷かなる鐵筆に無情の壁

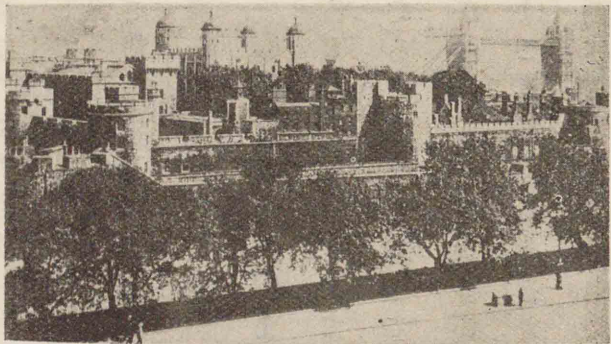
倫敦塔

ロンドン市内古建築の一。築造に始まり、築造に増築を經つて二十の塔の集合をなす。その一部は皇居となつた。此罪人もあり、又皇族名士など、この拘禁所となつた。あつた。

夏目漱石

小説家、英文學者。名は金之助。東京の生、大正五年、年五十。多数的な塔も悲劇的な塔

の名。最初オリック伯トマス・ボーンヤン(Thomas Beauchamp)のこの名が、この壁の上の陰惨な、或は宛に訴へ、或は宛に死の恨み、或は死の文句を、或は指の爪で印刻せられてある。エドワード三世の子。一三三七



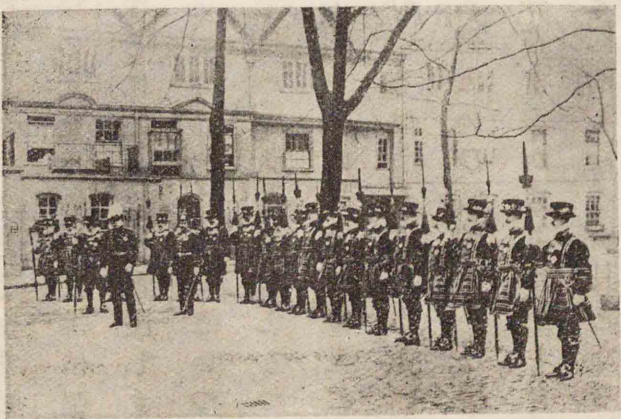
倫敦塔

を彫つて、わが不運と定業とを天地の間に刻みつけたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつまでも娑婆の光を見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に反語といふがある。白といつて黒を意味し、小と唱へて大を思はしむ。凡ての反語のうち、自ら知らずして後世に残す反語ほど猛烈なるは、またとあるまい。墓碣といひ、記念碑といひ、賞牌といひ、綬賞といひ、是等が存在するかぎり、空しき物質にありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。我は去る、我を傳ふるものは残ると思ふは、去る我を傷ましむる媒介者の残る意にて、我その物の残る意にあらざるを忘れた



る人の言葉と思ふ。未來の世まで反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てて貰ふまい。肉は焼き、骨は粉にして、西風の強く吹く日、大空に向つて撒き散して貰はうなどと、入らざる取越苦勞をする。

題辭の書體は固より一様でない。あるものは閑に任せて丁寧な楷書を用ひ、あるものは心急ぎてか、口惜しまざれか、がり／＼と壁を搔いて擲り書に彫り付けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで、その中に古雅な文字を留め、或は楯の形を描いてその内部に讀み難き句を残して居る。書體の



倫敦塔番人

異なるやうに、言語も亦決して一様でない。英語は勿論の事、伊太利語も、羅甸語もある。こんなものを書く人の心は、どの様であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に、何が苦しいといつても、所在のないほどの苦しみはない。意識の内容に變化のないほどの苦しみはない。使へる身體は目に見えぬ繩で縛られて、動きのとれぬほどの苦しみはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながらこの活動を抑へられるのは、生といふ意味を奪はれたのと同じ事だ、その奪はれたのを自覺するだけが、死よりも一層の苦痛である。この壁の周圍をかくまでに塗抹した人々は、皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるゝかぎり、堪へらるゝかぎり、この苦痛と戦つた末、居ても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘の折や、鋭き爪を利用して、無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩し、平地の上に波瀾を畫いたものであらう。彼等が題した一字一







者はあるまい。又その薄命と無残の最後とに同情の涙を濺がぬ者  
はあるまい。ジェーンは、義父と所天との野心の爲に、十八年の春秋  
を罪なくして惜し氣もなく刑場に賣つた。蹂み躪られたる薔薇の  
蕊より、消え難き香の遠く立ちて、今に至るまで史を繙く者をゆかし  
がらせる。余はジェーンの名の前に立ち留つたぎり動かない、とい  
ふよりむしろ暫く動けなかつた。「倫敦塔」

二七 秋の氣魄

豊島與志雄

秋と云へば、人は直ちに紅葉を連想する。然しながら、紅葉そのも  
のは秋の本質とは可なりに縁遠いことを、私は思はずにゐられない。  
楓の赤色から銀杏の黄色に至るまでのさまざまな紅葉の色彩か  
らぢかに來る感じは、しみじみとした専念の秋の感じとは、よほど距  
つてゐる。都會にゐてはさうでもないけれど、一步田舎に踏み出し

豊島與志雄  
佛文學者。明  
治二十三年福  
岡縣生。

てみると、山裾の木立の紅葉や、田畑の熟し切つた黄色い農作物や、赤  
赤と差す日脚などは、それをそのまま抽出して觀ずる時には、寧ろ殘  
暑に屬すべきもので、眞の秋の領域ではない。試みに、我々の住宅や  
居室を、それらの色彩の何れかで塗りつぶすとしたならば、吾々の生  
活氣分は、可なりに落付のないものとなることであらう。そしてこ  
の落付のなさは、秋の頼りない氣分とは、全く別種のものである。

紅葉に秋の氣分を興ふるものは、紅葉のうちの活力の缺除である。  
私は茲に、綠葉が何故に紅葉するかといふ、科學的の説明を持ち出し  
たくはない。たゞ紅葉に活力のないことだけを云ひたい。かりに  
野山の紅葉が、あのまゝの色彩で生々と生育する世界を想像してみ  
れば、それが秋の世界だとは誰も云ひ得ないであらう。活力のない  
紅葉なればこそ、秋にふさはしいものとなる。秋の山野を冠する赤  
や黄の色彩は、房々とした少年の金髪ではなくて、生活を盡くした



初老の人の赤毛である。

活力のない紅葉は、一夜の冷風に散つてゆく。そしてこの落葉こそ、本當の秋のものである。庭に散り落ちる桐の一葉から、林の中に舞ひ落ちる無数の木の葉、または半ば霜枯れた野の草葉に至るまで、悉く秋の氣分に濃く塗られてゐる。かさ／＼と鳴る落葉を踏んで林中の小徑を辿る時、人は最も深く秋を感じる。

何處からともなく流れ来る微風に、常緑樹の病葉や落葉樹の紅葉は、何等の努力もなく如何にも自然に、梢から地上へと舞ひ落ちる。地のもものは地へと大自然の聲が囁く。而も地面へ落ちついた枯葉は、なほ其處に安住し得ないで、何處ともなく風のまに／＼吹き散らされる。その方向を辿つて林から出れば、收穫後の廣々とした田畑が、露はな肌を眼の届く限り展べてゐて、霜枯の叢からは、實をつけた雑草の莖が、淋しげにすい／＼と伸びてゐる。そして人の心も、己自

身の肌寒い淋しさに驅られて、遠い地平線のあたりへとさ迷ひ行く。その地平線の彼方に、淡い夢のやうな憧の世界がある。

秋は淋しい、といふのは眞實である。秋はあらゆるものの外皮を、不用なものも有用なものも、凡て複雑多様な外皮を、自ら振ひ落さしめて、萬物を裸のまゝでつゝ立たせる。秋を淋しくないと云ふものは、衣服を脱いで眞裸でつゝ立つ折の、妙に佗しい頼りない淋しさを、鈍感のためにか或は厚顔無恥のためにか、身に感じない底の者であるに相違ない。

かゝる落葉の——剝脱の——世界に、更に特殊の氣味を添へるものは、淡いながらに鋭い日の光である。やゝ南方に傾いた日脚と、北から来る冷かな微風との爲に、その光は弱く淡くなりながらも、極度に澄み切つた空と大氣とのために、非常に鋭くぢかに射してくる。宛も眞空中に於けるがやうに、何物にも遮らるゝことのないその光



が、如何にくつきりとした日向と影とを地面の上に投げてゐるかを見る時、人は殊に深く秋を感じさせられる。落葉の上の木立の影、田の畝の草葉の影、野の上の鳥の影、そして狭苦しい都會の中にあつても、苔むした庭の上の軒影、障子にさす植込の枝影、それらのものが、明るい日向ときつぱり區劃せられてゐるのを見る時、人の心には云ひ知れぬをのゝきが傳はつて來る。

このをのゝきこそ、秋が持つてゐる本來の感じである。靜まり返り澄み返つてゐる剝脫の世界に、まぎ／＼と現出せらるゝ、明暗の區劃は、ぢかに、人の心に迫つて來て、眞裸な心のうちにも、くつきりとした光と影とが投げられる。そして人は知らず識らずに、自分の心を凝視する専念の裡にはひつてゆく。純なるもの、不純なるもの、澄んでゐるもの、濁つてゐるもの、それらがきつぱりと形を現して來る。

斯かる赤裸な凝視の眼は、それ自身の性質上、未來に向けられない

で、たゞあるがまゝの自分自身——過去を荷なつてゐる現在の姿にのみ向けられる。そして自然も人も、秋の世界全體が、自分の赤裸な姿を見守る専念のうちに沈黙する。

この専念の沈黙、それを堪へることが出來、それを眞に味感ずることが出來る者にとつてのみ、秋は淋しくも佗しくもない。其處にはたゞ、清淨な冥想のみがある。遠い地平線の彼方へまでさ迷ひ出る魂が、そのまゝの憧を抱いて胸の中に戻つてくる。そして健かな清い感激が、あらゆる雑念を吹き拂つて、自己の存在感——ぢかに胎にこたへる存在感——を強調する。

かういふ意味に於てのみ、秋は讚美すべきである。そして、修道院の祈願を思はせるやうな爽快な夜明と、靈的な月明の夜とは、何等の卑俗な氣分にも濁らさるゝことなく、そのまゝ、人の心に受け容れられる。



秋は、凝視の季節、專念の季節、そして、自己の存在を味はふべき季節である。秋の本當の氣魄に觸るゝ時、誤つた存在様式——生活——は、一たまりもなくへし折られてしまふであらう。その代りに正しい存在様式——生活——は、益、力強く健かに根を張るであらう。春から夏へかけていろいろな雑草に生ひ茂られた我々の生は、秋の氣魄に逢つて、たゞ根幹のみがまざくゝと露出されて、清淨な鏡に照らし出されるのである。秋に自己を凝視して、しみくゝとした歡喜を味はひ得る者こそ、幸なる哉である。

秋には、狭苦しい書齋からもしくは蒸し暑い工場から、戸外の大氣中に出て、野や山に遊ぶがよい。遊んでそして、地面の上に寝そべるがよい。大空の下、大地の上に、ぼつりと投げ出された孤獨な自己をあくまでも見守り、そして味はふがよい。——然しながら、その時眞に秋を讚美し得る者が、果して幾人あるであらうか。「中央公論」

笹川種郎  
文章家、文學  
博士。號臨風。  
明治三年東京  
市生。

廣重

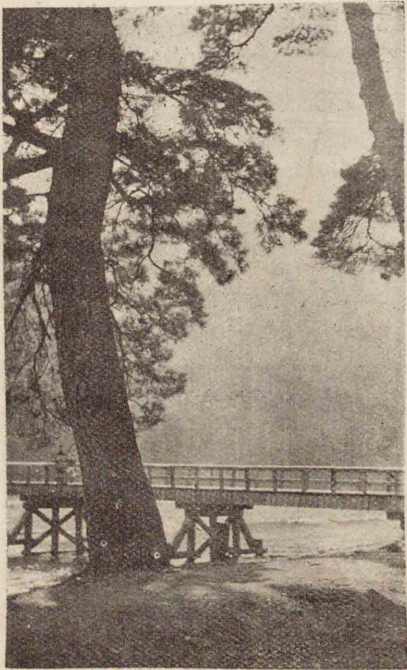
浮世繪の名家。  
安藤氏。安政  
五年歿、年六  
十二。

見た京物語  
寛永頃の京の  
風俗を記し、  
江戸のそれと  
比較したもの。  
二鍾亭半山著。

## 二八 雨の都

んせいの都

廣重は嵐山の花を畫き、大原の春を畫いてゐるが、しかし京都の春雨は畫かなかつた。京都獨特の雲煙は畫かなかつた。縦にしとしと降る雨は描かなかつた。見た京物語にすら「風少し、雨眞直ぐに降る」とあるが如く、眞直ぐに降る雨は、京の特色である。同じ書に「時雨のけしきは江戸に勝れり、月と時雨忽に變る、山近ければなり」とある通り、時雨は京の名物である。しかし廣重は之を畫圖の中に收めずに、却つて江戸一流の夕立

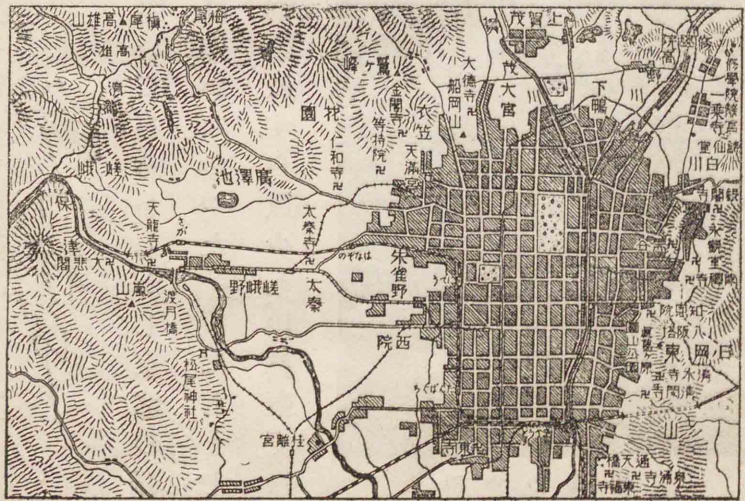


山嵐の中雨



を書いた。廣重は動よりも寧ろ静を寫す畫家であり、繁華火の如き人間境よりも、寧ろ閑寂な自然界を描く畫家であつたから、京の春雨を描き雲煙を描くには、最も適してゐたのである。嵐光煙色は彼の得意であつた。京都名所にも其の十枚の内に、是等の自然現象を配する名所を描寫させたかつたと思ふ。

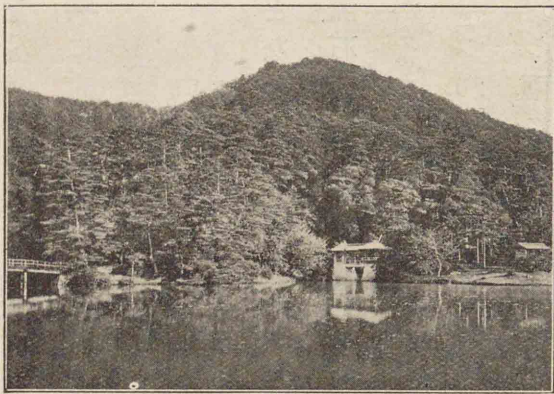
波月橋のほとりに佇んで、雨の嵐山を觀る。四條派の妙を發揮して、殆ど餘蘊がない。峰巒は明又滅、水は煙を立てて流れる。其の間を縫ふ筏には、蓑と笠とが淋しく見える。



山嵐の氣がしんみりと深い。嵐山の雨景は土佐派のものでなく、雪舟派のものでなく、狩野派のもでも、南畫のものでもなく、やはり四

條派のものである。軟い、感じのよい所は、吳春・景文以後のものである。

時雨は眞葛ヶ原に名高いが、洛中・洛外に到る處時雨の景ならざるはない。或時は大根洗ふ鴨川端に降り、或時は大原を出る黒木賣に降り、修學院のお庭に降り、銀閣寺の東求堂に降り、大徳寺に利休の墓を音づれ、小倉山莊に時雨亭を音づれる。町行く人の足もそらざまに、朱雀野



修學院離宮

通ひの車の音も途切れ／＼である。おう寒やのと、搔き合す袖も冷く、茶室の風爐に沸る湯の音が、折からの風情を添へる。

吳春・景文  
共に松村氏の  
吳春は四條派  
の祖。天保十  
四年歿、年六  
十五。景文は  
其の弟。文化  
八年歿、年六  
十。

眞葛ヶ原  
京都圓山公園  
附近の舊稱。  
大徳寺  
臨濟宗大徳寺  
派の大本山。  
愛宕郡紫野に  
在る。

利休  
千家流茶道の  
祖千宗易、利  
休はその號。  
泉州堺の人。  
天正十九年歿、  
年七十一。



小倉山莊  
嵐山と相對する小倉山にある藤原定家の山莊の跡。

八坂  
八坂神社、一に祇園社のある處。

清水  
清水寺。

黒谷  
黒谷光明寺。

東寺  
京都九條に在る眞言宗の本山。

日本は雨の多い國である。四季を通じて晴天よりも雨天を多しとする。梅雨季は云ふに及ばず、軒の玉水、糸よりも細き春雨、馬の背を分けるてふ夕立、變り易い秋の雨。特に京は水蒸氣の都。霞となり靄となり、煙雨墨を潑して、八坂、清水、黒谷、東寺の古塔、其の間に隠見し、紛々たる雪となつては、圓山の雪見酒と洒落れる。流石は京は風流の都であるが、水蒸氣がその風流を助けること少くはない。「つれづれ」と降り暮して、蕭やかなる宵の雨に、殿上にもをさく、人少に、御とのる所もれいよりは長閑なる心ちするに」とある源氏帚木の氣分は、如何にも雨夜の物語にふさはしい。建禮門院が東山の麓吉田の



八坂の塔

建禮門院  
高倉天皇の皇后、安徳天皇の御母、平清盛の女。平氏西海に滅亡の後京都に遷啓御年五十七で崩。

里の御佗住居は、平家物語に「壁に背ける殘の燈の影かすかに、夜もすがら窓打つ暗き雨の音ぞ淋しかりける。」とある如く、榮華の舊夢をも結ばせ給はて、五月の短夜を明しかねさせ給うたのであつた。芙蓉の麗質、未央の柳眉、しかも一天萬乗の君の御生母にてましましたながら、あまねく人生の悲痛哀苦を嘗めさせられたのである。嘗ては雨の日を管絃の御宴に打興じ、雨の夜を詩歌の御道に短しとかこち給うたのであつたが、今降る雨は、もと降れる雨とは異なつてゐたのである。

春めきて  
元祿時代の大阪の光景。  
白雄  
號は春秋庵。信濃の人。寛政三年歿。  
北溟  
俳人。各務支考の門人。

「春めきて人の心も見えわたる淀屋橋を越えて、中の島の景色、雲靜かにして風絶え、福島川の蛙聲ゆたかに、雨は傘のしめりもやらぬ程ふりて〔西鶴一代女〕とあるは、淡雲微雨の光景畫の如くであるが、しとしと降る春雨も、江戸になると陽氣で賑かた、白雄の「春雨の心ながくもふる日哉」や、北溟の「春雨や四條五條の塗木履」のしつとりと悠長



なのよりは、寧ろ大江丸の「春の雨芝居の櫻咲きにけり」の趣が似つかはしい。

時雨情緒は固より江戸の風物ではない。「釣柿の夕日ぞかはる北

時雨」と言ひ、幾人か時雨かけぬく瀬田の橋

と言ひ、日の岡や京へふり込む夕時雨と云

ひ、何れも京洛附近の景色である。春雨は

御陽氣なうちに静かであり、時雨は慌だしい

うちに淋しい。いづれも閑寂な京の都に

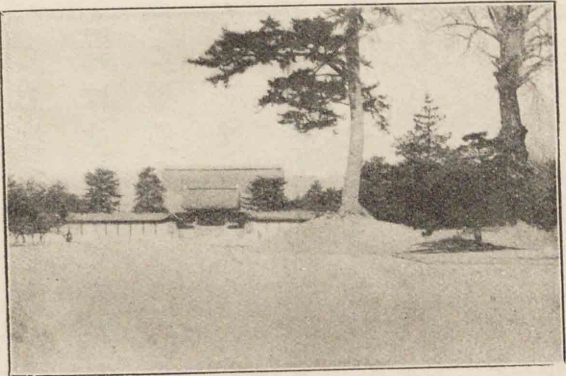
苑相應しい自然現象である。その中に住む

人がしつとりとして静かに、其の裡に生じ

た文學藝術が華やかでありながら、落着の

あるのは當然である。東寺の塔に時雨が

降つて、銀杏の葉がはら／＼と飜れるのを見た時には、淡い哀愁が感



大江丸 大伴氏。大阪の人。文化二年歿。  
幾人か 内藤丈草の句。  
日の岡 京都市の東南隅に當る郊外の地。

御苑 京都御所内の御苑。

巢林子

近松門左衛門の號。

京傳

戯作者。本名岩瀬醒。文化十三年歿、年五十六。

馬琴

小説家、雜學者。本名瀧澤解。嘉永元年歿、年八十二。

其角

榎本又實并氏。江戸の俳人。寶永四年歿。

じられる。亡び行く平家の末路を見るがやうに、しつとりとして淋

しいうちに美しさを覚えざるを得ない。春雨が御苑の芝生に音も

なくしと／＼と降るのを見ると、倭繪を繰

り展げたやうな、静かな美しい句がしんみ

りと深い。一篇の源語は、正に此の春雨の

情緒である。巢林子及び西鶴の文學とは

全然異なつてゐる。まして京傳馬琴とは

生れも育ちも違ふ。

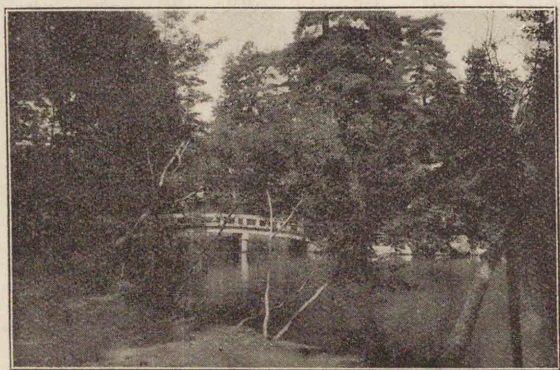
春雨は歌趣味であり、夕立には俳趣味が

横溢する。時雨には歌趣味もあり、俳趣味

もあるが、時雨の俳趣味は芭蕉の趣味で、其

角の趣味ではない。

春雨は香の趣味であり、時雨は茶の趣味である。伽羅沈香の香は



永観堂



本法寺

日蓮宗の寺、  
上京區本法寺  
前町にある。

四明ヶ嶽

比叡山中の最  
高峯。

本阿彌光悅

諸種の藝術に  
達した人。寛  
永十四年歿、  
年八十。

永觀堂

淨土宗の寺、  
京都東山に在  
る。

床しくも靜かに立ち迷ふ。松風の音は端然と心耳を澄まさせる。香の趣味には王朝の匂があり、茶の趣味には東山時代の響がある。美人、香を聞くは土佐繪の色彩で、雅客、茶を味はふは墨畫の趣である。



(筆光弘深中) 茶喫寺關銀

私は本法寺に三巴の庭を音づれた。四明ヶ嶽には雨雲低く徠し、大路・小路の軒には、時雨の點滴がたばしつてゐた。大きな伽藍の縁側に佇んだ時は、寒さが腸に浸み入るやうに覺えた。案内してくれた僧の素足も寒げに見えた。庭は本阿彌光悅が數奇を凝らした、謎のやうな結構である。その樹と石と砂とを潤して、時雨は降つたり止んだりしてゐた。又秋雨にそぼぬれながら、永觀堂に紅葉を觀に行つた事があつた。

相阿彌  
書畫・詩歌・香  
茶・造庭等の  
妙手。足利義  
政に愛せられ  
た。

新院

崇徳上皇。  
齋院の御所

白河殿の中に  
ある。

左府

左大臣藤原頼

長。

白河殿

もと藤原良房

の別荘。後、

白河天皇の離

宮。今の平安

神宮附近。

父子五人

忠正とその子

長盛・忠綱・正

綱・通正。

傘さしながら、立寄る人もない池のほとりて、飽くまでも色づいた秋色を又なく面白いと見た。其の歸るさには銀閣寺に立寄つて、一椀の苦茗に相阿彌の作つた庭を心ゆくまで眺めた。洛中・洛外は私の最も好む所の境である。雨に逢ふ毎に、雨の都の美觀を心ゆくまで眺める。雨は陰氣で鬱陶しいが、閑寂を味はふには又なく善い。雨の都に於て一層此の感を深くする。殊に春雨に於て、時雨に於て。「現代隨筆大觀」

### 二九 新院御所軍評定

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東、春日の末に在りければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平右馬助忠正承つて、父子五人、並に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固め



賴憲  
源氏。  
父子六人  
爲義と其の子  
頼賢・頼仲・爲  
宗・爲成・爲仲。

家弘  
平氏。

馬手  
（右）

たり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて多分は内裏へ参りけり。  
茲に鎮西八郎爲朝は、われは親にも連れまじ、兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬ様に、唯一人いかにも強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり」とぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衛門大夫家弘承つて、子共具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。抑爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下にゆるされし故なり。件の男、器量人に越え、心飽くまで剛にして、大方の強弓矢つぎ早の手利なり。弓手の肘馬手に四寸延びて、矢束を引くと世に越えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなんとて、父不孝して、

香椎宮  
官幣大社。福岡市の東一里。仲哀天皇・神功皇后を奉祀する。  
久壽元年  
近衛天皇の御時。  
公能  
藤原氏。  
宰府  
太宰府。筑前國にあつた。

十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠を傳とし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に三郎忠國が婿になつて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従へんとしければ、菊池原田を始として、所々に城を構へてたて籠れば、その儀ならば、いで落して見せん。」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をする事二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ手だて人に勝れて、三年が内に九國を皆攻め落して、みづから總追捕使におし成つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。  
源爲朝久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早く令禁進其身。依宣旨執達如件。



然れども爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば、われこそいかなる罪科にも行はれんずれ。とて、急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき由申しけれども、大勢にて罷り上らんこと、上聞穩便ならず。とて、形かたちの如くにつき従ふ兵ばかり召し具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を赦して、今度の大事に召し具しけるなり。

八龍  
源氏重代の鎧。

樊噲  
漢の高祖の臣。勇猛の名ある人。

爲朝は七尺許なる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍と云ふ鎧を似せて白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鉤打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも

張良  
漢の高祖の臣。智謀のすぐれた人。

吳子  
周代の兵法家。名は起。

孫子  
周代の兵法家。名は武。

養由  
楚の弓の名手。名は基。

劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて、舉り給ふ。

左府すなはち、合戦の趣計らひ申せ。と宣ひければ、かしこまつて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども従へ候ふについで、大小の合戦數を知らず。中にも折角の合戦二十餘箇度なり。我は敵にかこまれて強陣を破り、或は城を攻めて敵をほろぼすにも、みな利を得ること、夜討に如く





高松殿  
後白河天皇の  
皇居。

こと侍らず。然ればたゞ今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方に  
て支へ候はん、に火を遁れん者は矢を免るべからず。矢を恐れん者  
は火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。たゞし兄に  
て候ふ義朝などこそ駈け出でんずらめ。それも真中さして射通し  
候ひなん。まして清盛などがへろく、矢何程の事か候ふべき、鎧の  
袖にてはらひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを  
蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨て  
て逃げ去り候はんずらん。その時爲朝参り向ひ、行幸を此の御所へ  
成し奉り、君を御位に即けまゐらせんこと掌を反すごとくに候ふべ  
し。主上を迎へまゐらせんこと、爲朝の矢二つ三つ放さんずるばか  
りにて、いまだ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候ふべ  
き。と憚る所もなく申したりければ、左府、爲朝が申す様以ての外の  
荒儀なり。歳あらまじの若あやきが致す所か。夜討などいふこと、汝等が同土軍、

興福寺  
南都七大寺の  
一。法相宗の  
本山。  
十津川  
大和國吉野郡  
の内、熊野川  
上流地方の十  
津川郷。  
富家殿  
頼長の父忠實。

十騎二十騎の私事なり。さすが主上上皇の御國争に、源平數をつく  
して、兩方に在つて勝負を決せんに、無下に然るべからず。その上南  
都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實、玄實等、吉野、十津川の  
指矢三町、遠矢八町といふ者共を召し具して、千餘騎にて参るが、今夜  
は宇治に着き、富家殿の見参に入り、曉これへ参るべし。彼等を待ち  
調へて合戦をば致すべし。又、明日院司の公卿殿上人を催さんに、参  
らざる者共をば死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ば、  
残はなどか参らざるべき。と仰せられければ、爲朝上には承伏申し  
て御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似  
も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあ  
らぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたるものなれ  
ば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候ふらん。明日までも延べばこそ、吉  
野法師も奈良大衆も入るべけれ、只今押寄せて、風上に火をかけたら



保元物語  
作者未詳。保元  
の戦の顛末  
を記した軍記  
物語。鎌倉初  
期の作。

### 三〇 光頼卿参内

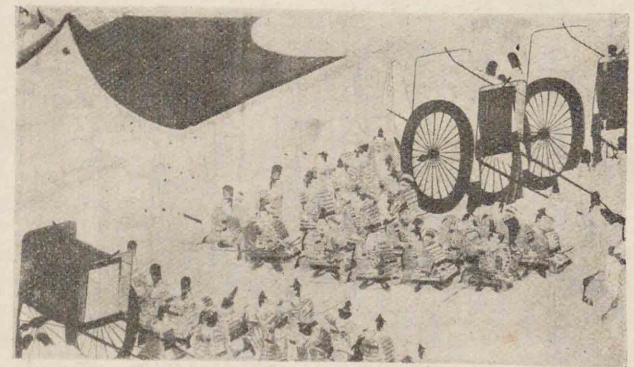
十九日  
二條天皇平治  
元年十二月。  
光頼  
藤原頼頼の子  
桂大納言とい  
ふ。承安二年  
薨。  
信頼  
藤原忠隆の子。  
光頼の甥。平  
治元年亂を謀  
り、六條磔で  
斬られた。

さる程に内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不参にておはしましけるが、参内して承らんとて、ことに鮮かに東帯ひき繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩きたまひ、めの子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらは人手に、くな、汝が手にかけて光頼が首をは急ぎ取れ。」とて御身近く置き、其の外、清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて處々門々を固め守護しけるを事もせず、さき高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通したてまつる。

藤原頼頼  
信方  
信俊

長方  
藤原頼長の子。  
光頼の従兄弟。  
建久二年薨。

長方  
藤原頼長の子。  
光頼の従兄弟。  
建久二年薨。



六波羅行幸の圖

紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見たまへば、信頼卿一座して、その座の上、藤たちみな下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかに

振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづと歩み、信頼卿の上にむずと着きたまふ。

なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上  
に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あな



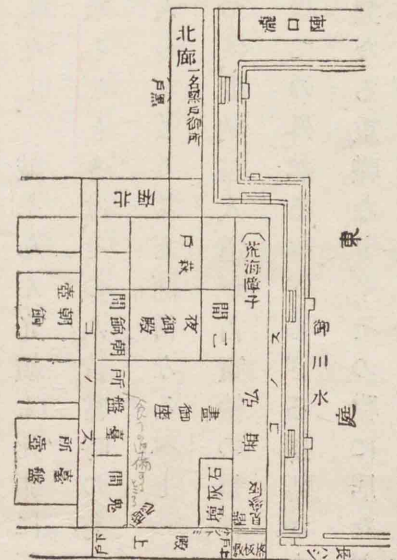
朝延の門を以て  
大衛府の衛門  
大衛府の衛門

さましと見たまふに、光頼卿下襲の尻引き直し、衣紋繕ひ、笏取り直し、  
 氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者  
 をば死罪に行はるべし  
 とやらん承りて參内す  
 るところなり。抑何事  
 の御諛ぞ。」と問ひけれ  
 ども、信頼卿物も宣はず、  
 着座の公卿も一言の返  
 答なかりければ、まして  
 僉議の沙汰もなし。程  
 經て光頼卿つい立ちて、惡しう參つて候ひけり。」とて、しづくと歩  
 み出でられけり。  
 庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛



圖 帶 束

頼光・頼信  
 頼光は源満仲  
 の長子。治安  
 元年卒。頼信  
 はその弟、永  
 承三年卒。共  
 に馳勇の名が  
 あつた。



の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕したまひつれども、右衛  
 門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出だしたる  
 ことよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あは  
 れ、この人を大將として合戦せ  
 ば、いかばかりか頼もしからん。」  
 と申せば、傍なる者の「昔頼光頼  
 信とて源氏の名將おはしまし  
 き、その頼光を打返して光頼と  
 名のり給へば、これも剛にまし  
 ますぞかし。」といへば、又傍より、などその頼信を打返して信頼と附  
 き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば「壁  
 に耳、天に口。」といふことあり、恐ろしく。聞かじ。」といひながら、  
 皆忍び笑ひに笑ひけり。







王道  
内侍所  
一本御書所  
内裏の東門建  
春門の内にあ  
つた。

温明殿  
紫宸殿の東。  
朝餉  
天子の御膳を  
開し召す所。  
楯形  
畫の御座と鬼  
の間との間に  
ある楯の形の  
穴。

珍事、王道の滅亡の時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはすところを聞ゆれ。相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはし、ますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黒戸の御所に。」上皇は。「一本御書所に。」内侍所は。「温明殿に。」劍璽はいづこに。「夜の大殿に。」と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又、朝餉の方に人音のし、楯形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞ影ろひ候ふらん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ばかりござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に墜ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は王法をいかゞ守り給ひぬるぞ、異國にはかやうの例ありと雖も、わが朝にて未だかくの如き先蹤を

許由  
支那上古の高  
士。堯が天下  
を禪らうと云  
ふのを聞いて、  
汚れた事だと  
いつて耳を洗  
つた。川の水で  
洗つた。

平治物語  
平治の亂の中  
心とした軍記  
物語。保元物  
語と同一作者  
の手に成つた  
もの。

聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろくしげに憚る所なく、どき給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、われいかなる宿業によつてかゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出でたまひける。「平治物語」

三一 歳晚の名家

横山健堂

「梟よのほゝんどころか年の暮。」梟を見付けたのはいかに一茶らしいが、さすがの一茶にも、年末の切迫さが想はれる。そこになる

と蕪村は鶯だ。「鶯の啼くや師走の羅生門。」は美しい。芭蕉は、どこ



芭蕉 俳聖。通稱松尾宗房。伊賀の人。元祿七年歿、年五十二。

上田秋成 國學者、歌人。大阪の人。文化六年歿、年七十八。

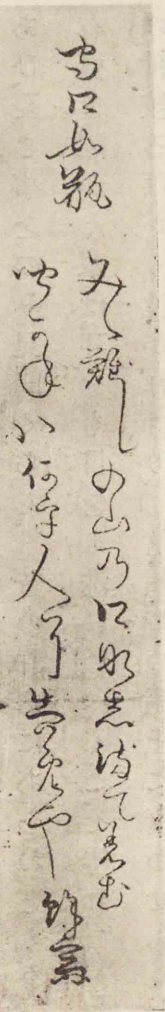
守レ口如シ瓶 みのなしの山の口なし待て着む聞かれば何人人に告げめや 餘齋

蜀山人 江戸の狂歌師。太田南畝。文政六年歿、年七十五。

までも解脱だ。「人に家を買はせてわれは年忘」「せつかれて年忘する機嫌かな。」或は「盗人に逢うた夜もあり年の暮」「分別の底叩きけり年のくれ。」等の句を誦すれば、年頭も年末もない。剛愎な上田秋成は、白眼を以て一世を睨んでゐる。田舎に行つてゐた年の暮、

世の中にさはらで年もくれにけり

八重葎さへかれし垣根は



蹟筆成秋田上

その寒生涯が想ひやられる。それと反對に、平々然として、極めて樂觀的の氣分を見せてゐるのは蜀山人だ。彼の年末の歌の中には、一つも陰氣な窮屈な心持はない、いつも春風だ。世を茶化してゐる。

いまさらに何か惜しまん神武より

二千年來くれて行く年

年波のいまや越えんと門々に

たてし師走の末の松山

中江藤樹が、熊澤蕃山の岡山に出仕するの

を送つたのは年の暮だ。



山蜀田太

中江藤樹 近江の儒者。慶安元年歿、年四十一。

熊澤蕃山 京都の儒者。字は了介。元祿四年歿、年七十三。

山陽 學者、詩人。賴氏。安藝の人。天保三年歿、年五十三。

# 致良知

蹟筆樹藤江中

舊年無幾日 何意上旗亭 送汝青雲器  
愧吾犬馬齡 梅花鬢邊白 楊柳眼中青  
惆悵滄江上 西風教客醒

此の雄偉な師弟の相別れる心持が、歳晚氣分の中に溶けてゐる。歳晚の作として千古の名篇堂々たる近江聖人の面影が偲ばれる。

山陽の詩集に歳晚の作が多い。その特色は、彼が



家庭に執着してゐる心持だ。故郷を出た翌年の暮には、「出郷關歲再除、慈親消息定如何。」といひ、五年目の除夜には、故郷の兩親が、吾が子の事を話し合つて眠らないでゐるだらうと想ひやりを述べてゐる。九州の遠遊を試みたときは、下



頼山陽

關で年を送つた。赤間關守歲詞がある。誰でも三十九、四十の歳晩は殊に感觸が深い。山陽にも「平頭四十驚吾老」の一句がある。漢學者は四十以上を翁と云つたから、今人に比べると感慨は格別だ。

晩年に近づいてからの山陽の除夜の作には、おひく世帯の好くなつて來てゐるのが分る。「妻償舊債了、兒著新衣成。貧家祭酒掃燈火亦覺明。」といふのは、貧家と言ひつ

つも始めて工面の好い年末を味はつたのだ。その次は益好い。

細君拮据鬢蓬麻

婢辨辛盤僕掃家

獨有主翁無一事

出從村路覓梅花

東湖  
水戸藩儒。藤田氏名は彪。安政二年歿、年五十。



大槻磐水

東湖は政治家で、交際には力めた。そして清貧であつた。夏物と冬物とを質に入れ替する手紙が傳はつてゐるくらゐだから、彼の歳晩は思ひやられる。然るに嘉永五年の暮、彼四十七歳、俸祿が復舊される内報に接した時の手紙のうち、例の東湖、更にそれを承知しなかつたとあるのを見ても、その度胸の程は推し測られるではないか。

蘭學者の大槻磐水は、六十二歳の年の暮に歌がある。  
槻弓のはるは六十路に三そへて

大槻磐水  
仙臺藩醫、名は玄澤。文政十年歿、年七十一。



伊能忠敬  
曆學者。下總  
の人。文化十  
四年歿、年七  
十四。

必有我師  
嘉永甲寅夏五  
書以祝。反射  
爐成功  
藤田彪

間宮倫宗

地學者。又林  
藏と云ふ。常  
陸の人。弘化  
二年歿、年六  
十五。

物徂徠

柳澤侯儒。通  
稱徳右衛門、  
字は茂卿。江  
戸の人。享保  
十三年歿、年  
六十三。

吉田松陰

幕末の志士。  
名は矩方、通  
稱寅次郎。萩  
藩士。安政六  
年歿、年三十。  
黄門  
水戸藩主徳川  
光圀。元禄十  
三年歿、年七  
十三。

射るがごとくに過ぎし年の矢

洒落の歌だ。此の人が始めて和蘭正月、即ち太陽暦  
の新年宴會を催したことは有名な話だ。

伊能忠敬の生涯は、努力の結晶だ。老いて益、精神  
旺盛だ。五十以後に、測量の大偉業を始めたので、新  
年も年末もなかつた。文化八年、六十八歳のときに、  
大旅行をした。東海道藤澤から測量を始めて、十二  
月の十七日に興津までをすませ、それから無測量で  
西進し、續いて薩摩まで行つた。彼と共鳴した間宮  
倫宗は、此の頃蝦夷地探検を思ひ立ち、年末に二人は  
東西に分れて大旅行の首途に上つた。彼等が惜時  
の精神は、物徂徠が、年末も年頭も、蓬頭で一心に机に  
向つてゐたといふのと同じ類だ。

必有我師  
嘉永甲寅夏五  
書以祝反射  
藤田彪

藤田東湖筆蹟

吉田松陰は二十三歳の十二月に、脱藩して江戸を出發し、東北遊の  
旅行を試みた。先づ水戸學を研究のため水戸に行き、その二十九日、  
瑞龍山に登つて黄門の墓に謁し、太田で年を送つたのを手始として、  
年々、戦争のやうな歳晩を送つてゐる。二十五歳の春、下田で米艦に  
投ずるの壯舉が破れて、その年の暮は萩に送り還され、野山獄で除夜  
を過した。年の暮に、獄中で幽囚録を書き、除夜の詩に、「壯士休爲歳暮  
哀」の句を成した。その二十六歳の除夜は家に歸つてゐた。松下  
村塾を創める前年だ。此の夜、記、往時、この一篇を作つて、下田投艦の時  
の回憶を書いた。二十九歳、即ち彼が最後の歳晩だ。再び野山獄に  
投ぜられて、生死未だ測るべからざるの時、除夜の句に、  
燈火の影靜かなり年の暮  
燎原の火のやうな情熱ある此の人にして、此の靜かなる句がある。  
哲人の面影が見られる。



新島襄  
宗敎家、教育家。明治二十三年歿、年四十八。

新島襄が初めて米國から歸朝して、郷里の上州安中に歸省したのは、明治七年十一月の末である。それから歳晩の二十日餘を父母の膝下に送り、此の間に、初めて傳道を試み、更に同志社を大阪に開設するの目的を以て年末に上方へ往つた。同志社の創業は、かくの如く年末に出發してゐる。

三二 江戸時代の俳句 (下)

(一)

山や故郷にしき着てゆく入日影

貞 徳

これはくとばかり花の吉野山

貞 室

まぎくと在すがごとし魂まつり

季 吟



松永貞徳

貞徳  
松永氏。京都の人。承應二年歿。  
貞室  
安原氏。貞徳の高弟。寛文十一年歿。  
季吟  
國學者、歌人。北村氏。近江の人。寶永二年歿。

宗因  
檀林風の俳人。西山氏。肥後の人。天和二年大阪に歿。

神樂  
明らげき日の本遠し神々樂  
宗因

西鶴  
浮世草子の作者。井原氏。元祿六年歿。

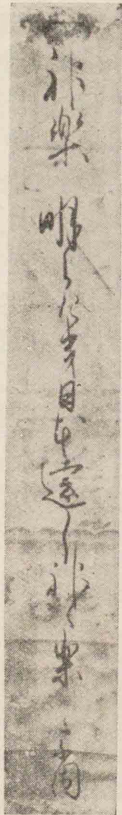
西鶴  
雲のみれや山見ぬ國の拾ひ物

鬼貫  
上島氏。伊丹の人。元文三年歿。

鬼貫  
おしぬぐひおしぬぐひゆく月の雲

松に藤蝟木にのぼるけしきあり  
世の中や蝶々とまれかくもあれ

宗 因



宗因筆蹟

白露や無分別なるおきどころ  
長持に春かくれゆく衣がへ

西 鶴



西鶴筆蹟

鯛は花は見ぬ里もあり今日の月  
によつぼりと秋の空なる富士の山

鬼 貫



鬼貫筆蹟



言水

池西氏。奈良  
の人。享保四  
年歿。

木枯の果はありけり海の音

言 水

芭蕉

松尾氏。伊賀  
の人。元祿七  
年歿。

四方より花吹き入れて鳩の海

芭 蕉

草臥れて宿かる頃や藤の花

ほろくくと山吹散るや瀧の音

ふる池や蛙飛  
びこむ水の音  
はせむ

ふる池や蛙飛びこむ水の音はせむ

しづかさや岩にしみ入る蟬の聲

初時雨猿も小蓑をほしげなり

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

猪も共に吹かるゝ野分かな

目に青葉山郭公初松魚

素 堂

素堂

山口氏。甲斐  
の人。享保二  
年歿。

素堂  
ズツシリと南  
瓜落て秋さび  
し



蹟筆堂素

其角

榎本又寶井氏。  
江戸の人。寶  
永四年歿。

鶯の身を逆さまに初音かな

稻妻やきのふは東けふは西

名月や壘の上に松の影

其 角

嵐雪  
雨冷に羽織を  
夜の簑ならん  
其角



蹟筆角其

嵐雪

服部氏。淡路  
の人。寶永四  
年歿。

梅一りん一りんほどのあたゝかさ

黄菊白菊その外の名はなくもがな

十團子も小粒になりぬ秋の風

何事ぞ花見る人の長刀

湖の水まさりけりさつき雨

嵐 雪

許 六

去 來



支考  
 各務氏。美濃  
 の人。享保十  
 六年歿。  
 丈草  
 内藤氏。尾張  
 の人。元祿十  
 七年歿。  
 北枝  
 立花氏。加賀  
 の人。享保三  
 年歿。  
 凡兆  
 氏名、歿年不  
 詳。號春花園。  
 芭蕉の門人。  
 金澤の人。  
 惟然  
 廣瀬氏。美濃  
 の人。正徳元  
 年歿。

榎本其角  
 江戸の俳人、  
 芭蕉の高弟、  
 又寶井氏。寶  
 永四年歿、年  
 四十七。  
 歳尾  
 元祿十五年。

白雲や垣根をわたる百合の花  
 わが事と鱒の逃げし根芹かな  
 時鳥なくや湖水のさゝにどり  
 草の葉におくや残暑の土埃  
 下京や雪積む上の夜の雨  
 長々と川一すぢや雪の原  
 別るゝや柿食ひながら坂の上

支考  
 丈草  
 北枝  
 凡兆  
 惟然

三三 討入の光景を報ず

榎本其角

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處酒料一封、露の  
 鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。  
 御序に御家内始め御社中へもよろしく御傳へ下さる

都文公  
 土屋主税。本  
 所松坂町なる  
 吉良家の鄰家  
 に住む。

杉風  
 芭蕉の門人。  
 杉山氏、又鯉  
 屋と稱する。  
 江戸の人。

堀部彌兵衛  
 名は金丸。江  
 戸留守居。死  
 を賜はる時年  
 七十六。  
 大高源五  
 名は忠雄、號  
 子葉。俳諧を  
 善くす。死を  
 賜はる時三十  
 二。



榎本其角

べく候。然れば、去る十四日、本所都文公に於て年忘の  
 一興御催あり。嵐雪杉風我等も一席にて、折から雪面  
 白く降り出し、風情手に取るが如く、庭中の松は雪を戴  
 き、雲間の月は闇を照らし、風興今は捨て難くして夜た  
 だ更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬  
 さへ吠えず打静まり、文臺料紙も押  
 し片寄せ、四五人集りて蒲團を被ぎ、  
 夢の浮世といふ間もあらせず、劇し  
 く門を叩く者兩人玄關に案内し、我  
 等淺野家の浪人堀部彌兵衛・大高源五、今夕御鄰家吉良  
 上野介屋敷へおし寄せ、亡君年來の遺恨を果さんため、  
 大石内藏助始め四十七人、唯今吉良殿を討ち取り候ふ



吉良上野介  
高家。名は義  
央。  
大石内藏助  
淺野家老。  
名は良雄。死  
を賜はる時年  
四十五。

大石主税  
名は良金。良  
雄の子。死を  
賜はる時年十  
六。

間、御鄰家の御よしみ、武士の情、萬一御加勢も候はば、末  
代の御不覺と存じ奉り候。願はくは門戸を嚴しく御  
防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候とい  
ひも果さず立ち出づる、その風情、神妙なる事いふべく  
も非ず。今は俳友もこれまでなりとて、其角幸に爰に  
あり、生涯の名残を見んとて、門前に走り出づれば、各、吉  
良家に忍び入り候ふ程に、

わが雪と思へば、かろし笠の上  
と高々と一聲よばはり、門を閉ちて内を守り、屏越に提  
燈ともし、始終を伺ふに、その哀さ骨身に浸み、女人の叫  
童子の泣聲、風飄々と吹き誘うて、曉天に至りては本懐  
已に達したりとて、大石主税、大高源五、物穂便に謝儀を

述べたること、あつばれば、武士の譽といふべし。

大高源五

日の恩やたちまち碎く厚氷  
申し捨てたる源五が精神は、猶眼前に忘れ難し。貴公  
年來の御入魂故、具さに認め進じ申し候。早春の内か  
れこれ御差繰り御出府候はば、かの落着も承り届け、餘  
儀なく伏劍に及び申し候はば、竊に追善をも相營み申  
すべく候。先は餘日も無之、書餘貴面の時を期し候。

恐々謹言。

其角

十二月二十日

文 璘 様

月雪の中や命の捨てどころ

文璘  
秋田藩の俳人、  
梅津半左衛門。



### 三四 狂歌と川柳

#### (一) 狂歌

鯛屋貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらすくたびれもせず

四方赤良

なま酔の禮者を見れば大道を

横すぢかひに春は來にけり

鯛屋貞柳  
本名榎並善八、  
號油煙齋。享  
保二十年歿、  
年八十一。  
四方赤良  
太田南畝、又  
蜀山人。江戸  
の人。文政六  
年歿、年七十  
五。

狂歌ねほ  
げ百首  
駒とめて袖う  
ち拂ふ世話も  
なし坊主合羽  
の雪の夕ぐれ  
蜀山人



(畫重廣) 蹟筆人山蜀

一分とはあまり阿漕のうら木綿

網のやうだよもつとひけく

時鳥鳴きつるあとにあきれたる

後徳大寺のあり明の顔

大屋裏住

鶯も蛙もおなじ歌仲間

經よむもあり唯なくもあり

鹿都部眞顔

あらそはぬ風の柳の糸にこそ

かんにん袋縫ふべかりける

つむり光

時鳥自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

大屋裏住  
久須美孫兵衛。  
江戸の人。文  
化七年歿、年  
七十七。  
鹿都部眞顔  
本名北川嘉兵  
衛、號狂歌堂。  
文政十二年歿、  
年七十七。  
つむり光  
號桑揚庵。寛  
政八年歿、年  
七十。



唐衣橘洲

田安侯の臣。本名小島泰從、享和二年歿、年六十。

馬場金埒

通稱大阪屋甚兵衛、號滄洲、年歿。文化十四

宿屋飯盛

國學者。小説家。本名石川雅望。江戸の八。年歿。年七十三

赤良大人のもとのまかゝる時市谷八づきにて御社のものを見侍りて、八幡の末社に鳥居もござ居いなり町かな宿や飯盛

半井ト養

俳諧師。貞徳門人。堺の人。延寶六年歿。年七十二。

唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけり  
鳴やき茄子の秋の夕ぐれ

馬場金埒

雪ならば幾ら酒手をねだられん

花の吹雪の志賀の山かご

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動き出してはたまるものかは

半井ト養

我見ても久しくなりぬ其の羽織

貴様の袴いく世経ぬらん

栗柯亭木端

宿屋飯盛 筆蹟  
あはれは知られけり  
鳴やき茄子の秋の夕ぐれ  
雪ならば幾ら酒手をねだられん  
花の吹雪の志賀の山かご  
歌よみは下手こそよけれ天地の  
動き出してはたまるものかは  
我見ても久しくなりぬ其の羽織  
貴様の袴いく世経ぬらん

我見ても

此の歌上下の句、問答の體をなす。

栗柯亭木端

丸子氏。江戸の人。安永二年歿。

川柳

もと人名、前句附の點者柄井八右衛門の雅號。その選句を編纂した書、明和二年に吳陵軒可有が出版したのが始まり以後天保八年まで七十二年間に百六十六編まで續刊された。川柳は寛政二年江戸に歿、年七十三。

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

(二) 川柳

雷をまねて腹がげやつとさせ

居候三杯目にはそつと出し

鶏があくびをしたと聾言ひ

よいとこへ來たと背高使はれる

うらゝかさしきりに錢がほしくなり

初松魚家内残らず見たばかり

傘借りに沙汰の限の人が來る

おつかさん又越すのかと孟子いひ

泣くくもよい方を取る形見分

賣家と唐様で書く三代目



柳川井柄



戸川秋骨  
文學者、慶應  
大學教授。名  
は明三。明治  
三年熊本縣生。

### 三五 笑

戸川 秋骨

シルレル  
Schiller, ドイ  
ツの詩人、戯  
曲家。一七五  
九—一八〇五  
年。  
ウイヘルム  
テル  
Wilhelm Tell  
シルレルの戯  
曲、一八〇四  
年に成る。テ  
ルが我が兒の  
頭上の林檎を  
射落した物語  
は此の曲の一  
場景である。

自然は無心で、その感情といつては、見る人の心から、その心を自然に擬したに過ぎないのであるが、波浪が怒るとか、山岳が昂然としてゐるとかいつた類の形容は、随分よく見受ける。しかし笑の形容は甚だ少いやうに思ふ。もつとも自然の笑も決して皆無ではない。シルレルのウイヘルムテルの劈頭に、湖水が微笑するといふ意味の句が見える。湖水が微笑するといふのは有りさうなことである。また花笑ひ鳥歌ふともいふから、自然の笑といふことは可なりあるやうにも思はれる。唯その笑が微笑に止まつて、笑の一部分に過ぎないのは、是非もないことである。

處が人間にはいろ／＼な笑がある。哄笑・放笑・失笑・冷笑・苦笑・微笑・近頃ではそれでも足りないと思へて、微笑などといふ笑ひ方まで

出来て来た。これは人事の進むにつれて、笑の變化し且複雑になつた證據であらう。そして人間の感情の變化は、一番よく笑に現れるのであらうとも思はれる。これを日本の假名で行くと、ニコ／＼、ニ

ヤ／＼、ゲタ／＼、ゲラ／＼、それからカシラカラ／＼などといふ笑ひやうもある。これは甚だ難かしい笑ひ方であるが、元來天狗の笑ひ方であるから、誰もあまり見聞きした事はない。同じニヤ／＼



(筆邦雅本橋) 笑 三 溪 虎

笑ふにもその間に微妙な相違があつて、到底文字のみでは盡くされない。堪へ切れない嬉しさを裏切るニヤ／＼もあれば、他をさげす



虎溪の三笑  
支那の晋の惠遠法師、廬山に隱居して、虎溪を渡るまいと誓つたが、陸澄、陶淵明の二人が、歸るのを送つて、覺えず虎溪を渡り、初めて、三人共に大笑したといふ傳説。

拈華微笑  
釋迦靈鷲山で、無言にして、唯華を拈じた時、唯唯が其の意を悟了したといふ傳説。

膝栗毛  
十返舎一九の東海道膝栗毛等。

んで笑ふニヤ／＼もある。さらに虎溪の三笑などと來ると、どうも嬉しいのだから、悟つたのだから、人を馬鹿にしてゐるのだから、甚だ見當のつかない笑である。

お前はなぜ青山などに隠れてしまふんだと訊かれて、笑つて答へず、心自ら閑なりなどと澄ましたのは李白であつたが、とかく支那人の笑は難かしくなる。もつとも難かしい笑には拈華微笑といふのがある。かうなると笑もなか／＼樂ではない。悲劇よりも喜劇に深い人生觀、宇宙觀があるといふやうな説を耳にしてゐるが、成程さういふ處もあるなと折々感じる次第である。

西洋の文學には意味の深いをかしみを書いたものが多いやうだが、日本にはそれが割合に乏しい。膝栗毛はをかしにはをかしいが、吾々には顔を背けずにはゐられないやうな笑を以て得意としてゐる。狂言には随分微笑させるものもあれば、哄笑を誘ふものもあ

ヂッケンス  
Charles Dickens. イギリスの小説家。一八一二—一八七〇年。  
ピクウィック The Posthumous Papers of the Pickwick Club. チッケンスの傑作小説。



Charles Dickens

署自の其とスンケツザ

ツクには、その劈頭に、風に帽子を吹き飛ばされた時の心持が面白く書いてある。殊にその一節は笑なくしては讀む事が出來ない。事實風に帽子を取られた時の人の態度は、をかし

なものである。あれ位眞劍と滑稽とを併せ現した圖はあるまい。否眞劍だから滑稽をなすのではあるが。買ひたての帽子を汚されたことや、他から見られた體面や、自分の努力といつたやうな、いろいろなことが混じ合つて、當人の心には、甚だ複雑な感じが互に衝突し



てゐるのである。その結果は自分を嘲るやうな、妙な苦笑のやうな笑となつて現れる。急いで駆けつけた電車に乗り損ねた時も、大抵の人は笑つてゐる。實は笑つてゐられる場合でなく、口をしいといふ感じのあるべきところだが、人から見られて體裁が悪いといふためからか、矢張一種苦笑のやうな笑をする。事は簡単でも中々複雑な心理から出た笑である。



劇のチャチリ第二世  
(一八六一九年の俳優ソンの扮したる)

ヘンソン  
Sir Frank R.  
Benson. 英國  
近代の名優。  
沙翁の作品全  
部を演出した  
ので名高い。  
一八五八年生。

シェイクスピア  
William Shake-  
speare. イギ  
リスの大劇詩  
人。一五六四  
—一六一六年。

れない複雑な笑の例を二つ思ひ出す。一つはシェイクスピアのリチャード第二世が、敵なるボリングブロックすなはち後にランカスター家の第一の王、ヘンリー第四世となる人に追ひ詰められ、捕はれ

リチャード第  
二世  
Richard, II.  
英國アラント  
ゼネット家の  
王。無道亂行  
の爲に從弟ラ  
ンカスター家  
のボリングブ  
ロック (Bol-  
ingbroke) の  
爲に三九年  
に廢せられ、  
遂に獄せられ  
る。沙翁の作  
「リチャード  
第二世」は彼  
の傑作史劇の  
一つである。  
二部及び「ヘ  
ンリー第四世」  
と併せて四部  
作英史劇とせ  
られる。

景清  
平氏の武士悪  
七兵衛景清の  
末路を脚色し  
た謠曲。觀世  
元清作。

て、ロンドン塔へ囚はれの身となつた時、その牢獄の廻廊のやうな處で、一囚徒の足枷を嵌められてゐると、顔を見合はせて、ハ、ハツハと笑ふ一節である。昨日の帝王も今日は囚人となる運命の數奇を想はせる笑で、落つれば同じ谷川の水、君主も囚徒も無いといふ意味の笑と察しられるが、兎に角印象の深い笑であつた。或は其の時の演者の技倆に感じた結果、その笑にも感じたのかとも思ふが、いづれにしても私には忘れられない笑の一つになつてゐる。

もう一つは謠曲の景清の笑である。その景清は必ずしも笑つてゐるのではないが、心持は些か笑つてゐる。盲目乞巧人となつた景清は、日向の國に忍んでゐた。そこへその忘れがたみなる娘が尋ねて来る。景清は心強くも武士の心で、景清などといふ男は知らぬといつて、娘を逐ひかへす。が、里人の口から事實が漏れて、せん方なく親子の對面をなし、その昔平家一方の旗頭として屋島に戦ひ、敵將三



保の谷と渡り合つた鍛引しろうびきの一段を物語つて聞かせる。時世非にして、今は盲目乞巧人となつた老景清も、昔を想ひ浮かべて、なほ残る一片不屈の覇氣を見せるところ、まことに笑どころでなく、むしろ涙を催させるほどに緊張したものであるが、その中、摺んだ鍛の切れたとき、三保の谷が、汝の腕の強さよといへば、景清は汝が頸の骨こそ強ければ、笑つて左右へ退きたりと物語る、その笑こそ極めて複雑な笑で、實はそれはその時の笑でなく、昔日の笑なのであるが、その氣分が此の物語をしてゐる老衰の景清にまだ残つてゐて、それでその笑の心持が頗る複雑なものとなつてゐるのである。私には景清の一曲、殊に此の昔



能の景清 (谷口桃筆)

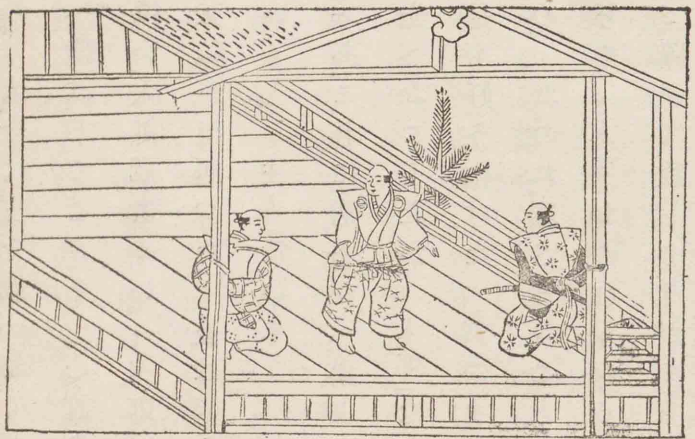
の笑の氣分が、堪らなくよく思はれて、いつまでも忘れられないのである。

### 三六 狐塚

主人「此の邊の者でござる。某、山田を數多持つてござる。當年は殊の外好う出来てござる。さりながら、此の頃は鹿猿貉が出て田を荒らします。太郎冠者を喚び出し、山田の番に遣らうと存ずる。やいやい、太郎冠者あるか。太郎「はあ、御前に居ります。主人「汝を呼び出すこと別の事でない。當年は身共の山田が殊の外好う出来た。それに付き、日頃は鹿猿が田を荒らす程に、汝は今夜山田へ行つて、鳥獸も來らば逐うて番をせい。太郎「畏まつてござる。私一人でござるか。主人「いや、後程は次郎冠者も見舞に遣らう程に、先づ行け。太郎「心得ました。主人「さりながら、此の中は狐塚の狐が出て化かすと云



ふ程に、化かされぬやうにして、番をせい。太郎「夫は怖い事でござる。最早参ります。主人「明日早々歸れ。太郎「はあ。主人「えい。太郎「はあ。道行「扱もくゝ迷惑なことを言ひ付けられた。夜晝使はるゝと云ふは氣の毒なことぢや。参る程にこれぢや。先づ是に居て、番を致さう。」主人「太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めて淋しうして居るでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。やいやい次郎冠者あるか。次郎「これに居ります。主人「汝は大儀ながら、山田へ行つて、太郎冠者がとぎをしてやれ。次郎「畏まつてござる。主人「小筒もちと持つて行け。次郎「心得ました。是はさて迷惑なれども、参らずばなるまい。主命ぢや。是非に及ばぬ。是は暗うて、何處やら知れることとて無い。呼ばはつて見よう。ほいゝゝ、太郎冠者やい。何處に居るぞ。太郎「さればこそ狐が出た。彼は次郎冠者が聲ぢや。好う似せた。汝おれ化かさるゝことでは無いぞ。先づ眉毛を



塚 狐

濡らさう。次郎「ほいゝゝ。太郎「ほいゝゝ。此處に居るわ。次郎「何處に居るぞ。太郎「此處に居るわ。やあ、次郎冠者か。次郎「なかゝ。頼うだ人が言ひつけられて、伽に來たわ。太郎「好うこそおりやつたれ。さてもくゝ、好う化けた。其の儘の次郎冠者くゝ。捕へて縛つてやらう。やい、次郎冠者、最前向うの山から大きな鹿が出たを、身共が逐うたれば、此方の山へくわらゝと逃げたわ。次郎「それは出かした。太郎「どつこへやる事では無いぞ。次郎「是は何とするぞ。太郎「何とするとは、狐め、化かさるゝ事では無いぞ。次郎「己は次郎冠者くゝ。



太郎「何の次郎冠者。汝縛つて此の柱に括つて置いて。狐殿、よい姿の。汝、今に皮を剥いてくれようぞ。」主人「太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はしてござる。心許なうござる。見に參らうと存ずる。ほい、ほい、太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほい。」太郎「是は如何な事。又狐が出居つた。彼は頼うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。ほい。」主人「ほい。」何處に居るぞ。太郎「此處に居ます。主人「やあ、これに居るか。淋しからうと思つて、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。太郎「なか。」彼處に居ます。是は如何な事。是も好う化けた。其のまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれ、騙さるゝことでは無いぞ。主人「是は何とするぞ。身共ぢや。太郎「おのれも好う化けた。先づ縛つて此の大木に括り付けて置いて、致しやうがある。狐は松葉で燻べると嫌がると云ふ。燻べてやらう。さあ、尾を出せ。鳴け。」主人「汝、太郎冠者め。」

主を此の様にして。罰當りめ。太郎「何を狐殿言はるゝ。さらば、次郎冠者狐も燻べてやらう。さあ、鳴け。」こん、と言へ。次郎「是は何とする。」太郎「ありや。」厭がるわ。汝二匹ながら、鎌を取つて來て、皮を剥いてくれうぞ。待つて居れ。よう化かさうと思つたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。主人「さても、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。次郎「左様でござる。こなたは頼うだ御方か。主人「なか。」汝も縛り居つたか。次郎「いかにも縛られました。主人「何と、鎌を取つて來る、殺さうと言ひ居つたが、何と其方が繩は解かれぬか。次郎「されば、どうやら繩が解けさうでござる。解けますぞ、解けますぞ。さあ、解きました。どれ。」此方も解きませう。さてもさても、憎い奴でござる。何としたものでござらう。主人「いや、此の態では側へ寄るまい程に、元の様にして居て、これへ來たらば、捕へて彼奴を



ゆりに上げう。次郎「一段と好うござらう。主人「さあ、これへ寄つて、元の様にして居よ。次郎「心得ました。太郎「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で打殺してくれう。さあ、今打殺すぞ。主人「そりや、次郎冠者。次郎「心得ました。主人「汝は憎い奴の。次郎冠者、足を持って。次郎「心得ました。主人「さあ、ゆりに上げ。太郎「これは、何と狐共するぞ。主人「狐とは、まだ汝めは。憎い奴の。縛り居つたがよいか。これが好いか。太郎「さては、頼うだ人。次郎冠者か。許させられ。眞平御許され、御許され。二人「何處へうせる。やるまいぞ。」「續狂言記」

吉田絃二郎

文學者。早稻田大學講師。實名源次郎。明治十九年佐賀縣生。

### 三七 從弟に與ふる書

吉田絃二郎

駿二よ。元日は伊豆は強風であつた。木も岩も吹き飛ばされさうな荒天であつた。それでも松山の中の小屋の味が忘れ

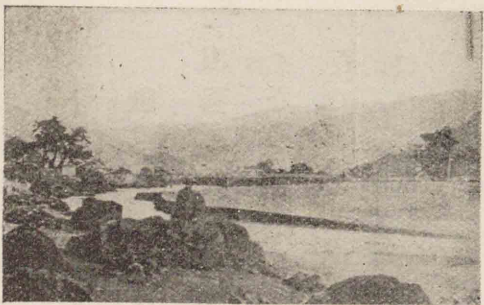
難く、午後になつて強風の中を登つて行つた。

小屋から二三丁登れば、富士も見え、箱根も見え、遠く南日本ア

ルプスの雪も見える。

今年あまは天城てんじょうの雪が深いせるか、天城の猪が小屋から五六丁離れた畑までやつて来て、作物を荒すので困るといふことである。私は一日も缺かすことなしに山に登つては、小屋の爐の傍に坐つて、冬の山を眺め、小鳥の聲を聴いてゐる。

天城山遠望



南アルプス 所謂日本アルプスを北・中央・南の三部に分つたものの一。即ち從來の赤石山脈を指す。  
天城 伊豆の中央より東に偏つた死火山。一四〇〇メートル。

か三四十里離れたばかりで、このやうな静かな生活があるといふことは、自分ながら時々不思議に思ふくらゐである。

この山にゐて、櫓を焚きながら考へてゐると、どうも東京の生



活近代の生活といふものに對する疑が、再び頭を擡げて來る。

北海道に行つて山を切り拓いてゐる友達からは、すぐ近くの澤に鶴が鳴いてゐることなどを知らせて來たが、恐らく彼は今この秋建て直したばかりの小屋の中に、アイヌの若者を對手にストーブの火を見つめながら、讀書に耽つてゐることであらう。

駿二よ。私は何時も考へることであるが、近代の都市生活が根強くなつてゆけばゆくほど、都市と村落との生活矛盾は激しくなつて行く。村落の人たちは、早晚自分たちの生活保存のためには、どうしても都市といふものと何等かの形に於て闘はなければならぬことになつて來るであらう。

私にはどうしても今日の都市生活が正しい生活であるとは考へられない。若い女たちは、正直な素直な魂といふものの尊さをば輕蔑してゐる。人間が人間であるべきことをば、むしろ

時代遅れであるかのやうに考へてゐる。若い男たちは、理想を輕蔑する。明日の詩を描くことを忘れてゐる。獨り苦しむことを考へない。人生意氣に感ずといふ男らしさを失つてゐる。正直な勤勞を蔑視してゐる。

駿二よ。お前がこの頃文學に志してゐることも、文學方面の本ばかり讀んでゐることも、姉さんから聽いた。姉さんは大分心配しておいでのやうだ。

私の口からしては、お前に文學をやれともやるなともいふことはできない。凡ては運なのだ。併し唯これだけのことは言へる。もしお前が確に日本に二人とないほどの文學的天才であるといふ自信を持つことができるなら、文學をやつたがよい。もしさうでなくて、普通の秀才ぐらゐの程度なら、文學者になることはお勧めしかねる。一通りの秀才であつたら、或は一通り



の文學者になることはできるかも知れない。併し、結局一通りの文學者たるに過ぎないのだ。それでは男子學生の事業として、ただ物足りない話である。

明治から大正、昭和にかけて、幾百千といふ文學者があつたであらう。しかも彼等が嘗て文學者であつたことが、果してどれほど日本を益し、彼自身の生活を意義あらしめたか。

駿二よ。もしお前が、今日の一通りの都會人的な生活、都會人的な刺激、都會人的な虚名といふやうなものを目あてとして文學に志すのであるならば、私は何處までもお前の志を輕蔑する。

駿二よ。私は北海道の山を切り拓いて小屋を建て、燕麥を播き、木を伐つてゐる友人を、どれほど尊敬するか知れない。

彼は雪の間をたゞ讀書と瞑想と人生についての思惟とに暮してゐるであらう。そして雪が解けると同時に、彼は處女林の

中を歩いて、熊のごとく働く。私は彼の生活を尊敬する。

駿二よ。もしお前が文學者たることを志すとしても、お前は働くことを忘れてはならぬ。お前はいつも熊のごとく働くことをしなければならぬ。お前の手の皮は、木皮のごとく堅くなければならぬ。

イヴン (Ivan)

の王國

トルストイの  
童話。

駿二よ。お前はイヴンの王國の話をしてはならぬ。そこでは、手の皮の厚い者のみが食卓に着く權利を與へられてゐる。駿二よ。私はお前が文學者たる前に、先づ眞に人間として生きる道を學ばんことをお勧めする。人間としていかに生きる

ことが最も正しきかを知らんことをお勧めする。  
駿二よ。トルストイは文學者ではなかつた。彼は陸軍士官であつた。人類について思惟する大學生であつた。人生について懊惱する貴族の子であつた。

トルストイ

Leo Tolstoy,

ロシアの思想

家、小説家。

一八二八—

九一〇年。



ドストイエフ  
スキー

Dostoevsky,  
ロシアの心理  
小説家。その  
作罪と罰・カ  
ラマゾフ兄弟  
等が名高い。  
一八八一年。

チエーホフ

Anton Tchek-  
hov, ロシアの  
小説家、且劇  
作家。一八六  
〇—一九〇四  
年。

イブセン

Henrik Ibsen,  
ノルウェーの  
劇詩人、その  
社会劇を以て  
近代に著る。  
一八二八—一  
九〇六年。

ストリンドベ  
ルグ

August Strind-  
berg, スウェ  
ーデンの小説  
家、且劇作家。  
一八四九—一  
九一二年。

駿二よ。お前はトルストイを讀まなければならぬ。ドスト  
イエフスキーを、チエーホフを。

お前はイブセンを、ストリンドベルグを。



イトスルト

人々はいふであらう。  
イブセンは舊時代の作  
家である。文學の形  
式からいつて恐らくさ  
うであるかも知れない。  
併し、形式や表現や問題  
の取扱ひ方は、末の末で

ある。

お前は、人生に對するトルストイの氣魄を學ばなければならぬ。  
イブセンの正直さ、率直さ、勇氣を學ばなければならぬ。

白樂天

唐代の詩人。  
名は居易。

良寛

歌僧。俗名山  
の本榮藏。越後  
の年、天保二十  
四年歿。年七十

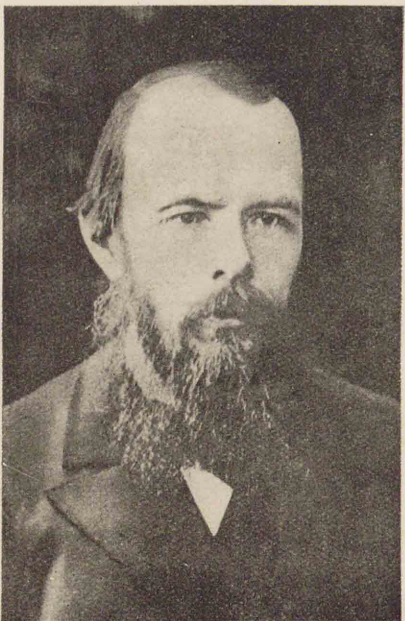
一茶

俳人。小林  
太人。信濃の  
人。文政十五年  
歿。年六十五。

實朝

征夷大將軍、  
右大臣。歌人。  
源氏頼朝の  
第二子。承久  
元年歿。年久  
十八。その家  
集を金槐和歌  
集といふ。

駿二よ。お前は白樂天の詩を讀まなければならぬ。詩の形  
ではない。白樂天の詩人らしき魂に打たれなければならぬ。  
彼の仙骨に觸れなければならぬ。



一キスフエイトスド

駿二よ。お前は、最も  
愚かなる、最も無技巧な  
る文學者の魂の偉大さ  
を發見しなければなら  
ぬ。良寛の歌、一茶の句、  
更に遡つて實朝の歌、萬  
葉の歌人たちのそれを。

駿二よ。お前は一篇の小説、一篇の詩を作らないでもいゝ。  
お前は無韻の詩、無形の文學の更に深く人生の底、人情の底に動  
きつゝ、生きつゝ、流れつゝあることを知らなければならぬ。



駿二よ。お前は小さな文學者を志してはならない。若し文學者たらんことを志すならば、先づトルストイたれ、イブセンたれである。



駿二よ。お前は先づ何よりも詩人でなければならぬ。お前は先づ何よりも哲人でなければならぬ。お前は先づ働くことを愛する人間でなければならぬ。

駿二よ。お前は先づ燃ゆるごとき宗教の人でなければならぬ。青年の炎を胸に感じなければならぬ。獨歩や啄木の生命は、その炎のごとき感激である。炎のごとき血であり、炎のごとき涙である。

獨歩 自然派の小説家。國木田哲夫。千葉縣の哲人。明治三十八年歿。年三十八。  
啄木 生命派の歌人。岩手縣の一人。明治二十五年歿。年二十七。

十國 伊豆熱海町の西北に聳えてゐる日金山のこと。山頂から附近十箇國の眺を縦にし得るところから十國峠と稱せられる。

駿二よ。もしお前の胸に詩が湧いて來たら、天に向つて歌ふがい。敢へて屑々たる都會人に聽かせる必要はない。  
駿二よ。もしお前が詩人たらんことを欲するならば、天に向つて歌ふことを恥ぢない程の歌を歌はなければならぬ。  
天には星が瞬いてゐる。かの星こそ嘗て萬葉の歌人たちの歌を聽き、實朝の歌を聽いたのだ。  
駿二よ。私はけふも伊豆の芝山を歩みつゝ、富士を眺め、函嶺十國の草山を眺めてゐる。  
玉くしげ箱根の海はけけれあれや、二くに掛けて何かたゆたふ  
わたくしは實朝の歌を思ひ出す。二子の山がたゆたふかぎり、實朝の歌は日本人の魂に喰ひ入るであらう。  
駿二よ。嘗て實朝が函嶺の天空に向つて潜かに歌つた歌の



偉大さを忘れてはならぬ。

元日から草山を歩いたが、さすがにもう春だ。こちらでは梅がちら／＼綻びはじめた。鶯はさかんに笛鳴をしてゐる。

いつも聴く啄木鳥は、未だ一度も聴かぬ。赤松の間を歩いては耳を傾けてゐるが。

では駿二よ、姉さんによろしく。

### 三八 氷上遊戯

高村光太郎

さあ行かう、あの七里四方の氷の上へ。

叩けばきいんと音のする

あの硝子張の空気を破つて、

隼よりも細く研ひいた此の身を投げて、

飛ばう、

氷上遊戯

一路藝術へ勇

猛精進せんと

する作者の理

想をスケッチ

しめた詩。

高村光太郎

彫塑家、詩人。

明治十六年東

京市生。

すべらう、

足を舉げてきり／＼と舞はう。

此の世でおれに許された、たつた一つの快速力に、

鹿かの子まだらの朝日を掴まう、

東方の碧落を平手で打たう。

眞一文字に風に乗つて、

もつともつともつともつと

突きめくつて、

見えなくならう。

見えない處で、ゆつくりと

氷上に大きな字を書かう。



實朝  
征夷大將軍、  
右大臣。歌人。

源氏。賴朝の  
第二子。承久  
元年歿、年二  
十八。その家  
集を金槐和歌  
集といふ。

### 三九 實朝の歌

春雨はいたくな降りそ旅人の

道ゆき衣濡れもこそすれ

春過ぎていくかもあらねどわが宿の

池の藤浪うつろひにけり

吹く風の涼しくもあるかおのづから

山の蟬鳴きて秋は來にけり

ものゝふの矢なみつくろふこての上に

霰たばしる那須のしの原

玉ぼこの道は遠くもあらなくに

旅とし思へばわびしかりけり

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や

一沖の小島に浪のよる見ゆ

大海の磯もとゞろに寄する波

われて碎けてさけて散るかも

大君の勅をかしこみ父母に

心はわくとも人にいはめやも



山は裂け海はあせなむ世なりとも

君に二心わがあらめやも

ひむがしの國にわがをれば朝日さす

はこやの山のかげとなりなき

四〇 鉢木

一

シテ 佐野源左衛門  
常世。  
ツレ 常世の妻。  
ワキ 僧(北條時頼)。  
信濃なる淺間の嶽に立つ煙  
遠近人の見や  
はとがめぬ。  
(在原業平)  
大井山  
信濃國北佐久

次第「行くへ定めぬ道なればく、來し方もいづくならまし。ワキ詞  
是は一所不住の沙門にて候。我此の程は信濃の國に候ひしが、餘り  
に雪深くなりて候程に、先づ此の度は鎌倉に上り、春になり修行に出  
てばやと思ひ候。道行「信濃なる淺間の嶽に立つ煙く、遠近人の袖  
寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身に無き友の里、今ぞ憂き世を離坂、墨

郡大井庄にあ  
る山。  
友の里  
同郡伴野庄。  
離坂  
同郡沓掛と輕  
井澤との間、  
うすひ川  
碓氷から出て  
上野國の烏川  
に入る。  
板鼻  
上野國高崎の  
西二里。  
佐野  
高崎の東南半  
里。  
雪は鷲毛に似  
て  
白樂天の句。  
(和漢朗詠集)  
陸奥のけふ  
陸奥國狭布の  
里。

の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけりく。  
ワキ「急ぎ候程に、是は早上野の國、佐野のわたりに着きて候。餘りの  
大雪にて候程に、此の處に宿を借り泊らばやと思ひ候。如何に、此の  
家の内へ案内申し候。ツレ「誰にて渡り候ぞ。ワキ「是は修行者にて  
候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ「易き御事にて候へども、主の御留  
守にて候程に、お宿は叶ひ候まじ。ワキ「さらば御歸まで是に待ち申  
さうずるにて候。ツレ「それはともかくもにて候。シテ「あ、降つた  
る雪かな。如何に世にある人のおもしろう候らん。それ「雪は鷲毛  
に似て飛んで散亂し、人は鶴篋を被て立つて徘徊すと云へり。され  
ば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、我は鶴篋を被て立つて徘徊  
すべき、袂も朽ちて袖狭き、細布衣ほろのころも陸奥のけふの寒さを如何にせん。  
あら、面白からずの雪の日やな。や、此の大雪に、何とて是には佇みて  
御入り候ぞ。ツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ



候程に、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候程に、是まで参りて候。シテ「さて其の修行者は何處に渡り候ぞ。ワキ」我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪に前後を忘れて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。シテ「易き程の御事にて候へども、餘りに見苦しく候程に、お宿は叶ひ候まじ。此の山ばなをあなたへ十八町程御出で候へば、山本の里と申して泊の候。日の暮れぬ先に、只一足も御急ぎ候へ。ワキ」さては、しかとお貸しあるまじいにて候か。シテ「御痛はしくは候へども、我等二人さへ住み兼ねたる體にて候程に、中々思ひも寄らず候。ワキ」あら、曲もなや。由なき人を待ち申して候。ツレ「浅間しや、我等斯様に衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめては斯様の人に値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ。然るべくはお宿を参らさせ給ひ候へ。シテ「あら、何ともなや。さやうに思し召さば、など前まへには承り候はぬぞ。いや、此の大雪

山本の里  
上野國群馬郡  
八幡村大字根  
小屋の舊名。

に未だ遠くは御出で候まじ。某追つ付き止め申さう。なうく、旅人お宿参らせうなう。餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと見し雪に道を忘れ、今降る雪に行き方を失ひ、唯一所に佇みて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。『駒とめて袖打拂ふ陰もなし、佐野のわたりの雪の夕暮。』斯様に詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。同「是は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ勞れ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。同「げに是も旅の宿く。假初ながら値遇の縁、一樹の陰の宿りも此の世ならぬ契なり。それは雨の木陰、これは雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらんく。シテ詞「なう渡り候か。修行者にお宿は参らせて候へども、何にてもあれ参らせうずる物も無く候は如何に。ツレ「折節是に粟の飯いねの候。苦しからずば参らせられ候へ。シテ「さらば其の由を伺ひ候べし。如何に申し

駒とめて  
藤原定家の歌。  
三輪が崎  
大和國磯城郡。

一樹の陰  
宿しゆく一樹下  
波なみ二河流一  
夜同宿、一日  
夫妻、皆是先  
世結縁くわん（説法  
明眼論）



廬生 唐の開元頃の  
人。邯鄲で粟  
飯の熟するを  
待つて一睡す  
る間に、榮華  
を極めた五十  
年間の夢を見  
たといふ支那  
の傳説。

候。お宿は參らせて候へども、何にてもあれ聞し召されうざる物も  
無く候。折節是に粟の飯の候。苦しからずばそと聞し召され候へ。  
ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。シテ」總じて此の粟と  
申す物は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承つて候に、今は此の粟を以  
て身命をつぎ候よ。げにや廬生が見し榮華の夢は五十年、其の邯鄲  
の假枕、一睡の夢の覺めしも、粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我も  
打ちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう、御覽ぜ  
よ、斯程まで、同「住みうかれたる古郷の、松風寒き夜もすがら、寝られ  
ねば夢も見ず、なに思ひ出のあるべき。シテ」あら笑止や。夜の更く  
るについて次第に寒くなりて候。焚火をしてあて申したくは候へ  
ども、恥づかしながらさやうの物も無く候。これなる鉢の木を伐り、  
火に焚いてあて申し候べし。ワキ「御志はさる事にて候へども、それ  
は思ひも寄らず候。シテ」某もと世にありし時は、鉢の木にすぎ數多

埋木の  
埋木の花咲く  
こともなかり  
しに身のなる  
はてぞかなし  
かりける。(頼  
政、平家物語)

窓の梅  
池凍東頭風度  
解、窓梅北面  
雪封寒。(朗詠  
集)  
見じといふ

持ちて候へども、斯様に散々の體と罷り成り、いや、木好きも無用  
と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、未だ三本持ちて候。あの雪  
持ちたる木にて候。是は梅櫻松にて、某が祕藏にて候へども、今夜の  
御もてなしに、此の木を伐り火に焚いてあて申さう。ワキ「以前も申  
す如く、御志は有難う候へども、自然又お事世に出て給はん時の御慰  
にて候間、なか、思ひも寄らぬ事にて候。シテ」いや、とても此の身  
は埋木の、花咲く世に逢はん事は、今此の身にては逢ひ難し。ツレ「只  
徒なる鉢の木を、御僧の爲に焚くならば、シテ」是ぞ誠に難行の、法の  
薪と思し召せ。ツレ「しかも此の程雪降りて、シテ」仙人に仕へし雪  
山の薪。ツレ「斯くこそあらめ。シテ」我も身を、同「捨て人のための  
鉢の木、さるとてもよしや惜しからじと、雪打拂ひて見れば面白や如  
何にせん。先づ冬木より咲き初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒き  
にも、こと木より先づ先立てば、梅をきりや初むべき。見じといふ人







や。初は包む我が宿の、さも見苦しく候へど、暫しは止まり給へや。  
 ワキ「止まる名残のまゝならば、さて幾たびかゆきの日の、ツレ「空さ  
 へ寒き此の暮に、ワキ「いづくに宿をかりごろも、シテ「けふばかり  
 止まり給へや。ワキ「名残は宿に止まれども、暇申して、ツレ「御出で  
 か。ワキ「さらばよ、常世。ツレ「又お入り。同「自然鎌倉に御上りあら  
 ば御尋ねあれ。けうがる法師なり。かひくくしくはなけれども、披  
 露の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなと、言ひ捨てて出て船  
 の、ともに名残や惜しむらん、く。

二

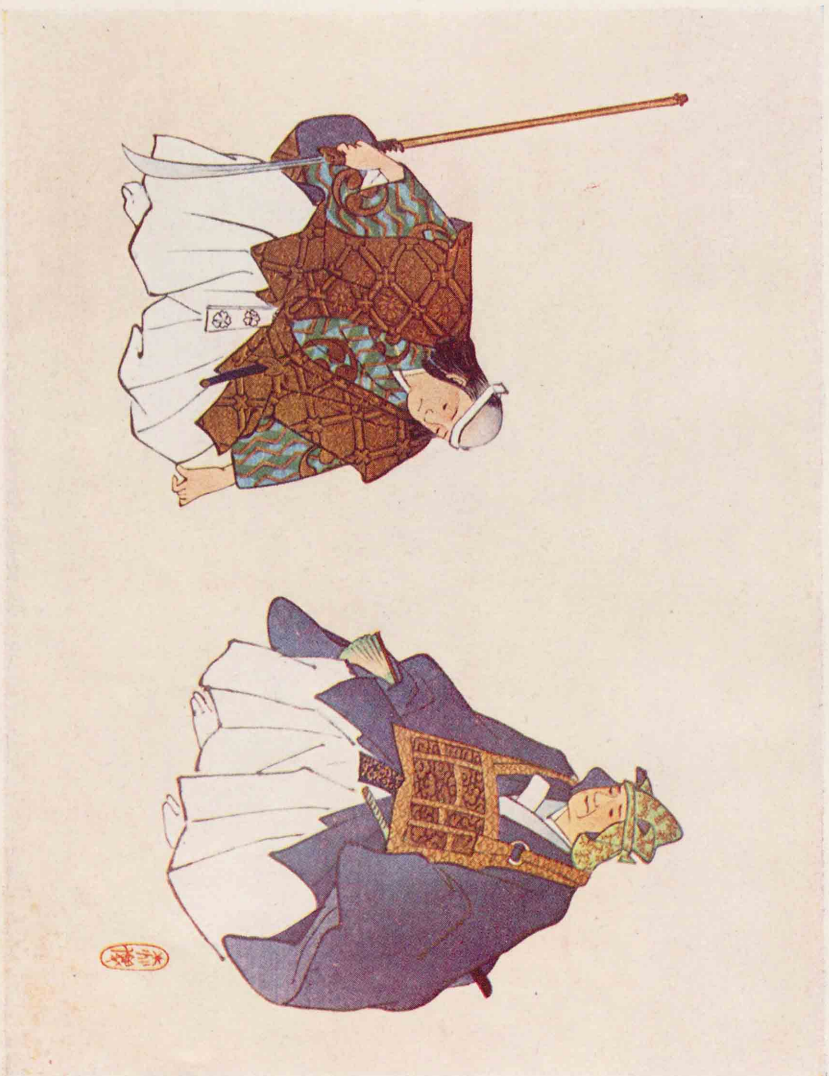
後シテ  
 常世。  
 ワキ  
 時頼。  
 ツレ  
 近臣。  
 狂言  
 従者。

後シテ「如何にあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふは誠か。なに、夥  
 しう上るとや。おうさぞあるらん。東八箇國の大名、小名、思ひく  
 の鎌倉入、さぞ見事にてや候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金  
 銀を延べたる太刀、刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間きらびやか

に、打連れく上る中に、常世が常に變りたる、馬物具や打物の、物其の  
 物にあらざる氣色。さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るま  
 じと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。同「急  
 げどもく、弱きに弱き柳の絲の、シテ「よれによれたる瘦馬なれば、  
 同「打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひ  
 かけたり。ワキ「如何に、誰かある。ツレ「御前に候。ワキ「國々の軍勢  
 は皆々來りてあるか。ツレ「さん候。悉く參りて候。ワキ「其の諸軍  
 勢の中に、如何にもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せた  
 る馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此方へ來れと申し  
 候へ。ツレ「畏つて候。如何に誰かある。狂言「御前に候。ツレ「君よ  
 りの御諛には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持  
 ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へ  
 參れとの御事にて候。狂言「畏つて候。如何に申し候。シテ「何事に



て候ぞ。狂言「急いで御前へ御参り候へ。シテ「何と、某に御前へ参れと候や。狂言「なか／＼の事。シテ「あら、思ひ寄らずや。定めて人たがへにて候べし。狂言「いや／＼、其の方の事にて候。其の仔細は、諸軍勢の中にて、如何にも見苦しき武者を連れて参れとの御事にて候が、見申せば、そなた程見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御参り候へ。シテ「何と。たとへば諸軍勢の中に、如何にも見苦しき武者に参れと候や。狂言「なか／＼の事。シテ「さては某が事にて候べし。畏つたと御申し候へ。狂言「心得申し候。シテ「げに／＼、是も心得たり。某敵人、謀叛人と申しかすめ、御前へ召し出され、頭かぶを刎ねられん爲なるべし。よし／＼それも力なし。いで／＼御前に参らんと、大床さして見渡せば、同「今度の早打に、／＼上り集るつはもの、綺羅星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、其の外數人並み居つゝ、目を引き指をさし、笑ひ合へる其の中に、シテ「横縫のちぎれ





たる、同「古腹巻に鑄長刀、やうく」に横たへ、悪びれたる氣色もなく、  
参りて御前に畏る。ワキ「やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門常  
世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ、見忘れてある



北條時頼

か。いで汝佐野にて我に申  
せしよな。今にてもあれ鎌  
倉に御大事出で来るならば、  
ちぎれたりとも其の具足取  
つて投げかけ、鑄びたりとも  
其の長刀を持ち、瘦せたりと  
もあの馬に乗り、一番に馳せ  
参ずべき由申しつる、言葉の末をたがへずして、参りたるこそ神妙な  
れ。先づ今度の勢遣ひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽  
か知らん爲なり。又當参の人々も、訴訟あらば申すべし。理非に依



つて其の沙汰致すべき所なり。先々沙汰の始には、常世が本領佐野の莊三十餘郷返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を伐り、火に焚きあてし志、何時の世にかは忘るべき。いで其の時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。其の返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松えだ、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、シテ「常世は之を賜はりて、同「常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、初め笑ひしともがらも、是程の御氣色さぞ羨ましかるらん。さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。シテ「其の中に常世は、同「その中に常世は、喜の眉を開きつゝ、今こそ勇め此の馬に、打乗りてかみつけや、佐野の船橋取離れし、本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける。」

「寶生流謠本」

五重塔

幸田露伴の小説。所謂塔は假説の感應寺に、のつそり十兵衛といふ者の手で建立せられたもの。

幸田成行

文學者。文學博士。號は露伴。慶應三年東京市生。

圓道

感應寺の役僧。爲右衛門同寺の用人。

四一 五重塔



幸田露伴

八百八町百萬の人みな生ける心地せず、顔色さらにはあらばこそ。中にも分けて驚きしは圓道、爲右衛門、折角僅かに出來上りし五重塔は揉まれ揉まれて、九輪は動き、頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り、楯をも貫くべき雨の打付り來る度、撓む姿、木の軋る音、復る姿、又撓む姿、軋る音、今にも覆らんず様子に、あれ／＼危し、仕様は無きか。傾覆られては大事なり。止むる術も無き事か。雨さへ加はり來りし上、周圍に樹木もあらざれば、未曾有の風に基礎狭くて丈のみ高き此の塔の堪へんこと覺束なし。本堂さへもこれ程に動けば、塔は如何許りぞ。風を止むる呪文はきかぬか。かく恐ろしき大暴風雨に、見舞ひ來べ



源太  
十兵衛の親方  
川越源太郎。

き源太は見えぬか。まだ新しき出入なりとて、重々來では叶はざる  
十兵衛見えぬが緩怠なり。他さへ斯程氣づかふに、己が爲し塔氣に  
かけぬか、あれ〜危し、又撓んだわ。誰か十兵衛招びに行けといへ

ども、天に瓦飛び、地上に砂  
利の舞ふ中を行かんとい  
ふ者なく、漸く褒美の金に  
飽かして、掃除人の七藏爺  
を出しやりぬ。



毫碌頭巾に首をつゝみ

て、其の上にも雨を凌がん用意の竹の皮笠引き被り、鳶子合羽に胴締し  
て、手ごろの杖持ち、怖々ながら烈風強雨の中を駈け抜けたる七藏爺  
やうやく十兵衛が家に到れば、これはまた酷い事、屋根半分はもう疾

のつそり  
十兵衛の綽名。

うに風にとられて、見るさへ氣の毒な親子三人の有様、隅の方にかた  
まり合うて、天井より落ち來る點滴の飛沫を古藪で僅かに避け居る  
始末に、扱ものつそりは氣に働の無い男と呆れ果てつゝ、これ棟梁殿、  
此の暴風雨に左様して居られては濟むまい。瓦が飛ぶ、樹が折れる。  
戶外はまるで戦争のやうな騒ぎの中に、お前の建てられた彼の塔は  
どうあらうと思はるゝ。丈は高し、周圍に物は無し。基礎は狭し。  
どの方角から吹く風をも正面に受けて揺れるわ、揺れるわ、旗竿ほど  
に撓んでは、きち〜と材の軋る音の物凄さ。今にも倒れるかと、圓  
道様も爲右衛門様も、膽を冷したり縮ましたりして、氣が氣では無く  
心配して居らるゝに、一體ならば迎ひなど受けずとも、此の天變を知  
らず顔では濟まぬお前が、出て來ぬとは餘りな大勇。さあ〜一  
所に來てくれ、來てくれ。爲右衛門様圓道様が連れて來いとの御命  
令だわ。えゝ、吃驚した、雨戸が飛んで行つてしまつたのか。是だも



の塔が堪るものか。愚圖々々せずと身支度せい、疾くく。」とせり立つれば、十兵衛不興氣の目でちつと見ながら、あゝ構うてくれずともよい、出ては行かぬわ。風が吹いたとて騒ぐには及ばぬ。七藏殿御苦勞でござりましたが、塔は大丈夫倒れませぬ。何の、これ程の暴風雨で倒れたり折れたりするやうな脆い物ではござりませぬわ。十兵衛が出掛けて参るにも及びませぬ。圓道様にも爲右衛門様にも左様云うて下され。大丈夫、大丈夫でござります。」と落付き拂つて身動きもせず答ふれば、七藏すこし膨れ面して「まあ兎も角も俺と一所に来てくれ。来て見るがよい。彼の塔のゆさくきちく」と動く様を、此處に居て目に見ねばこそ威張つて居らるれ。御開帳の幟のやうに、頭を振つて居る様を見られたら、何程なんば十兵衛殿寛濶な氣性でも、お氣の毒ながら魂がふわりくとならるゝであらう。陰で強いのが役にはたゝぬ。さあ、一所に來たり來たり。それ又吹

くわ、嗚呼恐ろしい。圓道様も爲右衛門様も定めし肝を煎つて居らるゝぢやろ。さつさと出掛けさつしやれ。」と遣り返す。「大丈夫でござりまする。御安心なさつて御歸り。」と突つばる。「其の安心が左様手易くは出來ぬわい。」と、うるさく云ふ。「大丈夫でござりまする。」と同じことをいふ。末には七藏焦れこんで、「何でも彼でも來いというたら來い。我等の言葉と思うたら違ふぞ。圓道様爲右衛門様の御命令ぢや。」と語氣荒くなれば、十兵衛も少しむつとして「わしは圓道様爲右衛門様から五重塔を建ていと命令かりませぬ。御上人様は定めし風が吹いたからとて十兵衛呼べとは仰しやりますまい。もしも御上人様迄が『塔あぶないぞ、十兵衛呼べ。』と云はるゝ様にならば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬戸に乗つかゝる時、天命を覺悟して駈けつけませうなれど、御上人様が一言半句十兵衛の細工を御疑ひなさらぬ以上は、何心配の事も無し。餘の人たち



が何を云はれうと、紙を材にして仕事もせず、魔術も手抜きもして居ぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに、雨の降る日も、風の夜も、樂々として居ります。暴風雨が怖いもので無ければ、地震が怖うもござりませぬと圓道様にいうて下され。」と、愛想なく云ひ切るにぞ、七藏仕方なく風雨の中を駈け抜けて感應寺に歸りつき、圓道爲右衛門に此の由云へば、さても其の場に臨んでの智慧の無い奴め、何故其の時に上人様が十兵衛來いとの仰ぢやとは云はぬ。是非は無い、も一度行つて上人様の御言葉ぢやとたばかり、文句いはせず連れて來い。」と圓道に烈しく叱られ、忌々しさに呟きつゝ、七藏再び寺門を出でぬ。

「さあ十兵衛、今度は是非に來よ。四の五のは云はせぬ。上人様の御召ぢやぞ。」と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衛聞くより身を起して、なにあの、上人の御召しなさるとか。七藏殿それは

眞實でござりまするか。嗚呼なさけ無い。何程風の強ければとて、頼みきつたる上人様までが、此の十兵衛の一心かけて建てたものを、脆くも壊破るゝかのやうに思し召された。口惜しい。世界に我を慈悲の眼で見て下さるゝ唯一つの神とも佛とも思つて居た上人様にも、眞底からは我が手腕たしかと思はれざりしか、つくづく頼もしげ無き世間、もう十兵衛の生きがひ無し。たま／＼當時に雙びなき尊き知識に知られしを、これ一生の面目と思つて、空に悦びしも眞に果敢無き少時の夢。嵐の風のそよと吹けば、丹誠凝らせし彼の塔も倒れやせんと疑はるゝとは、えゝ腹の立つ、泣きたいやうな、それほどおれは腑の無い奴か、恥をも知らぬ奴と見ゆるか。己が爲したる仕事、恥辱を受けても、のめ／＼面押しうて己は生きて居るやうな男と我は見らるゝか。假令へば彼の塔倒れた時、生きて居ようか、生きたからうか。えゝ口惜しい、腹の立つ。それほどおれがさもしから

お浪  
十兵衛の妻。



うか。嗚呼々々命ももういらぬ。我が身體にも愛想が盡きた。此の世の中から見放された十兵衛は、生きて居るだけ恥をかき、苦しみを受ける。え、いつその事塔も倒れよ。暴風雨も此の上烈しくなれ。少しなりとも彼の塔に損じの出来てくれよかし。空吹く風も、地打つ雨も、人間ほど我には情無からねば、塔破壊されても、倒されても、悦びこそせめ、恨みはせじ。板一枚の吹きめくられ、釘一本の抜かるゝとも味氣無き世に未練はもたねば、物の見事に死んで退け、責めては後にて弔はれん。一度はどうせ捨つる身の、捨て處よし、捨て時よし。佛寺を汚すは恐あれど、我が建てしもの壊れしならば、其の場を一步立去り得べきや。諸佛菩薩も御許しあれ。生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てん。」と、夢路を何時の間にか辿り、七藏にさへ何所か別れて、此所は、お、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押し明けて、今しもぬつと十兵衛半身

一つ残りし耳  
先に源太の弟  
子に一方の耳  
を斬り取られ  
たことがある。

男  
源太。

あらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の、目も明けさせず面を打ち、一つ残りし耳までも、ちぎらんばかりに猛風の、呼吸さへ爲せず吹きかくるに、思はず一足退きしが、屈せず奮つて立出でつ。欄を掴んで屹と睨めば、天は五月の闇より黒く、たゞ嘈然たる風の音のみ宇宙に充ちて物騒がしく、さしも堅固の塔なれど、虚空に高く聳えたらば、どうとうどつと風の来る度ゆらめき動き、荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟の、あはや覆らん風情、流石覺悟を極めたりしも、又今更におもはれて、一期の大事死生の岐路と、八萬四千の身の毛を豎たせ、牙咬みしめて眼を睜り、いざ其の時はと手にして來し六分鑿の柄割るゝばかり引つ掴んでぞ天命を靜かに待つとも、知るや識らずや、風雨いとはず、塔の周圍を幾度となく徘徊する怪しの男一人ありけり。「五重塔」



島崎雪村

詩人、小説家。  
名は春樹。明治五年長野縣生。

四二 常磐樹

島崎雪村

あゝ雄々しきかな傷ましきかな  
 かの常磐樹の落ちず枯れざる  
 常磐樹の枯れざるは  
 百千の草の落つるより  
 傷ましきかな  
 其の枝に懸る朝の日  
 其の幹を運る夕月  
 など行く旅の迅速なるや  
 など電の影と馳するや  
 蝶の舞  
 花の美

など遊ぶ日の世に短きや  
 など其の醉の早く醒むるや  
 蟲草の葉に悲しめば  
 一時にして既に霜  
 鳥潮の音に驚けば  
 一時にして既に雪  
 木枯高く秋落ちて  
 自然の色はあせゆけど  
 大力天を貫きて  
 坤軸遂に静息なし  
 ものみな速くうらがれて  
 永き寒さも知らぬ間に  
 汝千歳の時に嘯き



獨し立つは何の力ぞ  
白銀しろがねの花霏々として  
吹雪の煙闇き時  
四方は水に閉されて  
江海えうかいも音をひそむ時  
汝緑の陰も朽ちせず  
空を凌ぐは何の力ぞ  
立てよ友なき野邊の帝王すいらぎ  
ゆゝしく高く立てよ常磐樹  
汝の長き春なくば  
山の命も老いなんか  
汝の深き息なくば  
谷の響も絶えなんか

あしたには葉をうつ雲みぞれ  
千草も知らぬ冬の日の  
嵐に叫ぶうきなやみ  
いづれの日にか  
氷は解けて  
其の葉の涙  
消えんとすらん  
あゝよしさらば枝も摧けて  
緑の色の落ちなん日まで  
雲浮かば  
無縫の天衣  
風立たば  
不朽の緒琴



おごそかに  
立てよ常磐樹  
あら雄々しきかな傷ましきかな  
かの常磐樹の落ちず枯れざる  
常磐樹の枯れざるは  
百千の草の落つるより  
傷ましきかな 「落梅集」

### 四三 國の柱

北 畠 親 房

吉野のみゆきに先立ちて義兵を起す輩も侍りき。臨幸の後には、  
國々にも御志ある類あまた聞えしかど、次の年も暮れぬ。又の年戊  
寅の春二月、鎮守の大將軍顯家卿、又親王を先立て申し、重ねて打上る。  
海道の國々を悉く平げて、伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京にな

北畠親房  
南朝の忠臣。  
正平九年歿、  
年六十二。  
次の年  
元弘二年。  
顯家卿  
親房の子、北  
畠顯家。延元  
三年陣歿、年  
二十一。

ん着きにける。それより所々の合  
戦あまたたび互に勝負侍りしに、同  
五月和泉の國石津といふ所にての  
戦に時や至らざりけん、忠孝の道こ  
こにて極まり侍りにき。苔の下に  
も埋れぬものとは、唯いたづらに  
名をのみぞ留めてし。心うき世に  
も侍るかな。官軍猶心を勵まして  
男山に陣を取りて、暫く合戦ありし  
かど、朝敵忍びて社壇を焼き拂ひしより、事成  
らずして引き退く。北國に有りし義貞も、度  
度召されしかど上りあへず、させる事なくて  
空しく成りぬと聞えしかばいふばかりなし。



北 畠 親 房



親房 押花



陸奥の御子  
義良親王、即ち後村上天皇。  
顯信朝臣  
家顯の弟。

恒良親王・成良親王  
共に後村上天皇の御兄。

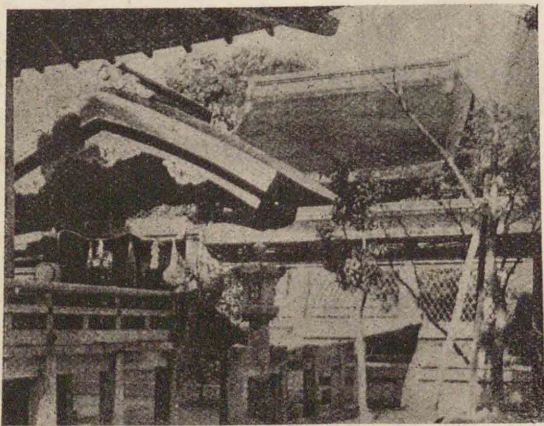
さてしも止むべきならずとて、陸奥の御子又東へ向はしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に叙し、陸奥の介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ふ。「道の程もかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。」となん申されし。異母の御兄も、あまたましき。同母の御兄も、前東宮恒良親王成良親王ましき。しに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船のよそひし、九月の初纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより空の景色おどろしく海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方にたゞよはれ侍りしに、いとど波風夥しくなりて、あまたの船行方知らず侍りけるに、御子の御船はさはりなく伊勢の海に着か

内の海  
東條の浦。

せ給ふ。顯信朝臣は本より御船にさぶらひけり。同じ風のまぎれに、東國をさして常陸國なる内の海に着きたる舟侍りき。方々に漂ひし中に、この二つの舟、同じ風にて東西に吹き分けらる。末の世にはめづらかなるためしにぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なきひなの御住居もいかかと覺えしに、皇大神のとどめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野へ入らせましき。御目の前にて天位を繼がせ給ひしかば、いとど思ひ合はせられてたふとくも侍るかな。

又常陸はもとより心ざす方なれば、御志ある輩相計らひて義兵強くなりぬ。奥州野州の守も、次の年の春重ねて下向して、各國に就き



阿部野神社



戊寅の年  
延元三年。

侍りにき。さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮には元の延元の號なれば、國々も思ひくゝの年號なり。もろこしにはかゝるためし多けれど、この國には例なし。されど四とせにもなりぬるにや。大日本島根は本よりの皇都なり。内侍所・神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。「神皇正統記」

### 四四 徒然草抄

吉田兼好

吉田兼好  
文學者。正平  
五年歿、年六  
十九。

栗栖野  
山城國宇治郡  
醍醐の邊。

負の體

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ、篋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。闕伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、

睦月  
如月  
彌生  
卯月  
辰月  
巳月  
未月  
申月  
酉月  
戌月  
亥月  
師走

大きなる柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。(第十一段)

折節のうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋



吉田兼好

れもさるものにて、今ひとときは心も浮き立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、桓根の草もえいづる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつづきて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。

ものあはれ  
春はたゞ花の  
ひとへに咲く  
ばかり物のあ  
はれは秋ぞま  
される。拾遺  
集、讀人不知



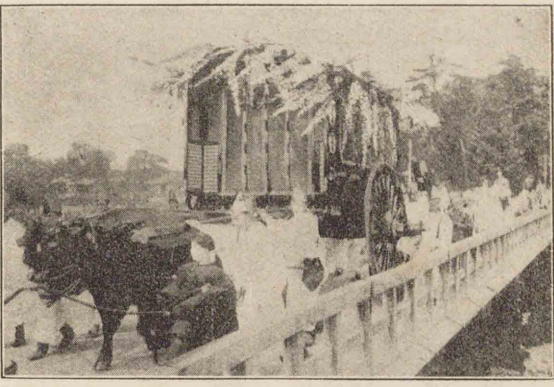
傳生合  
海伴合

花橘 五月待つ花橘の香なかけは昔の人の袖の香ぞする。古今集、讀人不知。

梅の匂 色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも。古今集、讀人不知。

祭 加茂の葵祭。人のこひしさわが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞこひしかりける。凡河内躬恒。

六月 祓りなむ  
六月 祓りなむ  
六月 祓りなむ



祭 葵

青葉になり行くまで、よろづにたい心のみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ古のことも立返りこひしう思ひ出でらる。山吹の清げに藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。

灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたぐなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁鳴

御佛名 十二月十九日から三日間佛名を唱へる公事。

きて來る頃、萩の下葉色づくほど、早稻田刈りほすなど、取り集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをささ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年のくれ果てて人毎に急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんことなき。公事と



秋 月 六

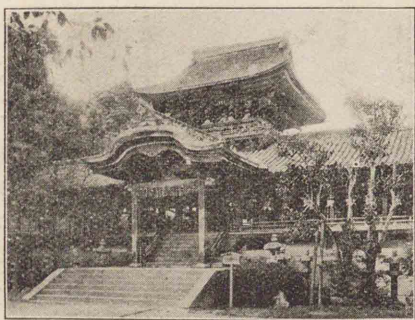


荷前の使  
年の末に十陵  
八墓に幣帛を  
奉らせられる  
勅使。  
追儼  
十二月晦日の  
夜に悪鬼を追  
ふ公事。  
四方拜  
元旦の刻に  
天皇が四方及  
び山陵を拜し  
給ふ儀式。

も繁く、春のいそぎに取り重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。  
追儼より四方拜に續くこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう  
暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門たゝき走りありきて、  
何事にかあらん、ことごとくしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よ  
りさすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人の來  
る夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほす  
ることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけし  
き、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。  
大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれ  
なれ。(第十九段)

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、われに心をおき、ひきつ  
くろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやは。などいふ人もありぬべ

仁和寺  
山城國葛野郡  
花園村御室に  
ある寺。  
石清水  
山城國綴喜郡  
男山八幡宮。  
極樂寺  
男山の麓にあ  
る寺。  
高良  
男山の麓にあ  
る社。



石清水八幡宮

けれど、なほげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人の、う  
ちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。(第卅七段)

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺  
えて、ある時思ひ立ちて唯一人かちより詣で  
けり。極樂寺高良など拜みて、かばかりと心  
得て歸りにけり。さてかたへの人に會ひて、  
「年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過  
ぎて貴くこそおはしけれ。そも参りたる人  
ごとに、山へ登りしは何事かありけん。ゆか  
しかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思  
ひて山までは見ず。」とぞ云ひける。少しの事にも先達は有らまほ  
しきことなり。(第五十二段)



○ いやしげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き、前栽に石草木の多き、家の内に子孫の多き、人に逢ひて詞の多き、願文に作善多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、本文(分冊) 文車の文、塵塚の塵。(第七十二段)

○ 「何事も入りたぬさましたるぞよき。よき人は知りたることとて、さのみ知りかほにやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥づかしきかたもあれど、みづからもいみじと思へる氣色、かたくななり。よく辨へたる道には、かならず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。(第七十九段)

ある人弓射る事を習ふに、諸矢を手挟みて的に對ふ。師の曰く、初心の人、二つの箭を持つこと勿れ。後の矢を頼みて初の矢に等閑の心あり。毎度たゞ得失なく、此の一矢に定むべしと思へ。」と云ふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心自ら知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事に涉るべし。道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕有らんことを思ひて、かさねて懇ろに修せんことを期す。況や一刹那の中に於て懈怠の心あることを知らんや。何ぞ只今の一念に於て直ちにすることの甚だ難き。(第九十二段)

○ 今日はその事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出で来て、まぎれ暮らし待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り頼みたるかたのことは違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつ



ることは事なくて、やすかるべき事はいと心ぐるし。日々（日々）に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくの如し、一生の間もまた（また）しかなり。かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬこともあれば、いよくものは定めがたし。不定と心得ぬのみ、まことに違はず。（第百八十九段）

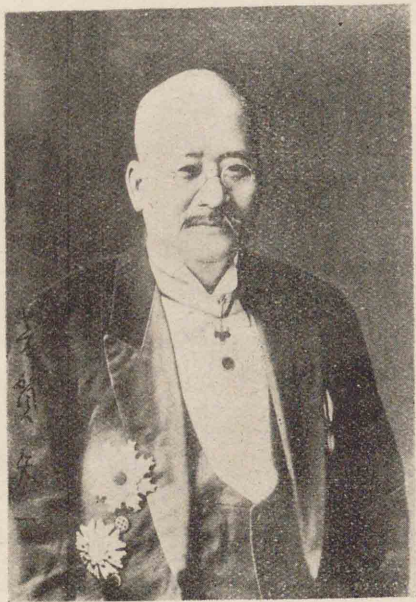
### 四五 日本趣味

## 芳賀矢一

芳賀矢一  
國文學者。文學博士。東京帝國大學教授。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

古代人類も美しい曲玉を造つて身の飾とした。眞澄の鏡を造つて自分の姿を映した。鋭利な刀劍を造つて武者振ひした。情熱燃えるが如き歌も詠んだ。優婉にして花の如き文章も綴つた。山水の間に逍遙しては、その幽邃を探り、その清楚をたづねて、或は美想を吐き、或は雅趣を抒べた。花の散るのにも涙を濺ぎ、鳥の啼くのにも心を傷めた。かくして自ら慰めたばかりでなく、時には之を以て人

と人との愛着を告げ、時には之を以て人と神との交渉に用ひた。これ趣味が高かれ低かれ、人間生活の一大要素たるを示すものである。趣味生活は知識の進歩につれて向上すべきである。かの知識の



一 矢 賀 芳

と範圍と程度とは、單純で、狭少でかつ低級であつた。

理知の進歩につれて、趣味性よりする文化生活も廣汎になり、複雑になり、かつ高尚になる傾向のあるのは、勿論であるけれども、情操の







と號す。康永二年歿。年八十一。鎌倉の刀匠。  
 義弘 正宗の門人。郷氏、越中の  
 吉光 山城粟田口の  
 人。建治弘安  
 頃の人。  
 宗近 山城の刀匠。  
 三條小鍛冶と  
 稱す。長元六  
 年歿。年七十。  
 安綱 伯耆國大原の  
 刀匠。大同年  
 間の人。  
 友成 備前の刀匠。  
 永延正暦年間  
 の人。  
 則宗 備前の刀匠。  
 備前太夫と稱  
 す。元暦頃の  
 人。  
 出雲の神社  
 出雲杵築町に  
 ある。祭神大  
 國主命。  
 東大寺 華嚴宗の大本

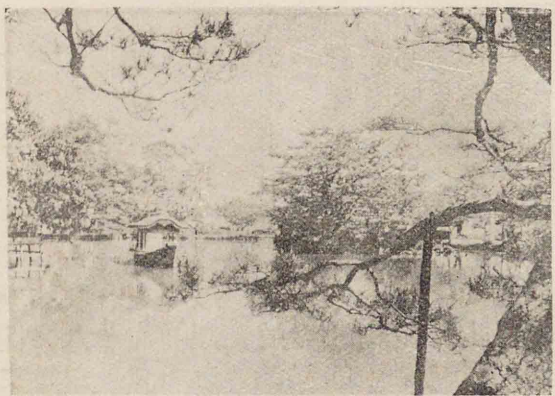
く、名工としては、正宗を第一として、義弘、吉光、宗近、安綱、友成、則宗など、日本刀の威名を恣にして居る。畏くも天皇の御身で鍛刀の術に長けさせられた御方もあつた。幾百回の鍛冶研磨を経た名刀は、秋水滴るばかりで、明玉の上に一點の塵も止めないやうな崇高さである。刀の鏝や目抜などにも美しい意匠を凝らしたのも澤山あつて、それが多數大英博物館などに陳列してある。英人などが之を見て、この殺人の道具に美術の技巧を加へた日本人の優美な心もちに感心してゐる。

建築の方面を観るのに、出雲の神社、伊勢の皇大神宮、奈良の東大寺、平安時代の古社寺を始として、金閣寺、銀閣寺、日光の東照宮、舊幕時代の各城郭より、一般都鄙の民屋の構造、庭園の風致に至るまで、その目的と位置とによりて、規模様式は千差萬別であるけれども、何れも皆我が國民の頭腦中に描かれた意匠と趣向との反映であるのは一て

山、聖武天皇の御建立。

ある。

室内生活に就いて考へて見るのに、間取の具合、床の間、欄間の掛物



圖六 兼 澤 金

類にも、陶磁器、漆器の繪模様にも、彫刻物などにも、我が國民の精神が發露されてゐる。殊に富裕にもあらぬ家庭でさへ、茶生花、琴、三味線を玩んで居るのは、多年修練して來た風雅な生活ぶりではないか。茶道が我が國民の生活に韻致を加味したことは争はれない事實である。茶味と禪味と俳味とは三にして一にして三。この三味は渾融溶化されて、我が國民の腦裡に深く浸潤し、生活の各方面に流れ出て居る。江戸時代は正に其の渾成期であつた。



義政  
足利八代將軍。

紹鷗  
武野氏。泉州  
堺の人。利休  
の師。永祿元  
年歿、年五十  
三。

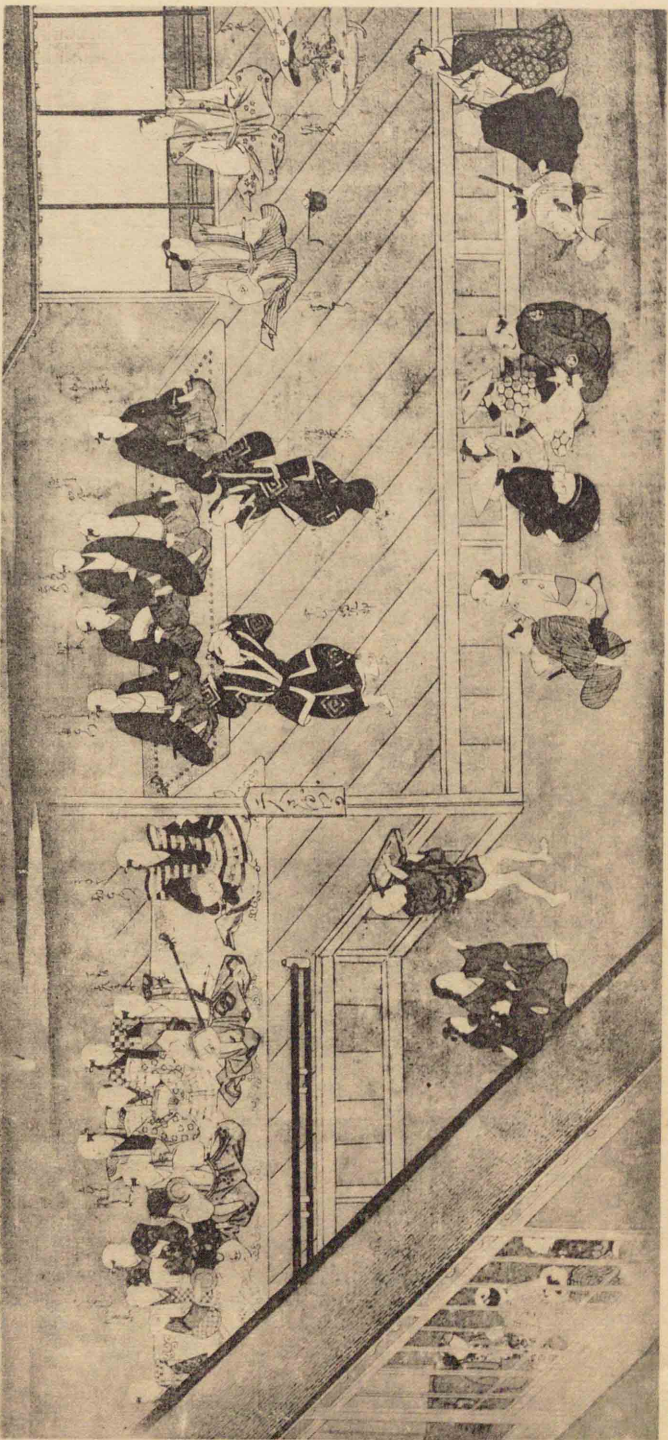
利休  
泉州堺の人。  
千家流茶道の  
祖。千宗易、利  
休はその號。  
天正十九年歿、  
年七十一。

あまゆふの茶(利休)  
の味は、  
あまゆふの地

銀閣寺に往つて観ると、今日でも四疊半の瀟洒な茶室で抹茶の接待を受ける。それで遊覽者はおのづから義政將軍の風韻を想像するのである。豊太閤に至つて、茶の湯は更に盛となつた。紹鷗だの、利休だのといふ名人が頭を擡げて、一代の宗匠ぶりを示した。茶の湯には清寂簡素を尙ぶけれども、目に見えぬところに一種の凝があつて、言ひしらぬ風韻を呼び起すものである。そこで是に幾つも流派が出来て、普く茶道が傳播して來た。

禪味の傳播は宗教的ではなく、武士たるものの一種の精神修養上から味ははれて、その深沈靜慮の工夫が武士的修練に適するとされたからである。武士で參禪するものは少くなかつた。茶の清寂と禪の沈靜とは共通の點がある。俳諧もまた歌の優雅に似ず、婉麗に流れず、嬌態に走らず、卑俗と見えて脱俗したところ、民衆的であつて閑寂の一體を成したところは、茶味・禪味と合致し易い點がある。





紫式部  
藤原宣孝の妻。  
上東門院に仕  
へた。長元四  
年歿。年五十  
七。

清少納言  
清原元輔の女。  
一條天皇の后  
定子に仕へた。  
歿年不詳。

西鶴  
浮世草子の作  
者。又俳人。  
大阪の人。元  
祿六年歿。年  
五十二。

門左衛門  
淨瑠璃作者。  
近松氏。號は  
巢林子。又は  
平安堂。長州  
秋の人。享保  
九年歿。年七  
十二。

岩佐又兵衛  
浮世繪の始祖。  
名は勝以。寛  
永年中最も弘  
く行はれた。  
慶安三年江戸  
に歿。

菱川派  
菱川師宣の門  
流。

歌麿派  
北川歌麿の門

また紫式部・清少納言以下の才媛が、平安時代を飾つて居るやうに、西鶴や門左衛門は江戸時代の町人趣味を物語つてゐる。江戸時代の三絃樂及び演劇の發達もまた著しい偉觀である。

江戸時代に起つて大いに時好に投じたるものに浮世繪といふものもある。從來の繪畫は、多くは支那の畫風に摸倣し、その山水人物など主として支那の形態を描寫したやうであつたが、岩佐又兵衛といふ人が出て、當時の風俗を描きはじめてから、菱川派・歌麿派・歌川派・北齋派などの諸派が續出して、それ／＼旗幟を樹てた。殊に元祿年間には風俗が華奢を極めて、一時代を劃するほどの情態であるのを、浮世繪師の巧みに寫實したのなどは、平民文學の發達と共に、最も目ざましい事であつた。

着物の紋所は先祖を崇び、系圖を重んじた我が國風から出たので、世界に無比なものである。しかもその意匠にあらはれた嗜好にも、



流。歌川派  
流。歌川西春の門  
北齋派  
流。葛飾北齋の門

日本人の國民性がほの見えるのである。  
今や外國思想の輸入は底止する所を知らず、我が國民の之に對する態度は、たゞ好奇心に驅られるばかりで、咀嚼玩味と選擇取捨とに意を用ひる暇がなく、外國趣味の歡迎せられてゐるものの中には、輕浮で醜穢なものもあつて、從來の國民性を傷つける憂がある。民族心理學や歴史哲學の研究上から品評すれば、低級な趣味生活に甘んじて居る國民は賞揚しようとしても賞揚することが出来ない。我が國民たる者も一時の迷夢から覺めて、眞に日本趣味の向上を計らなければならぬ。「日本趣味十種」

新制中等國文卷四終

昭和五年三月三日  
文部省檢定濟  
中學校國語科用

昭和四年九月二十二日印  
昭和四年九月二十七日發  
昭和五年三月四日訂正再版印刷  
昭和五年三月七日訂正再版發行

新制中等國文	全五冊	
卷號	定價	昭和六年臨時定價
卷一、二	各金六拾六錢	各金壹圓四錢
卷三、四	各金六拾四錢	各金壹圓壹錢
卷五	金六拾貳錢	金九拾八錢



不許複製

著者 松村武雄  
發行者 大葉久吉  
發行所 大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地  
印刷者 柏佐一郎

發行所

東京市日本橋區本銀町（振替東京二八〇）  
大阪市西區阿波堀通四（振替大阪四三）  
神戸市元町通五丁目（振替大阪九五二）

寶文館









広島大学図書

2000044026

